バトルシップ・シスターズ

彼岸花ノ丘

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦二三四一年。人類文明は崩壊し、地上は荒廃しきっていた。それでも人類は未だ存続し、戦闘艦に乗って大海原へと繰り出す。日々の糧として、唯一豊富な魚を得るために。

その魚が、戦闘艦をも沈める巨大な怪魚だとしても……

※文明崩壊後の世界で姉妹が戦艦を操り、巨大生物と戦うお話。某新人賞二次落ちを改訂したものです。全十九話で０９／３０に完結予定。

『カクヨム』『小説家になろう』にも投稿しています。

目次

01 1
02 13
03 27
04 36
05 51
06 65
07 79
08 89
09 100
10 114
11 122
12 133
13 142
14 157
15 169
16 181
17 196
18 214
19 220

01

雲一つない青空が広がる真昼の大海原を、一隻の船が走っていた。
それは全長五百メートル以上ある巨体を誇り、何キロにも渡って轟くエンジン音を奏でている。船体表面には無数の傷が刻まれていて、数多の戦場を切り抜けてきた事を物語っていた。
そして甲板に乗っているのは、巨大な砲台。
砲台は多数乗せられていたが、特に巨大な砲台が三つある。一つの砲台には三つの砲身が存在し、その砲身の口径は六十センチに達していた。ここから放たれる砲弾は分厚い艦船の装甲を易々と射抜き、致命傷を与える事だろう。砲台は船体前方に二つ、後方に一つが配置され、それぞれが睨むように海原へと向けられている。
この巨大な砲台同士の間を埋めるように設置された、口径四十センチの砲を二つ繋げた砲台が合計十六門、船体側面には口径十センチの砲台が片側三十ずつ装備されていた。機銃も何十という数が配置されている。全身が武器だといっても過言ではない姿故か、ただの『金属』の塊にも拘わらず舟は強い威圧感を放つ。
戦いになれば、どんな相手だろうと負ける事などあり得ない……目の当たりにした人

間は誰もがそう思うだろう。
「ひぃいいいん！　もう駄目だぁ、お終いだぁ！」
が、船に乗っている齢十六ほどの『少女』は、そうは思っていないようだった。
「さっきから何弱気になってんのよ！　そんな暇あったらさっさとエンジン出力上げて！」
弱気になっている少女に、その少女が座っている座席の後ろに居る、栗色の髪をした『少女』が喝を入れる。弱音を吐いている方とは違い、こちらは随分と強気な様子。表情は凛としていて、口調も強い。
しかし弱気になっている少女は無理だと言いたげに、自前の黒髪が乱れるほど勢いよく首を横に振った。こちらは今にも泣きそうなぐらい目を潤ませ、身体はぷるぷる震えている。顔立ちは強気な少女と瓜二つだが、目元口元が醸す雰囲気は真逆。例え髪色が同じだったとしても、見分けは簡単に付くだろう。
二人の少女達が居るのは、数多の砲台を乗せたこの船の操舵室。
室内に少女達以外の人影はない。人員の代わりとばかりに無数の機械が置かれており、それらから生じた熱が室温を高めている。高熱をやり過ごすため、少女達はどちらも半袖ミニスカートのセーラー服という可愛らしくて涼しい恰好をしていた。
後部座席に座る勝気な少女の名前はアカネ、前部座席に座る弱気な少女の名はアオ

イ。彼女達は双子の姉妹である。
　そしてアカネはこの船『わだつみ』の船長であり、アオイは操舵手だった。
「さっきからやってるよぉ！　やってるけど駄目だから弱気になってんの！」
「なんかあるでしょ！　トイレとか冷蔵庫とか、そういう要らない場所の電力切れば幾らか推力に回せるんじゃない!?」
「だからそれも全部やってるの！　もう搾りカスすら出せませんーっ！」
　わいわいぎゃーぎゃーと、二人の姉妹は大声で言い争う。それもかなり必死に。弱気なのはアオイの方なのだが、言葉に押されているのはアカネの方。段々と強気だった表情が強張り、額に冷や汗が流れる。
「ちっ！　どうにかしないと不味いわね……！」
　言葉の応手の果てに、先に折れたのはアカネ。彼女はアオイとの口論を止めるや、天井から垂れ下がっている『望遠レンズ』を覗き込む。
　覗き込んだレンズには、海面で激しく水飛沫が上がっている光景が映っていた。
　大海原故に比較するものが何処にもないが、望遠レンズに刻まれた複雑怪奇な目盛りにより、飛沫が三十メートルの高さまで舞い上がっている事が分かる。更に猛烈な速さで移動しており、凡そ五十ノット　―　時速九十二・五キロメートル程度　―　もの猛スピードを出していた。何よりも問題なのは、その水飛沫はアカネ達の船目掛け直進し

ている事。『わだつみ』は全速力で水飛沫から逃げているが、ほぼ同じ速度であるため引き離せないでいる……いや、ほぼ同じ速度というのは嘘だ。実際には、水飛沫の方が僅かに速い。接触まで、あと十分ほどだろう。

そうしてアカネが観察を続けていたところ水飛沫が一際大きく飛び散り――――中から一匹の、煌く魚が跳ねた。

その魚は、体長が百五十メートルを超えている。まるで潜水艦が飛び出してきたかのようにずんぐりとした体躯をしており、頭に付いている二つの目は血走るかの如く赤く染まっていた。ばっくりと開かれた口には歯のような突起が無数に生えており、この魚の獰猛さを物語るかのようである。そして身体は黄金の光を放ち、昼間の陽光の中でもハッキリ見えるほどの強さで輝いていた。

なんとも恐ろしい姿を目の当たりにしたアカネは、大きく舌打ち。

「ああもう！　なんだって『カンパチ』がこんな場所にいんのよ！　コイツら浅瀬の生き物なのに！」

そしてその魚の名前を、悪態と共に吐き出した。

アカネは自らの座席の傍にあるレバーを操作。すると船体側面に備え付けられた口径十センチの砲台三十門が同時に動き、『カンパチ』と呼んだ巨大魚に狙いを定める。

次いで、十センチもの太さがある金属の塊（砲弾）が、轟音と共に一斉に放たれた。

もしも人間に当たったなら、一発で全身がバラバラに吹き飛ぶ威力の砲撃。コンクリートの壁どころか分厚い金属板である船体の装甲すら撃ち抜けるこの攻撃は、『カンパチ』の頭部へと集結するかのように集まり――――

ガキンッ！　という音と共に弾かれた。

『カンパチ』は砲撃をものともしなかった。『カンパチ』を包み込む黄金の光が、まるで壁のように立ち塞がったのである。三十発の砲弾が次々と撃ち込まれるが、『カンパチ』は怯むどころかスピードを落とす事すらしない。全くダメージとなっていなかった。

それでも鬱陶しいと思ったのか。『カンパチ』は大きく飛び跳ね、着水と同時に今まで以上に巨大な水飛沫を上げ……そのまま姿を消す。海面に水飛沫は上がっていない。船が走った後の、白い泡が見えるだけ。

無論、だからあの巨大魚は此処から居なくなった、などと考えるのは浅はかというもの。何しろ相手は魚なのだ。本来の住処は跳び上がってきた海上ではなく、海中である。

「潜られた！　ソナー再起動！」

「う、うん」

アカネの指示を受け、アオイは自身の眼前にあるコンソールを目にも留まらぬ速さで

叩く。と、床から一台の緑色のモニターが現れ、大きな円に、白い線がぐるぐると回る映像が映し出される。

やがて円の下側……この船の後方を示す場所を線が通った時、白点が映し出された。

「ひぃ!? 追ってきてる!」

「そりゃあ、追ってくるでしょ。アイツらは何時だって空腹なんだから」

取り乱すアオイに対し、アカネは苛立ちこそあるが冷静な口ぶりで答える。とはいえ、アカネとて焦っていない訳ではない。

あの巨大魚は、自分達の船を襲おうとしている。金属で出来た船とはいえ、体長百五十メートルもの怪魚に襲われれば船体に穴が開いてしまうだろう。船に穴が開いたら、そこから浸水する。それに『わだつみ』には燃料や火薬もたっぷりと積まれているのだ。金属が擦れて火花でも出そうものなら、船体を吹っ飛ばすほどの大爆発もあり得る。

なんとしてでも、あの『カンパチ』を打ち破らねばならない。幸いにしてそれを可能とする武器は積んでいる。甲板や船体側面にある砲台達だ。

だが、砲撃では海に潜っている相手を叩く事は出来ない。大量の海水が壁となり、威力が減衰してしまうからだ。海面に出ていても通じないのだから、海中に潜んでいる状態でダメージになる筈もなく。

「(なんとかして海面まで誘わないと……確実に、アイツが海面にやってくるタイミング

は……）」

ソナーの映像を見つめながら、アカネは思考を巡らせる。アオイが今にも泣きそうな顔で自分を見ている事に気付き、少し強張った笑みを無理矢理にでも浮かべた。

アカネは考える。考えて、考えて、考えて……やがてハッと、目を見開く。

続いて浮かべた笑みは、先程までと違って本心から浮かべたもの。

「アオイ！　そのまま全速前進！　私がやれって言うまで直進よ！」

「え？　あ、う、うん！」

アカネはアオイに指示を飛ばし、アオイは言われるがまま船を真っ直ぐ進ませる。

しばし、船内には機械の駆動音と、ソナーの等間隔な音だけが鳴り響く。

何度もちらちらと見てくるアオイに、アカネは何も言わない。じっと、ただただ押し黙る。

ソナーは海中に潜む怪物の姿を白点の形で示し続けており、その距離が少しずつだが縮まっている事を映し出す。機械故に『わだつみ』は疲れる事なく全速力で海を駆けるが、『カンパチ』もまた速度を落とさず追跡してくる。距離が縮むほどにソナーは返ってきた音を強く捉える事が出来、『カンパチ』の反応を色濃く映し出した。まるで、カウントダウンが始まるかのように。

「お、お姉ちゃん！　来てる！　もうすぐそこまで来てる！」

アオイが悲鳴染みた声で知らせるが、そんな事はアカネだって分かっている。分かった上で、アカネは待っているのだ。

アカネはじっとソナーを見続ける。瞬きすらせず、一瞬たりとも目を離さず――――やがて表示される白点はついに『わだつみ』の位置と重なった

瞬間、白点の色が薄くなったのをアカネは見逃さなかった。

ソナーは教えてくれたのだ。『わだつみ』の真下まで迫ってきた『カンパチ』が、この『わだつみ』を突き上げるように攻撃すべく一度更に深く潜った事を。今頃『カンパチ』は助走を付け、逃げ切れない『わだつみ』の船底に強烈な体当たりをお見舞いすべく突撃を仕掛けている事だろう。

アカネは、この時を待っていた。

全速力での体当たりは、そう簡単に止まれるものではないのだから。

「今よ！　面舵いっぱい！」

「う、うん！」

アカネの指示に従い、アオイは困惑しながらも舵輪を力いっぱい回す！

『わだつみ』は舵輪の動きに合わせ、方向転換を始める。エンジンは雷鳴が如く唸りを上げ、船全体が軋むほどの慣性を生じながら、その向きを変えていった。頑強な金属製の船体すら悲鳴を上げるのだ。柔らかな人間の身にはあまりにも強力な力に、アカネ達

は苦悶の声を漏らす。内臓が押し潰されるような感覚と共に、胃の中身が本来の流れに逆らうように込み上がってきていた。

しかしアカネ達の苦痛が報われないほどに、『わだつみ』は巨大だった。如何に身を引き裂かんばかりの慣性が発生しても、見た目の動きはそこまで早くはない。迫りくる『カンパチ』も船の動きを捉え、正確に軌道を修正している。レーダーの白点の動きから、アカネは『カンパチ』の動きが見えていた。

まだ足りない。足りないなら補うしかない。

だからアカネは、目の前にある一際立派なレバーを掴んだ。

「ちょ、お姉ちゃ」

慣性により傾いた身体で、偶然にもその姿を見てしまったアオイは抗議するように姉を呼び、

「悪いけど無理」

アカネはばっさりと、妹の『お願い』を斬り捨てた。

瞬間、アカネは手に掴んだレバーを引き倒す。

それと連動し『わだつみ』の巨大な、口径六十センチはある主砲三台とその上に乗る砲口九門が一斉に側面へと振り向いた！　しかしながら主砲は甲板上にあり、『カンパチ』が潜む真下を向く事は出来ない。

そんな事は、何年もこの船に乗っているアカネはとうに知っている。
それでもお構いなしに、アカネはレバーのスイッチを押した！
六十センチもある九つの砲が、一斉に火を噴く！　爆音は数十キロ彼方まで響き渡り、数十センチもある鋼鉄の装甲を容易くぶち抜く砲弾が、何もない海域を目指して放たれた。そして同時に、尋常でない『反動』が船体に襲い掛かる！
静止状態でも船体を十メートル近く動かす威力。『わだつみ』の船体は更なる運動エネルギーを得た事で、旋回速度が加速する！
直前での急加速。至近距離まで迫っていた生き物は、この急激な動きについていけず

ほんのコンマ数秒前まで『わだつみ』が漂っていた場所に、『カンパチ』が飛び上がった。
攻撃を外し、『カンパチ』はその赤い目を驚くようにぎょろりと動かした、が、すぐにその身を激しく捩る。勢い余って海面から飛び出した身体は、今や空中に浮いてしまっているというのに。水中を泳ぐのに適した身体は、空中で方向転換する事など出来ないのに。
それでも『カンパチ』は動かずにはいられないのだろう。『わだつみ』の九つある巨大な砲口が、自らの腹をしっかりと捉えていたのだから。

そしてアカネは、そのチャンスを逃すほど甘くはない。

「やっと、見せたわね……どてっぱら！」

『わだつみ』に搭載された装弾システムは、砲撃から僅か四秒で次弾の発射準備を完了させる。アカネが二度目のスイッチを押した時、砲門の中には既に直径六十センチの鋼鉄の塊が自らの出番を待っていた。着火された砲弾は巨大な炎を吹き上げ、音速の五倍もの爆速で射出。

躱す術のない『カンパチ』の腹に、巨大な砲弾は直撃した！ 『カンパチ』の纏う黄金の光がまたしても壁となって行く手を塞ぐも、巨大な砲弾は光の壁を易々と貫通。

『カンパチ』の腹を抉り飛ばしながら、反対側まで貫いた！

【……！】

『カンパチ』はパクパクと口を喘がせ、しかしすぐにぐったりと開きっぱなしにする。

すると『カンパチ』の全身を覆っていた黄金の光も消え、海へと落ちて巨大な水柱を上げた。

巨大な怪物である『カンパチ』だったが、水よりも比重が軽いのかぷかぷかと海面に浮く。もう、動く気配はない。その眼は文字通り死んだ魚のようであり、腹から溢れる血液が辺りの水を赤く染め上げていった。

『わだつみ』に備え付けられているカメラから、アカネは『カンパチ』の末路をしかと

確かめる。脅威が去り、アカネの口からは自然と安堵の息が漏れ出た

「よっしゃ獲ったぁ！」

のも束の間、アカネの口から喜びの声が上がる。

「お、ろろろろろ……」

「ほら、アオイ何吐いてんの！　そんな事してる暇あるなら、さっさとフックをアイツに打ち込むわよ！　早くしないと沈んじゃうし、小魚も集まってくるし！」

「だ、誰の所為で、こんな、うぶ」

自分達の無事を噛み締める間もなく、アカネは爛々と指示を飛ばす。口から胃の中身を垂れ流すアオイは非難の眼差しを送っていたが、アカネの指示に歯向かう事もなく、ゆっくりとだが機械を操作する。

何故なら、彼女達はこの瞬間を待ち望んでいたのだから。

そう、アカネ達の目的はこの巨大な魚――――『海生物』の漁獲。

これら海生物を売る事で、アカネ達は生計を立てているのだった。

02

人類が発見した最初の『そいつ』は、人類にとって脅威になるとは到底思えない存在だった。

西暦二〇三五年。オホーツク海にて漁をしていたロシア漁船の乗組員が、金色の光を全身に纏うニシンを発見した。そのニシンが纏う光は物理的な壁のように働き、手で触れないどころか、ナイフを突き刺そうとしても阻まれる有り様。驚いた漁師はすぐに港へと戻り、漁師仲間にそのニシンを見せる。

だが捕まえてから一日が経ち死んでいたニシンは、光をすっかり失っていた。ナイフは普通のニシンと同じく刺さり、その身は美味しい缶詰へと早変わり。

ニシンを捕まえた漁師は、仲間にホラ吹きだと馬鹿にされたという……三日後、二度目の遭遇が確認されるまで。

今度は日本の漁船が獲ったサバで、同様の現象が確認されたのである。幸運な事に船は港に近く、漁獲された魚はすぐに陸揚げされ、生きた状態の動画や写真が多数撮られた。ネットが発達した時代であったがためにそれらの情報は瞬く間に世界中に広がり、『光る魚』の存在は公となった。

その後も光る魚は世界中で続々と発見されていった。最初はなんらかの病気や汚染物質が原因ではないかと思われ市民の間に不安が広まったものの、魚が死ぬのとほぼ同時に発光が消える事、発光していた魚を検査しても汚染物質の量は一般的な鮮魚と変わらない事……そして初遭遇から半年が経った頃には漁獲される魚の三割が光を纏い、最早珍しいものではなくなった事から、やがて人々の関心は薄れていった。

奴等が終末の使者だと知りもせずに。

光る魚が発見されてから一年が過ぎた頃――――その事件は起きた。

『イタチザメ』が漁船を撃沈したのである。イタチザメというのは体長二～三メートルほどの小さなサメであり、対して沈められた漁船は重さ十五トンもある船。本来ならイタチザメが敵う相手ではなく、そもそも自分よりも圧倒的に大きな相手をイタチザメが襲うとは考え難い。沈められた船の乗組員の証言を信じる者は皆無だった。

しかしその後も船が沈む事故は多発。サメだけでなくマグロやカツオなどの大型魚、ごく稀にだがサンマやサバなどに襲われる例も発生した。映像証拠も出てきた事でいよいよ話が現実味を帯び、事態の解明に国家が動くようになる。

『光る魚』が現れてから三年後。魚が船を襲う理由が、そして魚が光り輝く理由が判明した。

それは二種の細菌に感染する事で生じる『体質』。ある細菌は海洋生物に感染し、宿主

の身体から吸い取ったエネルギーを変換して強力な電気を発生させる。その電気を受けた別種の細菌が電磁力へと変換……強力な電磁パルスと、目視可能なほど強力な電磁フィールドを展開する。これこそが、魚の纏う光の正体だった。

問題は、この細菌に感染した海洋生物は自分より大きな『物体』にも平気で襲い掛かるようになるという事だった。電磁パルスや電磁フィールドなどの現象を起こすには、膨大なエネルギーを必要とする。それらを展開しているのは細菌だが、細菌は宿主である海洋生物からエネルギーを奪い取っていた。即ち、この二種の細菌に感染した海洋生物は常にエネルギー不足（飢餓）に見舞われ、空腹感からあらゆる『物体』に襲い掛かるほど狂暴化してしまうのだ。魚達が船を襲うようになったのも、これが原因だった。

そして細菌達に感染する海洋生物が増える事で、海に満ちる電磁パルスの力は年々強力なものとなっていた。最初の一年はなんの問題も起こさなかったのに、発見四年目を迎えた頃には漁に出た船の電子機器が次々と破壊される状態に。置物となった舟に、回転するスクリューを打ち負かすほど強力な電磁フィールドと共に大型魚が突っ込めば……最早沈むしかない。

かくして人類の脅威となった海洋生物達だったが、立ち向かう人類はあまりに無力だった。機銃程度では電磁フィールドを貫通出来ず、駆除は進まない。ならばと思いきって使ったミサイルは、積んである電子機器が海洋生物の発する電磁パルスの影響を

もろに受けていくら撃っても殆ど当たらない有り様。仮に命中しても電磁フィールドが熱や爆風を防ぐため　―　熱とは電磁波の一種であるため、電磁フィールドによって簡単に遮断されてしまう性質があった　―　殆ど効果がない。当時最強の兵器である水爆すら、爆心地以外では効果が薄かった。駆除は進まず、細菌に感染した海洋生物は数を増すばかり。

やがて海は細菌に感染した海洋生物……現在『海生物』と呼称される存在……に支配され、殆どの船が海に出られなくなった。

つまり海産資源の利用が出来なくなったのだが、これが人類に致命傷を与える。二〇三五年時の年間漁獲量は約二億三千万トン。これらを全て食料として鑑みれば、可食部が五割と計算しても、一億六千万以上もの人々が一年間健康に生活出来るカロリーになる。また廃棄された骨や内臓、一部地域での排泄物は、飼料や肥料として活用され別の食料生産に寄与していた。これらが丸々、ほんの数年で消え去ったのだ。漁業のみならず農業や畜産にも打撃は広がり、世界的な食糧危機が蔓延した。

悲劇の連鎖はまだ終わらない。電磁フィールドを纏った魚を、海鳥などが食べられるだろうか？　答えはＮＯ。突然にして恒久的な餌不足が生じ、海鳥全体の個体数が激減、または絶滅。海鳥には海の魚を食べ、糞を陸でする事で地上に養分を運ぶという物質循環の役目があったのだが、個体数の激減によりこの流れが途絶えた。雨水や河川に

よる養分流出は供給量を大きく上回り、土壌は年々痩せていく。にも拘らず農畜作物の需要が高まるものだから、その需要に（善意・私益は問わず）応えるべく土地の能力を無視した農業・畜産が横行。再起不能になるまで大地は行使され、地上環境は一層悪化していく。そうするとまた食糧供給が減り、需要が高まり、生産のため土壌は酷使され……最悪の悪循環を招いた。

負の連鎖により、飢餓人口は数十年で三十億人も増加。食糧価格は海生物出現前の十倍にまで高騰した。更にこれを商機と見た投資家が食糧を買い占め、マネーゲームを始める始末。金のあるところに不必要な食糧が溜まり、必要なところに届かないという事態が発生してしまう。飢えという根源的恐怖に晒された市民が暴徒化するのに、さしたる時間は必要なかった。

世界中が破壊と混乱に満たされ、政治は空洞化。治安維持機構が機能を失い、略奪・無計画な開発・地上資源の乱獲の横行が止められない。計画性のない破壊により食糧生産能力は急落。最早文明を維持するための人的リソースすら確保出来ず、省エネという名の衰退を繰り返す日々。

やがて人口は全盛期の一割以下にまで減少。内紛を起こす資源すらなくなり、ようやく落ち着きを取り戻した世界は少しずつだが秩序を回復させていき……西暦二三〇八年、人類は再び海に足を踏み入れた。荒廃しきった地上では衰退した人口すらも支えら

れず、海産資源をなんとしても手にせねばならなかったがために。
無論細菌に感染した海生物達は未だに、いや、人類全盛期よりも数多く海を跋扈している。しかし人類も、二百年以上ただただ衰退していた訳ではない。世代を超えた研究により、海生物打倒の術を見付けていた。
海生物出現時の人類は、電子機器と熱兵器の力に頼り過ぎていた。どんなものにも弱点がある事を忘れ、己の力に溺れた結果、電子機器を狂わせる電磁パルスと、熱に極度の耐性を持つ電磁フィールドが『天敵』となっていたのだ。ならば話は簡単である。船の電子化部品を減らし、熱以外の攻撃手段を持てば良い。どうしても電子機器が必要な部分は、分厚い装甲で覆ってしまえ。
照準は目視と目盛りによって行われ、攻撃は『質量攻撃』である艦砲が採用された。電磁パルスから電子機器を守るため装甲はどんどん分厚くなり、増大した重量分の浮力を得るため船体の大型化が進む。空の敵を気にする必要なんかないので、レーダーは廃止してソナーのみを搭載する。
やがて完成したのは、海生物が出現するよりも更に百年近く昔、人類の戦争の花形であった――――戦艦と酷似したものだった。
これこそが現代の漁船、通称『戦闘漁船』のひな型である。
新世代の漁船は数多の海を駆け、見事海生物を打ち倒した。農畜産の壊滅により飢え

と貧困が満ちていた陸上に、新たな食糧が届けられるようになったのである。無論、海生物達は強敵だ。戦闘漁船といえども沈められる事は珍しくはない。漁獲量も足りず、人口は未だ右肩下がりが続いている。

それでも海の幸は、滅びへと向かう人類の足を鈍らせている。戦闘漁船が開発されてから三十年が過ぎた西暦二三四一年現在、人類は摂取しているカロリーの九割以上が海産物と言われているほど海に依存していた。これはこれで不健康なのだろうが、陸で満足に食べ物を作れないのだから仕方ない。そして海生物を捕獲する事、即ち『漁』は、素人に出来るほど簡単なものではない。熟練した漁師達の確かな腕が、人類という種の存続を担っているのだ。

ならばその漁師達に、出鱈目な情報を提供する事は？　その情報によって、万一漁船が沈められ、漁師が命を落としたなら？

それは最早人類への反逆である。

「ってぇ事が分かってるのかしら、おっちゃーん？　ん？　んんー？」

といった極めて『常識的』な話を長々ぐちぐちとしてから、『漁師』の一人であるアカネは嫌味ったらしく、怒りを隠さずに問い詰めた。

尤も、アカネの前に居るがたいの良い男――――ショウタは、がははと豪快に笑っていたが。女子としては決して小さい方ではない筈のアカネよりも遙かに大きく立派な

身体で笑われると、アカネの意気込みは簡単に吹き飛ばされてしまう。怖い、とは思わないが、歯向かう気持ちがぽきりとへし折られた気分になった。

そうしてアカネがますますムスッとしていると、ショウタはようやく笑い声を止める。ただしその顔はニコニコと、大層楽しそうなままだった。

「いや、すまないな。嘘を吐いたつもりはないんだ。あそこの海域に居るのは三百メートル級の『カツオ』だと聞いていたんだが、まさか百五十メートル級の『カンパチ』だとはなぁ。持ってきた『カンパチ』の買い取りには色を付けておくから、それで勘弁してくれないか？」

「……まぁ、苦労した分に見合う報酬があるなら、今回は許してあげるけど」

「いやいや、本当にすまないね」

何度も謝るショウタに、アカネは口では許しを告げていたが、その表情はあからさまに不服であった。

ショウタは漁師御用達の情報屋である。

彼の仕事は主に二つ。一つは漁師から『海生物』を買い取り、一般人に流通させる仲卸業。海生物自体の売り上げも当然彼の利益となるが、これは全体の収入からすれば副業みたいなもの、らしい。

もう一つの仕事である本業は、『海生物』に関する情報の売買だ。

漁師や一般人からの情報を集計・解析。これによりどの海域にどんな『海生物』が生息しているかを予測し、漁師に現在の情報として売り渡すという仕事である。漁師にとって海生物の情報は文字通り生命線なため、非常に高値で取引されるもの。当然漁師は高い金を支払っているので、適当なものを掴まされたら大変怒る。

アカネは今回、ショウタから出鱈目情報を掴まされていた。事前に聞いていた情報では、アカネ達が漁へと向かったポイントには『カツオ』が待っている筈だった。『カツオ』は海生物の中でも大型で、ベテラン向けと称される種である。しかし実際にいたのは『カンパチ』。海生物の中でもそれなりの実力を誇るものの、『カツオ』ほどの強者ではない。というより『カツオ』の餌である。

と、強さだけなら『カツオ』の方が厄介で、『カンパチ』は簡単な相手に思える。しかし話はそう簡単なものではない。

『カツオ』と『カンパチ』の違いは、単純な強さの差だけではない。『カツオ』は大型故に鈍足で、耐久力・攻撃力・防御力に優れている。対する『カンパチ』は耐久に劣るが、瞬間的なスピードでは『カツオ』を大きく上回る。つまり性質が全く異なるのだ。

戦いにおいて万能なんてものはない。高度な電子機器を搭載したミサイルが海生物に敗北し、旧時代の遺産である大口径艦砲が有効だったように、物事には相性が存在する。どれほど優れたテクノロジーを用いようと、相性が悪ければ簡単に負けてしまう。

正確な情報と、それを元にした確かな戦術が『漁』には必要なのである。間違った情報を伝えられる事は、本当に、命を落としかねないほど危険なのだ。

だからこそ、

「で？　なんであんなガセ情報を渡してきた訳？」

何かしらの事情があるのではないか――――アカネは、そう踏んだ。ショウタの情報は質が高いと漁師界隈では語られており、薄利多売なそこらの情報屋とは訳が違う。勿論あくまでも予測なので百パーセント当たるものではないが、だとしても、『カツオ』と『カンパチ』を間違えるとは思えない。

アカネに問われたショウタは一瞬表情を強張らせる。その顔はすぐに解れたが、先程までの快活なおじさんにはもう見えない。

そこに居るのは、一人の『仕事人』であった。

「……お前さん達が海に出た直後に、一報が入った。本来ならすぐにでも伝えたかったんだが、陸から三百メートルも離れりゃ電磁パルスの影響で通信障害が起きるこのご時世じゃ、五分前に出ていった女の子達に危険を知らせる事も出来やしない」

「そんな事は今更言われなくても分かってるわよ。何があったの？」

「『沖』の生き物が来たらしい。それもかなりの大型の奴が」

ショウタが伝えた言葉に、アカネは顔を顰める。ただしその反応はショウタの説明に

納得がいかなかったからではない。信じたからこそ、予想される『今後』が脳裏を過り、正直な想いが顔に出てしまった。

一般的に、陸から離れた沖合で暮らしている海生物ほど、高い戦闘力を誇っている。海生物出現前まで沖合という場所は、海の砂漠と呼ばれるほど栄養分の乏しい環境だった。しかし海生物出現後は状況が一変。海流の変化によって海、否、地球中の養分が沖合へ集結するように流れ込む形となっている。これにより陸から離れた沖合ほど富栄養化が進み、多数の生物が住まう世界となった。

人類文明衰退の原因である海生物であるが、彼等は根本的には野生動物である。同種であっても異性以外は競争相手であり、別種となれば喰う喰われるの関係もあり得る。そのため彼等は自然淘汰という名の切磋琢磨を繰り返し、徐々にだが『進化』していた。

結果、栄養分が豊富な沖では海生物同士の戦いに勝ち抜いた強者が棲み付き、人が漁を行っている陸上近海には追い立てられた弱者が棲み付いた。つまり沖の生物は、普段アカネ達が相手している海生物とは桁違いの戦闘力を有しているのである。基本的な性質は近海の海生物と沖の海生物も大差ないと言われているため、戦って勝てない事はないとされているが……普段人と接しない分情報もなく、どのような生態を有しているか分からないため非常に危険な相手だ。そもそも漁師が海生物を狩る理由は食糧として活用するためだが、未知の海生物が食べ物として利用出来るとは限らない。毒がある

かも知れないし、味だって吐き気がするほど不味いかも知れないのだから。
　こうなると買い手が付くかすら怪しくなる。弾薬代や燃料代とてタダではないのだから、売れなければ赤字確定。命懸けで怪物を倒したら破産した、なんて英雄譚どころか笑い話である。余程の　―　漁場に居着いたとか　―　事情がない限り、漁師は『沖』の海生物を相手にしない。したくないのだ。
　そしてそれは近海に生息する海生物にとっても同じ。
　まともに戦えば勝ち目のない相手な上に、自分を食べるかも知れない恐ろしい敵だ。だから『沖』の海生物がやってくると、近海の海生物は普段の住処から逃げ出してしまう。これは漁師にとって傍迷惑な展開だ。何しろ「何処にどんな海生物が生息しているか」という情報が無意味になるのだから。相手との相性を重視する漁師達にとって、この時の海は極めて危険な状態である。
　幸いにして、『沖』の海生物にも弱点はある。圧倒的戦闘力と引き換えに、膨大なエネルギーを常に消費している点だ。『沖』の潤沢な栄養分があってこそ生きられる身体が、栄養分に乏しい陸上近海で維持出来る筈もない。大抵一週間もすれば、長くても一月ほどで、餓死するか餌を求めて『沖』へと帰っていく。
　よって普通の漁師が『沖』の海生物相手に取る選択肢はただ一つ――――放置である。彼等は束の間の休暇を得られたとして、のんびりと余暇を過ごすのだ。

しかしアカネ達は普通の漁師ではない。

……貧乏な漁師である。

「……『沖』の生き物が来たって事は、獲物の情報なんて」

「あるにはあるが、『期限切れ』だ。分かった上で買うなら止めはしない。責任は勿論取らないがな」

「だよねぇ……うう。この前装填システムを最新型砲弾に合わせたから、ローンの支払いがあるのに……」

間の悪い事に大きな買い物をしたばかりのアカネにとって、仕事がないのは死活問題だった。もしもローンの支払いが滞れば、『わだつみ』が借金の形に取られてしまうかも知れない。船がなくなれば漁など出来ず、漁師は廃業だ。つまり無職と化す。

三百年前は世界で最も裕福な国の一つとされたアカネ達が済むこの列島 ― ニホンレットウと呼ぶらしい ― も、今では貧困と飢えが満ちている。生活保護や児童養護施設など数百年前に廃止された。漁しか生きる術を知らない娘二人が無職となれば、待っているのはあの世である。

「いや、ほんとなんか仕事ない？　もうなんでもやるから、マジで」

「女の子がなんでもやるとか言うんじゃない……ちょっと待ってろ。確か小さなやつがあった筈だ」

ショウタはそう言うと、近くにあった書類の山を漁り始めた。雑に山を崩していく動きに、果たしてこれで本当に見付かるのかとアカネは少し不安を覚えたが、幸いにしてショウタはすぐに一枚の書類を山から選び出す。

アカネはショウタから紙を受け取り、目を通す。しっかりと、文言に怪しい一言が書かれていないかを念入りに確かめた。

そして――――

03

「貨物の運搬なんて仕事、初めてだよね」

『わだつみ』の操舵室にて、アオイは大きく仰け反るような姿勢を取りながら、背後の艦長席に座るアカネに尋ねた。

大海原を駆ける『わだつみ』の真上には、青空が広がっていた。降り注ぐ日の光を浴びた海面はキラキラとした煌めきを放ち、地平線の彼方まで広がっている。時折体長一メートルほどの海生物……恐らく『ブリ』や『カンパチ』の幼魚だろう……が迫り来る『わだつみ』に驚いて海面を跳ねる以外は、とても静かなものだ。

普段なら、静かな海など不吉以外の何ものでもない。アカネ達は漁師であり、海生物を捕らえる事が仕事なのだから。しかしこの仕事中に限れば、静かなのは良い事である。

何しろ『わだつみ』には今、大量の荷物が積まれている。そしてこれらを無事に目的地まで届ける事が、今のアカネ達の仕事だった。

「そりゃね。普通は兼業でやるような仕事だもの。うちは専業漁師だし」

「えぇー……兼業で出来るならやれば良いじゃん」

「旨味が少ないのよ、うちの場合じゃ。まず物資輸送の仕事は兼業でやる前提もあって報酬が凄く安い。だから数をこなさないと大した収入にならない。だけど」
「ああ、そっか。うちの『わだつみ』は他の船と比べて鈍足だから、数をこなす……つまり長距離を移動するのに向いていない、と」
「その通り。あと大抵の輸送業は駆逐艦級の燃料・弾薬の消費量で費用計算をしてるから、戦艦級の大きさがある『わだつみ』じゃ割に合わない事が多いのよ」
　対海生物を想定して戦艦のように『進化』した戦闘漁船であるが、開発から四十年も経てばそこから更なる『分化』をするというもの。
　電磁パルス対策が進めば分厚い装甲は要らず、どんどん薄く出来る。近接戦闘の多さから砲は威力よりも小回りと速射が重視され、小型化が進行した。海生物より速く動く事は流石に無理でも、優位な立ち回りをするためにはそこそこの速さが必要であるので、軽量化による高速化が求められていた。
　結局、古代の戦艦が大活躍していたのはほんの数年間だけ。現在では全長二百メートル未満の駆逐艦級が主力であり、次点で三百メートル前後の巡洋艦級が人気だ。戦艦級など化石も同然。使っているのはこの道云十年の老人ぐらいなものである。
　世の中が駆逐艦級、精々巡洋艦級を基準に考えるのは仕方ない事。そして小さくて軽量な駆逐艦級と、鈍重で巨大な戦艦級、どちらの燃費が良いかは語るまでもない。

「そーいう訳だから、兼業でやっても赤字を垂れ流すのが精々なのよ。勿論今回は利益が出るわよ？　ちゃーんと値段交渉したから」
「さっすがお姉ちゃん。じゃあ、もう一つ質問。さっきからなんでそんな不機嫌そうなの？」
アオイは、二つ目の疑問をぶつけてきた。
自分の『気持ち』を訊くだけの、極めて簡単な質問。
その質問に、アカネはすぐに答えを返す事が出来なかった。尤も、答えられなかった理由は何かを隠そうとしたからではなく、あまり思い出したくなかったからなのだが。
「……だって、こっちの方の海って『アイツ』が居るじゃん」
「アイツ？　……ああ、あの人ね。そっか、確かにそうだ」
アカネが一言ぽそりと零せば、それだけでアオイは納得したように頷いた。
今頃アオイの脳裏には、『わだつみ』が現在辿っているルートが浮かんでいる事だろう。かつて『ニホンレットウ』と呼ばれていた陸地から、『インドネシアショトウ』と呼ばれていた島々が浮かぶ、南海航路である……南海といっても、三百年前と違ってあまり温かくはない。海流の影響で十度以上海水温が低下しており、環境が激変しているからだ。三百年前の環境を知らないアカネ達には、激変と言われてもピンと来ないが。
そしてこの海の環境は、海生物にとって心地良いのか、様々な種が生息しており、多

数の漁師がこの海域で活動をしている。アカネ達も時折漁に来る場所であり、顔見知りである漁師の数は両手の指だけでは足りないほどだ。

当然中には馬の合わない人達もいる訳で。

「私はあの人の事、別に嫌いじゃないけどなぁ」

「私だって別に嫌いじゃないわよ。ただちょっと苦手なだけだもん……ほら、この話はもう止めっ！　真面目にソナー見ててよ。今日は見付け次第がん逃げして良いから」

「ほーい」

強引に話を終わらせるアカネに、アオイは真剣みのない返事で答える。

しかしソナーの表示を見つめるアオイの眼差しは、アカネに言われるまでもなく真面目だった。

かつての人類は、高度な技術力によって大海原さえも支配していた。が、今の海は海生物の領域だ。何処から何が現れるか、分かったものではない。常に辺りを見渡し、脅威が迫っていないか注意する必要がある。適度なお喋りは緊張を解す上で効果的だが、話に夢中になり過ぎて警戒が疎かになっては元も子もない。アオイとて一人前の漁師であり、その事は十分弁えているのだ。

楽しいお喋りを終えて、アカネとアオイは『わだつみ』を緩やかに操る。操舵室の防音性は高く、波の音は聞こえてこない。『全盛期』の人類科学ほどではないにしろ、優れ

た技術力の結晶であるマシン達の駆動音はとても静かだ。お陰で二人の人間が黙るだけで、操舵室の中は静寂に満たされる。

しかし窓から見える大海原を無心で眺めれば、頭の中で潮の音が勝手に奏でられた。

普段の仕事中なら、こんなのんびりとは出来ない。獲物を求めて地平線を、ソナーを、食い入るように見つめなければならないのだから。けれども此度の仕事は荷物の運搬。襲われる事は警戒しなければならないが、見付からないものをわざわざ探す必要もない。

目視による警戒という名目で海を眺めながら、アカネはまったりと時間が過ぎていくのを堪能――――

「ねぇ、お姉ちゃんちょっと良い？」

していた時、真面目にソナーを見つめていた妹から呼び掛けられた。

びくりとアカネは肩を震わせ、それからこほんと咳払い一つ。

「……ええ、勿論。何かしら？」

「いや、ボーッとしてたの誤魔化さなくて良いから。ちょっとソナー見てほしいんだけど」

「あ、はい」

取り繕ってみても妹にはバレバレで、アカネは言い訳一つせずに席から身を乗り出し

てソナーを覗き込んだ。
　とはいえ見るように言われたソナーには、特に何も映っていない。反応が薄いとかではなく、本当に何も映っていなかった。
「……何も映ってないけど」
「今はね。さっき、南東の方に反応があった、と思う。でも縁の方で一瞬映っただけで、すぐに消えちゃった」
　アカネが疑問を呈すると、アオイは指先で円を描くようにしてソナーの反応があった箇所を訴える。アオイが言うようにそれは『わだつみ』から見て南東側であり、南西に進んでいる自分達からすればややズレた方角だった。
　アカネはソナーを見つめながら、しばし考え込む。
　今は何も映っていないから単なる見間違い、と断じるのは早計だ。海生物は、機械のように正確にこちらを認識して襲ってくる訳ではない。横を素通りしてから慌てて追い駆けてくる鈍臭い奴もいるし、こちらの隙を窺って一定の距離を行ったり来たりする慎重派もいる。他の海生物に追われて右往左往していたり、弱ってふらふらしている奴も稀に出会う。ソナーの範囲に一瞬だけ入り、なんらかの事情で出て行った、というのはさして奇妙な話ではないのだ。
　海では一瞬の油断が命取りになる。運良く見付けた予兆を見過ごすなんて勿体ない

真似をしていては、命が幾らあっても足りない。

それに、ソナーの端に映ったという事は――――

「……アオイはソナーを見てて。私は目視で南西側を見ておく」

「分かった」

アオイに指示を出してから、アカネは自席にある望遠レンズを覗き込む。

三百年前と比べ、唯一以前よりも進歩したと言える技術がソナーである。

海中に潜む『敵』を探し出すため、音波を用いて海中の『物体』を検知する技術は、時代が移り変わろうとも求められ続けていたからだ。しかも海生物が纏う電磁フィールドはその強力さから音波を中和・減衰させる効果があったため、全盛期の人類が作り出したソナーですら数キロ圏内に接近されるまで探知出来ない有り様。人類種の存続にはソナー技術の発展が不可欠であり、他のあらゆるテクノロジーが衰退する中、ソナーだけが高性能化を続けた。

『わだつみ』に積まれているソナーは、そんな現代製ソナーの中でもとびきり高品質なものだ。並の海生物ならば三十キロ圏内まで近付いてくれば探知出来る。電磁フィールドが貧弱な小型種なら、モニター縁部分に当たる五十キロ離れていても映るだろう。

そう、小型種ならば。

電磁フィールドが強力なほど、ソナーに映り難くなる。『わだつみ』のソナーの端っこ

に反応があったという事は、それは相当小型な海生物の筈。海生物も普通の生物と同様に、小さいほど力は弱くなる。だから大抵の小型種は恐れる必要なんてない。

だが、とある種だけは別だ。

故にアカネは望遠レンズを覗き込んだ。少しでも早く、ソナーに映ったものの正体を見極めるために。出来る事なら今日は近付いてくるなと祈りながら。

残念な事に、海生物は人の祈りを聞いてくれる存在ではなかった。

望遠レンズを覗き込むアカネの目に、海面で吹き上がる水飛沫が映る。

アカネは水飛沫を凝視した。目盛りを用いた計算が正しければ、水飛沫までの距離五万四千……単位はメートルなのでつまり約五十四キロ離れている。ソナーの探知範囲外で生じている飛沫はとても大きく、高さ十五メートルほどまで舞い上がっていた。これほど大きな水飛沫を上げるという事は、途轍もないパワーの持ち主である証。おまけに水飛沫は一つではなく、見えるだけで十はあった。

そして水飛沫は急速に接近してきている。アカネは距離の縮まり方と時間から素早く速度を計算。あろう事か、その時速は四百五十キロに達していた。古代の飛行機並の速さで、海中の物体が移動しているのだ。おまけにその速度は、刻々と増している。

アカネは額に脂汗を滲ませた。なんだってこんな時に、『アイツ』と出会ってしまうのか。自分が何か見間違いをしているのではないか、もしくは望遠レンズの目盛りが歪ん

でいるのではないか。

誰でも良いから、違うと言ってほしい。

「っ！　お姉ちゃん！　南西方向に反応あり！　数は十二！　距離五十キロ……す、凄いスピードで接近してる！」

その願いをへし折ったのは、愛する妹の悲鳴染みた報告だった。

現実逃避の時間は終わりである。ここからは、地獄の始まり。

「クソが……『マグロ』に見付かったわ！」

アカネは迫り来る海生物の名を叫んだ。

０４

『マグロ』。

三百年前ではそのあまりの美味しさから乱獲され、絶滅の一歩手前まで個体数が減ったと言われている魚類の一種。そして今では、何故三百年前に滅ぼしておかなかったのかと、ご先祖様達に恨み言をぶつけたくなる生物である。

体長は約六メートル。海生物の中ではあまり巨大化が進んでおらず、『小型種』に分類される。形態的にも海生物化する前と大きな違いが見られないとの事。精々背ビレが長く、そして剣のように鋭く伸びているぐらいだ。

しかし大きな進化を遂げた能力もある。

その最たるものがスピードだ。海生物化する前から泳ぎが得意な種であったが、海生物化によってそのスピードとスタミナが著しく強化。時速三百キロ以上の速さで二十四時間泳ぎ続ける事が可能であり、獲物などを見付けて追い駆ける時には時速七百キロ以上を出すと言われている。瞬間的には時速一千キロを超える事もあるようだ。

その狩りの手法は、持ち前のスピードを活かしたヒット・アンド・アウェイ。自分より大きな海生物を好んで襲い、その肉を食い千切って逃げる……という方法をよく用い

る。十～二十程度の群れで行動し、何度も何度も獲物に噛み付くのだ。
そして奴等は、一度目を付けた獲物を逃しはしない。
何度も何度も肉を引き千切り、内臓が出てきたらそれを喰らい、動けなくなってもひと思いに食い殺しはせず、ちまちまちまちま……死なないように、少しずつ食べていく。一気に食べ尽くすのは獲物が失血や栄養失調で死んでから。それが大量の肉を新鮮なまま食べる術である事を、奴等は知っているのだ。
性質の悪い事に、『マグロ』達は船に対してもこれをやる。
装甲を剥がし、ファンを噛み千切り、動けなくしてからゆっくりと解体していく……無論有機生命体である海生物にとって、金属製の船を食べても栄養にはならない。流石に途中で「これ食べ物じゃないのかな？」とでも思うのか、何時かは解放される。しかしその時には何もかも手遅れで、大抵の船は動けない状態だ。海生物達が放つ電磁パルスにより長距離通信は行えないため、救難信号を送れるのは半径数キロ程度。大海原でこんな狭い範囲内に他の船が入り込む可能性はかなり低い。助けは来ず、少しずつ船の物資を食い潰し――――飢えと渇きによって船員は命を落とす。
そんなおぞましい怪物である『マグロ』達と『わだつみ』の相性は、最悪の一言に尽きる。
「最大船速！　ソナー以外の全エネルギーを費やしても良いから何がなんでも逃げて

！」
「わ、分かった！」
　アカネの命令に応え、アオイは『わだつみ』で生産されるエネルギーのほぼ全てを船の速力に費やす。大抵の海生物には縄張りがある。『マグロ』も同様で、彼等の活動圏外へと出てしまえば、それ以上はまず追ってこない。倒すつもりがないのなら、逃げてしまえば良い。
　しかし『わだつみ』が出せるのは精々五十ノット……時速九十キロを超える程度でしかない。『マグロ』達にとっては巡航速度の半分以下という鈍足だ。確かに現代人類の船で『マグロ』の速さに勝てるものなどいないが、現代の主力漁船である駆逐艦級なら時速百五十キロ、次点で好まれている巡洋艦級でも百二十キロは出せる。振り切る事は出来なくとも、縄張りの外へと出るのなら速いに越した事はない。鈍足である『わだつみ』には、逃げる事がそもそも不得手であった。
　ならば戦いに転じるしかないのか？　――――答えはＮＯだ。戦う方が良ければ、アカネはとうにそちらを選択している。
「駄目！　全然諦めてくれない！　もう三十キロ圏内に入ってる！」
「くっ……救難信号を発信しながら南西に前進！　少しでも漁船がいそうな陸地に近付いて！　私は砲撃して牽制する！」

指示を出し終えるとアカネは望遠レンズを覗き込みながらコンソールを操作。主砲と副砲を起動し、海面を泳ぐ海生物に狙いを付ける。

距離は二十八キロ。遠距離戦だが『わだつみ』の主砲と副砲の射程内ではある。

照準を合わせたアカネは、副砲の引き金を引いた。副砲と言っても『わだつみ』に積まれているのは二連装式四十センチ速射砲……一般的な漁船である駆逐艦級では主砲として用いられ、一～三台だけ積まれているような代物だ。『わだつみ』にはそれが合計十六台三十二門、後方を向ける分だけでも八台も存在している。

アカネの操作により、重厚な発砲音が八台×二砲、合計十六発分奏でられた。船と海を揺らすほどのエネルギーを貫い、直径四十センチもの金属塊は空を駆ける。遠距離戦でも小型種の電磁フィールド程度なら貫き、致命傷を与える威力。現代において最も多くの海生物を屠った、人類の英知の結晶だ。

ただしこれは、当たればの話。

音速の二倍以上の速さで飛来する砲弾を目の当たりにし、『マグロ』達は一瞬その身を強張らせた。それから素早く進路を僅かながら変え、個体間の間隔を広げる。

十六発の砲弾は、そうして出来上がった隙間に全て落ちてしまう。

「っだぁくそっ！　やっぱり避けられたわ！」

コンソールの端を感情のまま殴り、アカネは焦りを募らせる。

これが『わだつみ』にとって『マグロ』が天敵である理由その二。超高速で移動する『マグロ』は動体視力に優れており、砲弾を持ち前の反応速度で回避してしまうのだ。如何に強力な砲弾だろうと、当たらなければ無意味。このような相手には弾速が速く、連射可能な小口径の砲が有効なのだが、『わだつみ』の武装は大型の海生物に特化……デカい一撃で仕留める方を重視していた。弾速は足りていても、連射が出来なくては躱されるだけ。

一応無数に積んでる十センチ砲なら『適正』な武器だが、コイツはかなりの年代物で、今の『わだつみ』に搭載されている最新式照準制御装置との相性が良くない。威嚇に使うなら兎も角、攻撃に使ってもどれだけ当てられるか怪しいものだ。

『わだつみ』では『マグロ』を倒すのは困難。相性が悪過ぎる。

このような海生物と遭遇した時、漁師は周りに助けを求める。近くに有効な武装を持った船が居れば、駆け付け、救助してくれるかも知れない。故に先程救難信号を発したのだが……これはあまり期待出来ない。助けるかどうかは善意と利益に依るが、『マグロ』は海生物化を遂げる中で体脂肪が高効率の燃料化――――簡単に言うとガソリンに似た構造へと変化しており、毒を有するようになっていた。つまり食べ物として利用出来ない、倒してもお金にならない獲物という訳だ。

こうなると人としての善意を頼る他ないが、悲しい事に現代は善意が強くて生きてい

けるほど優しい世界ではない。仮に優しい人がいたとしても、そんな人々には愛しい家族や仲間がいるだろう。愛する者を守るためにも、彼等はまず自分の身を守らねばならない。そもそもにして今は『沖』の海生物が出現し、多くの漁師が休業している筈。万人を愛する聖人染みた漁師がこの世に居たとしても、今日は自宅でのんびりしているに違いない。

助けが来てくれる可能性は皆無。自分達でなんとかするしかない。いや、自分がなんとかするしかないと、アカネは自分に言い聞かせる。

「お姉ちゃんどうしよう！　このままじゃ……！」

怯える妹を助けられるのは、自分だけなのだから。

アカネは考える。考えて、考えて、頭が痛くなってきても考える。しかし名案は浮かばず、『マグロ』はどんどん距離を詰めてくるばかり。いよいよ考える暇がなくなり、アカネが下した決断は、

「……くそったれが。二匹は道連れにしてやる」

悪態を吐きながら、主砲の引き金を引くというもの。

ついに船からの距離約二キロまで接近してきた『マグロ』達目掛け、超音速の鉄塊が三つ飛翔する。秒速二千メートルに達する砲弾は一秒で目標地点に到達。優れた動体視力を持つ『マグロ』はこれも躱そうとする、が、『わだつみ』が誇る六十センチ砲の破

壊力は絶大だ。ほんの少し掠るだけでも致命的である。
十二匹の『マグロ』のうち一匹は、勇ましかったのか怠惰なのか、ぼんやりしていたのか体調不良なのか、避け方が足りなくて砲弾が掠る。ただそれだけでその一匹は吹き飛ぶように海面に跳び出し、海面をごろごろと転がって脱落した……一匹だけが。
接近する『マグロ』は残り十一匹。そして今や時速八百キロまで加速した奴等は、時速百キロ近い速さで走る『わだつみ』との距離を一秒で二百メートル縮めてくる……二キロなんてほんの十秒で通過だ。『わだつみ』の装填機能をフル稼働させても、撃てるのは精々あと二回。
その二回はあっという間に撃ち終わり、そして逆転劇は起こらなかった。
「もう駄目！　追い付かれ、きゃあっ!?」
『わだつみ』が揺れ、その姿勢が大きく傾く。
望遠レンズを覗いて『マグロ』達を撃ち続けていたアカネは、『わだつみ』に『マグロ』達が肉薄する瞬間も目の当たりにしていた。恐らく『マグロ』達は舟の推進力を生み出している、ファンの一つを食い千切ったのだろう。大型船である『わだつみ』には複数のファンがあり、その一つが壊れた事で一時的にバランスが崩れたのだ。
『わだつみ』、というより現代の船には自律姿勢制御機構があるため、ファンが一つ壊れた程度であれば航行自体は可能である。しかし推進力が幾らか失われ、バランスを整

えながら進む速さが、平時のそれと同じである訳がない。大きくスピードが落ち、旋回運動にも支障が出る。

今や逃げ足すら封じられた訳だ。

「お、お姉ちゃん……」

アオイは不安げな表情を浮かべ、アカネの顔を見つめてくる。救いを求めるように、ヒーローを待ち望むように。

しかし現実にヒーローはいない。

肉薄された事で、『マグロ』達は既に船体の下側に陣取っている。船の真下となっては、砲台の駆動範囲外だ。攻撃手段は何もない。転倒する危険を犯して全速力で『わだつみ』を動かしても、機動性で大きく上回る『マグロ』を振り切れる筈もない。

幾ら考えても、何も思い付かない。

考えれば考えるほど、自分達の置かれている状況が絶望的である事を突き付けられる。打つ手が何も思い付かない。完全な詰みに入っている。

何処で判断を間違えた？

その答えはすぐに見付かった。判断ミスがあったとすれば……『沖』の海生物が出たと知りながら、海に出ると決断した時点。

此処を通ろうと自分が決めた時点で、運命は定まったのだ。

「……ごめんなさい」

「っ！　……」

ぽつりと、懺悔の言葉がアカネの口から漏れ出る。アオイは立ち上がるや何かを言いたそうに口を開き、だけど何も言わないまま、すとんと椅子に座り直す。

漁師達の平均寿命は、十年に満たない。

しかしそれは未熟な愚か者が大勢居て、調子付いた結果ミスを犯して脱落するという意味ではない。長く、何回も漁をしていると、どうしても相性の悪い奴と鉢合わせる時が来るのである。今日のアカネ達のように。

アカネ達が漁を始めてから、今年で五年が経つ。平均寿命の半分程度だが、このぐらいで死ぬ漁師も珍しくはない。そろそろ今日のような日が来てもおかしくないとは思っていた。流石に、今日がその日だとは思わなかったが。アオイも、大体同じ気持ちだろう。

「……どうせ死ぬなら、『奴』と会った時が良かったなぁ……」

ぽつりと独りごちてみた、途端、『わだつみ』がまたしても揺れる。またファンが壊され、『わだつみ』のコンピューターが姿勢制御を優先したのだろう。速度がまたも格段に落ちた。

『マグロ』達には、自分達の願いを聞き届けるつもりなどないらしい。分かってはいた

事なので落胆はしないが、アカネは大きなため息を吐いた。
操舵室の中に、静寂が満たされる。俯いてしまったアオイをどうやって元気付けるかと、せめて最期ぐらいはお姉ちゃんらしく振る舞おうとして、アカネは『マグロ』達の事を頭の隅へと寄せた
丁度、そんな時だった。
【―ちら、フラ――――。応答――】
『わだつみ』の通信機から、男の声が聞こえたのは。
アカネは頭の中が白くなり、アオイはゆっくりと顔を上げる。二人は同時に顔を向き合わせ、こてん、と揃って首を傾げた。
二人が我に返ったのは、それからたっぷり五秒も経ってからだった。
「お、お姉ちゃん!?　つつつ通信が!?」
「こ、こちら『わだつみ』！」
【おっと、まだ生き――たか。あま――――沈黙が長―から一瞬ひやひ――てしまったよ】
慌ててアカネが通信端末に向けて叫べば、端末からは飄々とした、けれども安堵したような男の声が聞こえてきた。通信が途切れ途切れなのは、距離があるのか、真下に陣取っている『マグロ』達の電磁パルスの影響か。恐らくは両方だろう。
それでも刻々と通信状態が良くなっているという事は、通信相手はこちらとの距離を

段々と縮めている事を意味する。
助けが来てくれた。
その事実を実感し、アカネとアオイに笑みが戻る。姉妹はどちらかが何かを言う事もなく、求めるように互いを抱き締め合った。
しかし何故だろうかと、アカネは首を傾げる。
通信相手の声を聞いていると、何故だか胸のムカムカが止まらない。さっきは反射的に助けを求めてしまったが、助かると思った途端、通信端末に近付くのも億劫になる。
昔の人ほどではないにしても自分は義理堅い方だ、というのがアカネの自己評価。何故自分は恩人になろうとしている人に嫌悪にも似た想いを抱いているのか？
答えは、すぐに分かった。
【さぁ、愛しき未来の花嫁を助けるとしようかッ！】
こんな歯の浮いた事を言う輩は、アカネが知る限り、この世にたった一人しかいないのだから。
アカネが全てを察した――――その数秒後に、大きな爆音が『わだつみ』の側で鳴り響く！　防音製の高い操舵室内でも聞こえる音など砲撃音ぐらいだが、『わだつみ』の砲は動いていない。
余所からの砲撃だ。

「っ！　アオイ！　何かあったらすぐに動けるようにして！」
「うん！」
アカネの指示を受け、アオイは嬉しそうに答えた。アカネは再び望遠鏡を覗き込み、外の様子を確認する。
砲撃の効果だろうか。『わだつみ』の下にいた筈の『マグロ』達が一斉に移動を始めた。海面に大きな水飛沫が上がる。その水飛沫の向かう先を見てみれば、四十五キロほど先に黒い影が無数に見える。
舟だ。それも一隻ではなく、『マグロ』達を迎え撃つように幅広く展開する艦隊である。
船の数は十。サイズからして全てが駆逐艦級であり、横一列に並んでいた。武装は船によって差異があるものの、船体のカラーリングは統一されていて、どれもが黒一色だ……見ていて、目がチカチカしてくるほどに。
とはいえ色彩に不快感を覚えるのはアカネだけのようで、『わだつみ』から離れた『マグロ』達は猛スピードで艦隊に接近していた。小さくて弱そうな船が群れで来たため、簡単に狩れそうだとでも思っているのか。だとするとあの群れは、『マグロ』としては経験が少ない若者達の群れだったのかも知れない。
少なくともアカネが『マグロ』の立場なら、駆逐艦級にケンカは売らない。長生きし

た老個体がリーダーを務める『マグロ』の群れも、駆逐艦級には近付かないと聞く。
何故なら、相性が悪いから。
『マグロ』達は時速五百キロ以上の速さで艦隊に接近。すぐに両者の距離は縮み、戦闘が始まるのもすぐの事。
展開した駆逐艦級の砲が、一斉に火を噴く！
主砲らしきものが起動していない事から、攻撃は副砲に依るものだと推測される。目の前の駆逐艦級に積まれている副砲は、察するに七センチ速射砲。『わだつみ』では採用していない、小型の砲台だ。現代で生産されている艦砲の中でも特に小さな部類であるそれは、初速が秒速三千五百メートルと『わだつみ』の主砲である六十センチ砲を一・五倍以上上回る代物。おまけに極めて単純な発射機構により脅威の装填時間〇・四秒を達成。秒間二・五発という恐るべき連射性能を有していた。
一見して凄まじい性能の砲だが、欠点も少なくない。一番の問題は、根本的に運動エネルギー量が小さく、大抵の海生物の電磁フィールドを抜けない点だろう。『豆鉄砲』なんて蔑称もあるぐらいだ。
されど『マグロ』に対しては必殺の武器となる。
恐るべき速度と反応を誇る『マグロ』だが、弱点は存在する。彼等の驚異的な速度は電磁フィールドが持つ反発力、即ち本来防御として活用する力を速度に転換する事で生

み出しているのだ。海生物の電磁フィールドの出力とて有限の代物。何かしらの形で流用すれば、その分本来の力は失われていく。

要するに『マグロ』達は防御が手薄なのである。具体的には、人が生身で扱える兵器でも理論上は致命傷を与えられるぐらい。

ましてや小型とはいえ重さ十五キロを超える砲弾が、音速の十倍以上の速さでぶつかれば――――結果は言うまでもない。

『マグロ』達は雨のように降り注ぐ砲弾を避けきれず、数体が直撃を受ける。電磁フィールドなどあってないようなもので、小さな砲弾が脳天を貫通。次々と絶命していく。自分達の判断ミスに撃たれてからようやく気付く『マグロ』達だったが、最早後の祭り。反転する暇すら与えてもらえない。

『わだつみ』が苦戦を強いられたのが嘘のように、現れた救援艦隊は『マグロ』達をものの数十秒で殲滅してしまった。相性が如何に大事なものであるか、アカネ達は今更ながら思い知らされる。あまりにも呆気ない『マグロ』達の末路に、アカネは自分達が助かったという実感を中々持てずにいた。

「お姉ちゃん！　私達助かったんだよね!?　ねっ！」

確信を持てたのも、アオイが自分に抱き付きながら耳元で大声を出してから。

生きている。まだ生きていられる。

胸の奥から湧き出してくる感情に、アカネの身体はそわそわと揺れ動く。嬉しいのに何故か目が潤み、喉の奥が何かを叫ぼうとして疼いた。自分の足がむずむずしていて、今にも飛び跳ねようとしているのが分かる。

所謂大喜び。ところがアカネは目許と口元を引き攣らせていた。胸の中をムカムカが渦巻き、今すぐ反転してこの場から逃げ出したい気持ちが湧き出してくる有り様。

何故なら助けに来てくれたのはアカネの知り合いであり、

【アカネ！　大丈夫かい!?　未来の花嫁の身体に傷が付いては溜まらないからね！はっはっはっ！】

毎度毎度何故かアカネを口説いてくる、アカネが苦手としている人物なのだから……

05

こってりとした脂が乗った牛肉のステーキ。
青々としたレタスと真っ赤に熟れたトマトで飾られたサラダ。
小麦粉をたっぷりと使い、酵母を用いて熟成させたほかほかのパン。
それらが、大きな石造りのテーブルの上に乗せられていた。三百年前までの『古代人』達は日常的、とまではいかずとも、さして苦労もなく入手出来たとされる料理。
それが今、テーブルの席に着いているアカネの前に並んでいた。
「……」
「おおおおおお姉ちゃん！　凄いよ！　凄いご飯が！」
思わず出てきた生唾を出来るだけ音がしないように飲み込むアカネの隣で、妹のアオイが目を輝かせながらはしゃいでいる。料理を前にして大興奮など、十六歳のレディとしては些か恥ずかしい言動と言わざるを得ない。
だが無理もない事だ。三百年前の人類が主食にしていたという小麦すら、現代では金があろうとも巡り合わせが悪ければ出会えないほどの珍品なのである。ましてや小麦より生産量が少なかった野菜や、大量の小麦を餌として与えていたという牛など、最早

神話に出てくる秘薬にも等しい品だ。凡人では生涯に一度お目に掛かれるかも分からない食べ物が目の前にずらりと並べば、理性を失うほどはしゃぎたくもなるだろう。

しかし、アカネはこれを喜ぶ訳にはいかない。

何しろ此処にある食材は、アカネとテーブルを挟んで向かい側に座る『男』が用意した品物なのだから。

「ははっ！　それだけ喜んでもらえたなら、こちらとしても用意した甲斐があったというものだよ」

アカネと向かい合う若い男……コウはとても上機嫌な笑みを浮かべながら、気障ったらしく自身の金色の髪を掻き上げる。片目を閉じ、ちらりと見てくる視線がウザったい。

彼が自分達を『マグロ』の群れから助け出してくれた当人でなければ、アカネはその気障ったらしい態度に悪態の一つでも吐いていただろう。

アカネ達は今コウの船に招かれ、食堂にて豪勢な料理を振る舞われていた。料理が気にならないと言えば嘘になるが……アカネは本能を抑え、コウと向き合う。

コウはアカネ達より少し年上の、若々しい青年漁師にして『漆黒船団』の団長だ。漆黒船団は数十名から成る漁師のチームで、数々の海生物を捕ってきたエリート集団。アカネ達の船である『わだつみ』は現在自動操縦により、その漆黒船団と共に航行してい

る。団長であるコウは漆黒船団のまとめ役。故に漆黒船団の事は、コウ一家と呼ぶ事の方が多い。

屈強な海の男を纏め上げるだけにごりごりの筋肉体質かと思えば、彼の身長は百六十センチ台と決して長身ではなく、身体付きは女物の服が似合いそうなほど細い。女性的でもある端正な顔立ちは、しかしハッキリと男だと分かる程度には雄々しく、凛々しい。

そして彼は海生物出現の更に数百年前、中世ヨーロッパの貴族が着ていたというマントやブーツなどの、アカネ的には奇妙な出で立ちを好む。今日もまた腰にサーベルなんかを差しており、胸には勲章が付けられていた。剣なんか使っても海生物には勝てないし、勲章を与えてくれる『クニ』なんてものはとうの昔に瓦解しているのに。

変な奴、というのがアカネの正直な彼への印象なのだが、どうにも世の女性達はこれがカッコいいと思うらしい。おまけにコウ自身、かなり手が早い。

「コウ様ぁ、私のご飯、食べてくださいよぉ」

「もう、今日は私がコウ様とのお食事を楽しむのよ！」

「コウ様……あの、私も、スープを作りまして……」

彼の周りには三人の若い女性達が集まり、彼の食事の世話をしようとする。モテモテなのは結構だ。個人の恋愛に口出しするほどアカネは暇人でも嫉妬深くもない。

「いやはや困ったね。妻達が姦しくて」

しかしながら三人全員（そして此処には居ないが、更にプラスもう一人）がコウの妻となれば、思うところもある訳で。

本当に困ったように呟くコウに、アカネはたっぷりと蔑みを含んだ眼差しで睨み付けておく。

「困るってんなら一人に絞れば良いのよ。四人も奥さんを持とうなんて欲張るからそうなるの」

「いやいや、これは手厳しい。君は五人目の妻ではなく、僕のただ一人の妻になりたいのかな？」

「はんっ、アンタなんかお断りよ。大体私はね、アンタみたいなちゃらちゃらした奴じゃなくて」

「ねぇねぇねぇ！　これ、た、食べて良い!?」

悪態を吐こうとするアカネだったが、アオイの本能塗れの言葉がそれを邪魔した。

「いや、アオイ。コイツちょっとガツンと」

「勿論良いよ。君達が食べてくれなければ、他の者の胃に収まるだけだからね」

「いただきます！」

止めようとするアカネだったが、アオイが従ったのはコウの言葉。アオイは言うが早いかナイフをステーキにぶっ刺した。ナイフをステーキに、だ。取り乱しぶりがよく分

かる行動だった。

妹の大変素直な反応を見ていると止めるのも気が引けて、アカネは深々とため息を吐く。が、仕方ない事だと割り切る。これだけの高級食材を前にして、許しが出たのに食べるのを我慢するなどあり得ない。

自分だってコウへの嫌悪がなければ、同じ事をしていただろうという確信もあった。

「……食べ物で釣ろうってつもり？」

「そんな気はないのだがね。愛する人に美味しいものを食べてほしいと思うのは、おかしな事かな？」

「おかしくはないけど、そーいう台詞を妻が傍に居るのに顔色一つ変えず言える奴は信用ならない」

アカネの棘だらけな言葉の数々に、コウを囲う女達は睨み付けてきて、当のコウは肩を竦めるだけ。まるで堪えていない。

アカネは忌々しげにコウを睨み付けるも、ふと鼻をくすぐる匂いによって、その目付きが段々弛んでいくのを自覚した。

匂いがする方を見れば、アオイがはふはふ言いながらステーキを頬張っている。どう考えてももっと細かく切り分けねばならないサイズの肉を、息が詰まるのも惜しまず食べようとしていた。とても可愛らしくて、とても残念な姿だった。

やがてアオイがステーキ肉を食い千切ると、ほわんと濃厚な香りがアカネの鼻まで漂ってくる。肉汁が飛び散り、机の上を汚した。

アカネは今まで色々な海生物を仕留め、一番美味しいタイミングで食べてき。だが、ここまで濃厚な香りは嗅いだ事がない。噛み切った時に肉汁が飛び散る海生物なんて出会った事もなく、牛の身に詰まった旨味がどれほどのものか想像も付かない。そもそも牛を今まで食べた事がない。

ごくりと、ついにアカネは喉を鳴らす。

そして目の前には、自分の分として置かれたステーキが、ほかほかの湯気を上げていた。右手が無意識にナイフへと伸び、左手が勝手にフォークを掴む。

気付いた時にはステーキを切り分け、一口大になった肉塊が、フォークの先端と共にアカネの口へと迫ってきた。鼻先までやってきて、一層強く主張する香り。我慢など出来る筈もない。

ぱくり、とアカネはステーキ肉を頬張り、

「んふうんんんっ！」

思わず声が出た。

その瞬間から、アカネから理性的な考えは吹っ飛んでしまった。

まだ口の中に残っているのについい新たな肉を頬張り、その溢れ出る美味さに身悶えす

る。濃厚な油分で口周りがべたべたになろうとも、サラダを一口食べればすっきり爽やか。植物など海藻しか食べた事がなかったが、野菜達は海藻と違いシャキシャキとした独特な歯応えをしていて、噛むと瑞々しい汁と香りが口の中を洗い流してくれる。トマトなど、本当に大昔ではこんなものが日常的に食べられていたのかと思うほどに甘い。パンと肉のハーモニーは、頭が真っ白になるぐらい美味しい。

そこから先の記憶は殆どなくて。

「……はっ!?」

気付けば重たいぐらいの満腹感と、目の前に無数の空っぽの皿があった。

「はぁー……しあわへぇ……」

「気に入っていただけたなら何より。アカネが僕と結婚してくれるなら、毎日でも出してあげるよ。勿論アオイちゃんの分もあるからね」

「お姉ちゃん、さっさとこの人と結婚してよ」

「アオイ!?」

食べ物で簡単に裏切る妹に、アカネは少なからずショックを受けた。アオイを誑かした不埒者を睨もうとしたが、コウは顔を背けて笑いを堪えている。どうやらアオイのこの反応はちょっと想定外らしい。ここで怒ると逆に惨めな気がして、喉元まで来ていた言葉を唸り声に変えるしかなかった。

それでも憤りは収まらず。
「ふんっ！　毎日これだけ美味しいものを食べられるなんて、さぞ良い暮らしをしてるんでしょうねっ！」
せめてもの反抗心から、こんな嫌味を言ってしまう。
そう、これは嫌味。コウが顔でも顰めてくれればそれで十分な言葉。
「ははっ。まぁ、毎日は流石に冗談だけどね。ただ、次の仕事がかなり危険そうだから、その景気付けにはなると思ってさ」
しかしコウは、アカネの言葉にこう答えた。
アカネの顔が強張る。嫌悪ではなく、一人の『漁師』として。
「……危険な仕事？」
「『沖』の海生物が来ているという噂は聞いているだろう？　どうやら、そいつがこの辺りの海域に棲み着いているらしい。それを退治する」
「えっ!?　『沖』の生き物って、滅茶苦茶強いんじゃ……それに、ほっとけば帰るって言うし、お金になるか分からないし……」
アオイが訊き返せば、コウはこくんと頷き肯定した。笑顔を浮かべたまま、何時もと顔色一つ変えずに。
「金銭的な問題はない。知り合いの成金がね、その海生物の剥製を高値で買い取ってく

れる約束だからさ。それにそいつは、かなり漁場を荒らしているらしい……そろそろ退治しないと、この辺りの漁師の生活も危うくなる。やり甲斐があるだろう？」
「……成程。この大艦隊は、その『沖』の生き物とドンパチするため戦力と。やっと合点がいったわ。私達を助けたのも、戦力補強の一環かしら？」
「あまりうちの一家を見くびらないでくれよ。そこまで戦力には飢えていないからさ」
意地悪く尋ねるアカネに、コウはきっぱりと否定する。
自分への悪口は許せても、『家族』への悪態は見過ごせないのだろう。
「……ごめんなさい。不躾だったわ」
「そーいう素直なところも可愛くて好きなんだけどね」
ぽつりと謝れば、コウから飛んできたのは口説き文句。やっぱり謝らなきゃ良かったと、少し後悔した。
「そういう訳だから、この辺りの海域の探索をしていてね。君達の護衛はそのついで、という訳さ」
「ふん。最初からそう言えば良いのに」
「もぉ、お姉ちゃんったら。助けてくれるんだからちゃんとお礼言わなきゃ」
「つーん」
アオイの小言からそっぽを向き、アカネは見せつけるように唇を尖らせる。

それでも、不機嫌という事もなく。

後から出てきたアイスクリームなるもの　―　古典曰く、子持ちの牛しか出さない乳に、高価な砂糖を山ほどぶち込み、凍らせるという意味不明な手間を掛けた一品　―を見た途端二人の少女は目を輝かせ、夢中になってそれを頬張るのだった。

……

…

「美味しかったねぇ……」

「美味しかったなぁ……」

『わだつみ』に帰ってきたアカネとアオイは、狭いベッドの上に並んで寝転がりながら、幸福に満ちた言葉をぼやいた。

貧乏漁師であるアカネ達には縁遠い、高級にして美味なる食材達。食用海生物が不味いと思った事はないが、あれほど多様にして美味なものに囲まれていた古代人達が実に羨ましい。

「コウさんと結婚したら、毎日とはいかなくても偶にはこーいうの食べられるのかなぁ」

だからといって、アオイの独り言に同意する気はなかったが。

むくりと起き上がり、アカネはアオイをじとっとした眼差しで見据える。姉の不機嫌

表明に、アオイもむくりと起き上がってアカネと向き合う。
どうにもアオイは、結婚という言葉を軽々しく使う。
アカネは如何にも怒ってるぞとばかりに口をへの字に曲げながら、アオイにお説教をする事にした。
「あのねぇ、アオイ。結婚ってのは、そーいう事だけで決めちゃ駄目なのよ。分かる？」
「別にご飯だけで勧めてる訳じゃないよ。コウさん、悪い人じゃないでしょ。冗談めかして言う事はあっても、基本的には真面目で誠実じゃん」
「うぐ……」
お説教のつもりが言い返されて、アカネは言葉を詰まらせる。確かに、その通りだとはアカネも思う。歯の浮くような台詞ばかり言うが、嘘は吐かないし、仕事には真面目に取り組む。でなければ何十もの漁師を束ねる一家の頭など名乗れはしないし、いくら美形でも女達だって付いてこないだろう。異性として見れば、間違いなく魅力的な存在だ。
加えて言うならば。
「あとお姉ちゃんはコウさんの駄目なところとして、女癖が悪いところを挙げるけどさ。今時一夫多妻なんて珍しくもないじゃん」
アオイが言うように、時代に合っていないのはアカネの方だったりする。

働き盛りの男ですら食糧を十分に確保出来るか分からないこの時代、女性にとって結婚は、一つの『生活保護制度』と化していた。恋愛結婚がないとは言わないが、食事も用意出来ない相手とするのは心中と変わらない。だから一般的な女性は、安定的に食糧を買える富裕層か、自分で食糧を手に入れている人物を結婚相手に選ぶ。

こうなると男性側で結婚出来るのは金持ち、或いは食糧生産職（大抵は漁師）だけ。当然ながら全ての男達がそこに属せる訳もなし。該当する男性は一割にも満たない。そのため一夫一婦制ではどう足掻いても大部分が余るし、結婚出来なかった女性は飢えて死ぬしかない。人口は世代を経る度に十分の一となり、人類滅亡待ったなしだ。

現代社会の婚姻制度が一夫多妻……自分以外も養えるリソースを持った少数の男性が、社会体制を維持出来るぐらい大量の子を作る社会体制なのは、正しく『時代』に適応した結果なのである。そしてこの観点から言えば、アカネの考えは時代にそぐわない、淘汰されるべき思想。アカネ自身、それは自覚しているつもりだ。清純さを守るため、人類に滅びの道を突き進めと言うつもりは毛頭ない。

しかし、だけど、だとしても。

「……それでも、私は、旦那様には、私だけを愛してほしいもん」

自分の夢だけは、譲る気になれなかった。

「……ほんと夢見る乙女だよねぇ、お姉ちゃんは」

「う、うっさい！　文句あるの!?」
「別にないけどね。あーあー、なんでコウさんったら私を選ばないのかなぁ。私だったらすぐＯＫしちゃうのに、お姉ちゃんったら勿体なーい」
「うぐ、うぐぐぐ」
　アオイの言葉に、アカネは唸るばかり。意地を張ってるのは自分の方だという自覚はあるが、だからといって煽られてすんなり受け入れられるほど、恋する乙女の心は広くない。
「というか、そんなんじゃお姉ちゃん、一生結婚出来なさそうだよね」
　ましてや、言ってはならぬ事を言われたら。
「う、うるさーいっ！」
　アオイの煽り言葉に、アカネはついに手が出る。ポカッ、とアオイの頭から可愛らしい音が鳴ったが、アオイはケラケラと笑うばかり。
　まるで堪えていない妹に、アカネのボルテージは右肩上がり。留まる事を知らない。
「こ、この！　バカバカバカっ！」
「あははっ、ごめんごめん。言い過ぎたからもう叩かないでよー。何時かお姉ちゃんを迎えに、白馬の王子様が来てくれるって……まぁ、馬なんかもう絶滅してるし、王政が残っているとも思えないけど。ぷくく」

怒りを露わにしても、アオイはどんどん油を注いでくる。お陰でアカネの怒りは収まらず、ポカポカポカポカ、延々アオイの頭を叩き続けた。わいわいぎゃーぎゃーと、賑やかに騒ぐ。

仲良し姉妹の夜は、お互いに疲れ果てて倒れるまで続くのであった。

06

アオイはコウの事が割と好きである。

彼は教養が豊富なのもあって話していて楽しいし、小さな事でも心配りをしてくれるタイプなので兎に角不快感がない。顔だって見ていて『良い』と思えるし、素行も良好。好きにならない方がおかしいだろう。

姉であるアカネは悪態やら棘のある言葉やらを向けてばかりだが、アレは単純にコウの恋愛観が気に入らないだけ。毛嫌いしている訳ではないし、むしろ友人としては好んでいるだろう。とはいえ、マイナス要素がある分、アオイの方が好感度が高いのは確かだ。

では、アオイはコウに恋愛感情を抱いているのか？

そう問われたなら、答えは否である。何しろアオイはアカネと違い、恋愛感情というものがよく分からないのだから。いや、或いはアカネも単に憧れを述べているだけで、本当の恋など分かっていないかも知れない。何しろ「ごはんを毎日食べさせてくれる」が結婚理由一位になるご時世だ。普通の恋愛というのは、心に余裕があるから出来るものなのだ。

そういう訳でアオイ的には、コウと是非とも結婚したいと思っている訳ではない。むしろ今この瞬間に結婚を申し込まれたら、間違いなく断る。昨日の姉にはジョークで受けると答えたが、アオイはまだまだアカネと一緒に暮らしたいのだ。アカネ〉コウの好感度不等号が成り立つ限り、コウに気持ちが靡く事はありえない。

つまり。

コウの第一妻であるミス・パープルが自分を喫茶店に呼び出す理由など、アオイにはとんと思い付かなかった。

「ごめんなさいね、お仕事で忙しい中来てもらって」

「あ、いえ、だ、大丈夫です。その、ひ、ひ、人と会う仕事は、主に姉がしてくれてますので、み、港に着いてからは、私は暇ですし……」

ミス・パープルの謝罪に、アオイは慌てて問題ない事を伝えようとする。ただしどもりまくりで、顔も引き攣っていたが。

アオイは基本的に人見知り気質だ。

双子の姉であるアカネは初対面の人とも適度な会話が出来、打ち解けられるが、アオイにはそれが全く出来ない。今日も仕事　―　ニホンレットウから運んできた荷物をインドネシアショトウへと届ける事　―　で取引相手と対面するのは、姉であるアカネがやってくれている。

一応ある程度親しい相手ならば普通に話せるが、そうでないとガチガチに緊張してしまう。コウとは交流があるため普通に話せるのだが、今日自分を呼び出したミス・パープルと面と向かって、おまけに二人きりで話をするのはこれが初めて。アオイの頭は緊張で真っ白になっていた。

対するミス・パープルは、アオイの挙動不審ぶりを見ても嫋やかさを崩さない。浮かべている微笑みは母親を彷彿とさせる柔らかさがあり、腰まで伸びた紫の髪　―色合いからして染めたものだろう。それだけで彼女の生活の豊かさが窺い知れる　―　はふわふわと膨らんでいて、顔を埋めたらどれほど気持ち良いのかとちょっぴり危ない感情が心に芽生える。コウの第一夫人……正妻らしく出で立ちは可愛らしい姫君のようなドレス姿だが、コウのような気障ったらしさや、或いは痛々しさもない。自分達より一回り年上との話だが、どう見ても同年代に見える愛くるしい顔立ちの所為だろうか。

「注文はお決まりですか？」

桁違いの存在感にアオイがわたわたしていると、店員が声を掛けてくる。アオイが我に返った時、ミス・パープルはメニューを開いて既に飲み物を頼んでいた。アオイも慌ててメニューを開き、一番安いものを頼む。

注文を受けた店員はそそくさと立ち去り、再びアオイはミス・パープルの二人きりに。一瞬弛んだ緊張が段々と戻ってきて、またそわそわしてしまう。

「取って食べたりしませんから、そんなに緊張しないで大丈夫ですよ」
そうしているとミス・パープルに優しく声を掛けられてしまい、アオイは赤くした顔を俯かせる事になった。
ただ、先程の一言が上品な貴族のような見た目をしているミス・パープルの『小粋なギャグ』だと気付くと、一瞬ポカンとしてから、アオイは笑いが腹から込み上がるのを感じた。
未だ緊張はしているが、先程よりは幾分マシになった。
これなら多少はお話も出来そうだと、アオイはミス・パープルと顔を向き合わせる。ようやく目を見てくれた事を喜ぶように、ミス・パープルは優しい微笑みを浮かべた。
やがて店員が注文した飲み物を持ってくる。鼻を近付ければ、薄らとだが『アルコール』の臭いが感じられた。
店員が持ってきた飲み物はお酒だった。しかしこれは嗜好品の類ではない。
海生物の影響や戦争により荒廃した地上では、水が豊富だとされていた『ニホンレットウ』ですら真水が殆ど入手出来ない状態にある。上下水道のインフラが機能していない事もあり、手に入るのは不衛生で、味も悪い泥水ばかり。これをそのまま飲むのは味覚的にも難しいし、下手をすれば下痢などの感染症により死に至る。
こうした水の浄化に、お酒のアルコールが活躍する。アルコールには殺菌作用がある

ため、発酵させる事で雑菌が死滅。細菌塗れの泥水でも飲めるようになるのだ。味も泥水よりはマシ。実際中世ヨーロッパのように真水が貴重な場所では、アルコール飲料が生きるために欠かせなかった。全盛期の人類にとって酒は嗜好品だが、大昔や現代では必需品なのである。

アルコール発酵には糖が必要であり、三百年前の人類は果実や穀物を用いていた。現代では果実も穀物も殆ど手に入らないが、代用品ならたくさん手に入る。それは海生物の血液。大抵の海生物の血液には大量の糖が存在しているのだ。電磁フィールドを展開している細菌が脂質を分解して合成しているとの説が有力だが、詳しい事は兎も角、糖があればアルコール発酵が行える。

かくして海生物の血液を投じて大量の水を発酵させたのが、現代の主流な飲料水だった。一般市民ではこれが普通の飲み物で、赤ん坊にも（汚水を飲ませるよりはマシなので）飲まされている。貧乏漁師であるアオイも飲料の主体はこの海生物酒。口に含んだ瞬間広がる慣れ親しんだ味に安堵を覚えた……正直美味しいものではないのが。ミス・パープルも同じ気持ちなのか、ちょっとだけ眉を顰めながら、ホッと息を吐いていた。

ミス・パープルは一口付けたコップをテーブルに置き、一呼吸置く。

「訊きたいのは、あなたの姉であるアカネさんがどうしてコウを嫌うのか、なの」

それからついに、本題を切り出した。

尤もアオイには何故そのような問い掛けをされるのか分からず、こてんと首を傾げてしまうのだが。
「……お姉ちゃん、コウさんの事嫌ってはいませんよ？」
「あら、そうなの？　結婚の誘いを何度も断っているから、てっきり」
「うちのお姉ちゃん、今時珍しい恋愛結婚主義なんですよ。だから愛がない結婚はしないんだーって」
「成程ね。それじゃあコウと結婚は出来ないわね」
アオイが説明すると、ミス・パープルは納得したようにこくこくと頷く。妻であっても彼の軽薄さはよく知っているのかと、ちょっと吹き出しそうになった。
「あの人、愛しているのは私だけだから」
ただしミス・パープルが続けた言葉で、その笑いも引っ込んでしまったが。
「……え？」
「これでも第一夫人、つまり最初の妻よ？　心から愛する人は、私が最初で最後。プロポーズの時、そう言ってくれたんだから」
「は、はぁ……え、恋愛結婚しているのなら、どうしてコウさんは色んな人を妻にしているのですか？」
ミス・パープルの話に、思わずアオイは訊き返す。愛がなくても結婚は出来ると考え

るアオイであるが、恋愛結婚をするような男性が周りに他の女を侍らせるというのは流石に矛盾していると思う。ましてや恋愛結婚をしたというミス・パープルが、他の女が次々に夫人となる中で、夫は自分だけを愛してくれているとどうして信じられるのかさっぱり分からない。

そんなアオイの気持ちを読んだのだろうか。ミス・パープルはくすくすと、イタズラが成功した子供のように楽しげに笑う。

「あの人、面倒見が良いから。苦労している女の人を見過ごせないのよ。男は自分でなんとかしろって言うけど。きっと、地球で最後のフェミニストね」

「はぁ……つまり、可哀想な女の人を自分の保護下に入れてるって事ですか？　それはまぁ、優しい事だとは思いますけど、ならなんでお姉ちゃんに求婚するのですか？」

確かに、アオイ達姉妹の生活は決して裕福ではない。漁師という仕事の危険性を思えば、何時までも続けられるものではないだろう。

しかし漁師という仕事柄食べ物には困っていないし、何時死ぬかも分からない生活なんてのはこのご時世珍しくもない。アオイには自分達が特段不幸だとは思えず、コウが姉を『保護』したい理由が分からなかった。

「ああ、ごめんなさい。勘違いさせちゃったわね……コウは可哀想な女性じゃなくて、何かを背負っているような、ほっといたら潰れそうな女の子を保護している、というべき

ね」
　尤もミス・パープルが説明を訂正した途端、一気に合点が行ったが。
　そしてその気持ちはアオイの顔に現れていたらしい。
「心当たりがある、って顔ね」
「……これでも妹ですので」
「話せる内容？」
「私から聞いたってお姉ちゃんに言わないなら」
「だったら是非教えてほしいわ」
　ミス・パープルの予想通りな答えに、アオイは少し眉を顰める。小さな深呼吸をして、気持ちを落ち着かせて……ゆっくりと口を開く。
「うち、五年前に両親が死にまして」
　その口から、自分達の境遇を語った。
「……そうなの」
「まぁ、別に珍しい話でもないですけどね。今って平均寿命五十代未満らしいですから、孤児なんてそりゃ幾らでもいますし」
「原因を聞いても大丈夫？」
「むしろ今からそれを話そうと思っていまして」

アオイは一度話を区切り、お酒を一杯口に含む。唾液で粘ついていた口内が、水気でスッキリした。

「うちの両親は、まぁ、漁師でして。私達が今使っている船も、両親から譲り受けたものです」

「そう……大事な遺品なのね」

「割と酷使しているから申し訳ないとも思いますけどね。昨日もスクリュー壊しちゃったし……そろそろ交換時だったから、結果的に丁度良かったとは思いますけど」

少し話題が逸れましたか。そう言って、アオイは話を元に戻す。

「ともあれ、昔は両親と一緒に私達も漁に出まして。贔屓目だとは思いますけど、腕の良い漁師だったと思います。少なくとも今の私達よりはずっと上手かった。危険な海生物も次々獲って、村のみんなに食事と水を届けて、幼い頃の私にとっては正にヒーローでした」

「それはお姉さんにとっても？」

「勿論。むしろお姉ちゃんの方がパパとママが大好きな感じ……あ」

『昔』の両親の呼び方を出してしまい、慌ててアオイは口を閉じる。ちらりと見たミス・パープルは今までと変わらない笑顔で、なのにやたらと微笑ましそうに見えるのは何故か。自然と顔が熱くなってきて、アオイは誤魔化すようにお茶を飲む。

「……お、お父さんとお母さんの事、お姉ちゃん大好きでしたから」
　それからしっかりと言い直してから、話を続けた。
「だからお父さんとお母さんが、海生物との戦いで死んだ時、お姉ちゃん凄くショックを受けてて。私は、まぁ、所謂『今風』の性格なんで、悲しくはありましたけどすぐに立ち直れました。でもお姉ちゃんは……」
「……あの、少し脇道に逸れるような、というより重箱の隅を突くような質問をしても良いかしら？」
「あ、はい。大丈夫です。どうぞ」
「さっき海生物との戦いでって言ったけど、漁で、じゃないの？」
　ミス・パープルからの質問に、アオイは自分が無意識に言っていた言葉に今更ながら気付く。
　隠すような事ではない。話の内容が、予定よりも少し深くなるだけで。
「……奴を倒せたなら、村まで持っていったという意味では、漁です。でも、アイツは、そんな事を考えられる相手じゃなかった」
　目を瞑り、意識を過去へと向ければ、何時だって思い出せる。
　五年前のあの日。新調した船に両親が乗り、自分達姉妹はお古である『わだつみ』に乗って、何度目かの漁に出ていた。目的の海生物は『サンマ』。海生物の中では数が多

く、小型で、戦闘能力も低い、けれども『わだつみ』にとっては苦手な相手……つまりは未熟な自分達の練習相手にピッタリな海生物だった。そのまま『サンマ』に出会えていれば、失敗したにしろ成功したにしろ、両親はまだしばらく生きていてくれただろう。

だが、突如訪れた嵐と共にやってきたのは、『サンマ』ではなかった。

具体的な姿は見ていない。けれども嵐の中で煌々と光り輝く電磁フィールドの強さはそれまでに、否、今までに見てきたどんな海生物よりも強大だった。速力も『わだつみ』どころか両親の乗っていた当時最新鋭の船さえも凌駕していた。

今でも、あの海生物がなんなのかは分からない。未だ頭の中に残る、あの鳴き声……まるで金属を引き裂くような、地獄から吹き鳴らされたラッパのような、おぞましい……だけが唯一の手掛かりだ。

あの海生物の実力がどんなものだったかは分からない。しかし嵐の中でも見える輝きの強さから、当時の『わだつみ』の武装では ― 目的にしていた『サンマ』が小型種という事もあり ― その海生物の電磁フィールドを破れそうにはなかった。逃げようにも振り切る事は出来ない。

だから、誰かが海生物の気を引く囮になる必要があった。

「その囮を両親がやった。私達はその間に逃げ出して丘まで戻り、両親は何時までも帰ってこなかった……漁師の家族としては、珍しくない話ですね」

長々とした昔話を終え、お酒を一口。アオイは一息吐いた。
実際、アオイ達のような境遇は珍しいものではない。
海生物との戦いは、何時だって命懸けなのだ。漁師の最期というのは大概にして海生物との闘争に敗北する事であり、それは漁師やその家族の若さなど関係なく訪れる。漁師は結婚相手に恵まれる反面、孤児となる漁師の子も少なくはない。むしろ未熟とはいえ漁に参加出来るまで一緒に暮らせた自分達姉妹は比較的幸福な方だと、アオイ自身は思っている。
こんなのは、今の時勢を生きる人々にとっては有り触れた話。当事者からすれば語る事すら小っ恥ずかしい。
されど聞かされた側としては、少なからず神妙な気持ちになってしまうらしい。
「……ごめんなさい。辛い事、思い出させちゃって」
「あ、いえ。私は平気なんです。さっきも言いましたけど、私は割と今風の考えなんで。ただお姉ちゃんは、多分まだ割り切れていなくて……一夫一妻って家族の形に拘るのも、うちの両親が恋愛結婚だったからだと思うし」
それに……
喉元まで来ていた言葉を、アオイは飲み込む。これをミス・パープルに言う必要はない。あくまで妹の目から見た憶測であり、何より『家庭の問題』なのだから。

「事情は分かったわ。そういう事なら、コウの求婚を受けないのも納得ね。いえ、むしろコウの求婚で、不快な想いをしているんじゃ……」

「あ、いえ。そこまで気を使わなくても大丈夫です。割り切れてないって言いましたけど、所謂トラウマとかじゃないですし、お姉ちゃんだって自分の考えが古い事は自覚してますから。それにいきなり求婚が止んだら、それはそれで勘繰られそうで」

心から同情したような顔を見せるミス・パープルに、アオイは慌ててフォローを入れる。ミス・パープルはアオイの言葉が気遣いの類でない事を察してくれたのか、こくりと頷いた。

本当に気にしていない身としては、気遣いそのものが煩わしい。なんだかどっと疲れが出てきて、アオイはコップの中身を一気に飲み干す。空っぽになったコップを見たミス・パープルは、立てかけていたメニューを手に取った。

「どうする？　おかわりを注文しましょうか？」

ミス・パープルの言葉に、アオイは少し、ほんの少しだけ考え込んだ。ほんの少し考えれば、答えはすぐに出せた。

親切にしてくれたのは嬉しい。が、やっぱり人付き合いは苦手だ。苦手な事はしたくない。

アオイはにっこりと、出来るだけ頑張って朗らかな笑みを作る。

「すみません。そろそろ姉の仕事も終わりそうなので、ここで失礼します」
なるだけ丁寧に、ミス・パープルに話を打ち切りたい旨を伝えるのだった。

07

「はぁぁぁ……海は良いねぇ。誰とも顔を合わせずに済むから」
「いきなり何言ってんの？　というか私と毎日顔を合わせてるじゃん」
感極まったような妹の言葉に、アカネは首を傾げた。
輸送の仕事を終え、アカネ達が乗る『わだつみ』は帰路に付いていた。インドネシアショトウで受けた修理は大変質が良く ― ― 変な修理をしないよう、アカネがきっちり見張っておいた成果もあるだろうが ― 、『わだつみ』の運用に支障は出ていない。何十トンにもなる荷物を下ろした分、速度と小回りに関しては行きよりも好調なぐらいだ。今も豪快なエンジン音を奏でながら、燦々と朝日の降り注ぐ大海原を駆けている。
そんな快適な帰り道故に操縦士である我が妹は上機嫌で、だから変な事を言うのだろうか？　妹の気持ちをなんとか理解しようとするアカネだったが、なんだか納得出来ず、分からず終い。しかしどうせ大した事ではないだろうと、あまり真面目に考えるつもりもなかった。
それに自分は『艦長』なのだ。何時海生物に襲われるか分からない大海原のど真ん中、一瞬たりとも周囲の警戒を怠ってはならない。

……その警戒も、今に限れば不要なのだが。
「それにしても、随分豪快な警備よねぇ。やっぱり暇なのかな」
「ご好意は素直に受け取った方が良いと思うよ、お姉ちゃん」
無意識に呟いた言葉に、今度はアオイがツッコミを入れてくる。
ソナーに映る、七つの小さな白い点。
併走してくるそれらは、言うまでもなく海生物――――ではなく、『わだつみ』の護衛に付いたコウ達の船だ。ボロボロになった行きは兎も角、帰りまで護衛されるなど漁師の恥だ！　と言って断ったのだが、コウは聞く耳を持たず。妹のアオイからも「『沖』の生き物がいるって話だし、守ってもらう方が得じゃない？」と極めて合理的な意見を言われ、反論など出来る筈もなく。
かくしてアカネは、コウ達の護衛を受ける羽目になったのだ。
「ああもう……ほんとにお節介なんだから……」
「してもらえる方が、ありがたくない？」
「ありがたいけどさ……」
はぁ、と小さなため息を漏らす。辺りを警戒する必要がないので、存分に項垂れる事が出来た。
「それとも、『沖』の海生物には自分が会いたいとか思ってる？」

ただし、アオイがこんな疑問をぶつけてくるまでの間だったが。
「……何よ、いきなり」
「だってお姉ちゃんも私と同じで、基本的には使えるものは使う派じゃん。悪態の一つぐらいは吐いても。だから何時までもぶーたれてるのは、コウさん達と一緒に行動したくない理由があるのかなって。で、思い付いたのがそれ」
「逆に訊くけど、なんでそんな事すんのよ」
「パパとママの仇かも知れないから、とか？」
ピクリと、アオイの一言でアカネは眉間に皺を寄せる。
もしもこれが妹からの言葉じゃなければ、相手の胸倉を掴むぐらいの事はしたかも知れない。
何分その指摘が、図星を付いていたので。
「……なんでそう思う訳？」
「お姉ちゃん、パパとママが死んでから『わだつみ』の武装をどんどん強化していったから。それも重武装化。狙うのも大型種ばかりだし。あの時の海生物も多分大型種だし、倒すための練習も兼ねているのかなって」
アオイの言葉に、アカネはしばし無言を貫く……アオイが延々と返事を待つものだから、大きなため息を吐いて肯定しておいた。

流石は我が妹と褒めるべきなのだろうか、それとも自分の分かりやすさを反省すべきなのか。

しばし考え込み、アカネはゆっくりと顔を上げる。元より間違った事をしているとは思っていない。なら今度は、アオイの考えを問い詰める番だ。

「アオイはさ、パパとママの仇を討とうとは思わないの」

「出来る事ならしたい。でも無理に討とうとは思わないし、倒してくれるのなら自分以外でも構わない」

「ああ、成程」

すごくアオイらしい考え方ね。

何気なく漏らした、たった一言。他人や友人ぐらいなら、その言葉の奥底にあるものなど気付かなかったに違いない。

しかしアオイは肉親だ。十七年もの間、ずっと一緒に暮らしていた。たった一言からアカネの心を見抜くなど造作もない。

だから振り返った際の目付きが、睨むようなものだったのだろう。

見抜かれているのなら、言っても言わなくても同じだ。同じだから、自制が利かない。本当は、言ってしまうのと、言わないでおくのとでは、明らかに違うというのに。

「私には親の仇が今ものうのうと生きてるなんて、そんなの我慢ならないのに」

ついアカネは『本音』を告げてしまった。

一瞬。

ほんの一瞬で、操舵室の中が静まり返ったような気がした。此処にはアカネとアオイの二人しか居ないのに。その後続いた沈黙も、ほんの一呼吸ぐらいの時間しかなかったのに。

「……あっそう」

たった一言の返事を最後に、姉妹の会話は途切れた。

後は黙々と、船を操舵するだけ。

『わだつみ』のエンジン音だけが操舵室に響く。『わだつみ』が自動航行状態のためやる事がないアオイは虚空を眺めながら退屈そうに足をパタパタと動かし、アカネはモニターに表示されるニホンレットウまでの推定距離が刻々と減っていくのをぼうっと眺めるだけ。

無為な時間が、過ぎていく。

その時間を終わらせたのは、アカネの席にある通信機から鳴り響く、着信を知らせる音だった。

ぼうっとしていたアカネはビクリと身体を震わせ、アオイも驚いたのか反射的にアカネの方へと振り返る。ふとした拍子に目を合わせた二人は、ハッとしたように二人同時

に目を見開き、二人同時に視線を逸らす。
　こほん、と咳払いをして気持ちを切り替えてから、アカネは通信機のスイッチを入れた。
「はい、こちら『わだつみ』」
【こちら『フラガラッハ』】
　アカネが応答すると、通信機から聞こえてきたのはコウの声と、彼が乗る船の名前だった。
　反射的に顔を顰めそうになるアカネだったが、すぐに真剣なものへと変える。今し方通信機越しに聞こえたコウの声は、自分を口説く時のような甘さがない。真面目で、余裕がない声だ。少なくとも、世間話をするための通信ではないらしい。
「何か用、ジュリオ」
【仲間の船が魚影を捕らえた。現在はソナーに映っていないが、一瞬見えた魚影はかなり大型だったと聞く。そちらのソナーに反応はないか？】
「って、事らしいけど」
「うちのには、特に反応はなかったと思う」
　訊けば、アオイはすぐに答えてくれた。思う、と曖昧な表現はしているが、間違いはないだろう。例えお喋りの最中であっても、ましてやケンカ中だとしても、アオイが魚

影を見逃すなんてアカネには思えないのだから。

『わだつみ』のソナーとコウ達の船のソナーは、同じぐらいの性能を有している。恐らく距離的な問題で『わだつみ』のソナーには映っていないのだろう。

「一応警戒はしておくけど、あまり期待しないでよ」

【ああ、そうしておこう……何かあれば連絡をしてくれ。以上。通信を終わる】

コウは最後に少しだけ何時もの調子を取り戻した口振りで返し、通信終了を伝える。漁師のマナー ― というより慣例だが ― として、通信の終え方は『話し手』が終わりを伝え、受け入れた聞き手が通信機のスイッチを切るもの。アカネもそれに従い、自分から通信のスイッチを切った。

それから、考えを巡らせる。

ソナーに一瞬だけ映った大型種らしき影……なんらおかしな話ではない。海生物は大型種ほど電磁フィールドが強力になり、その電磁フィールドの影響でソナーに映り難くなるもの。しかしながら海生物もまた生物であり、代謝などの影響から電磁フィールドが乱れ、一瞬だけソナーに映る事があった。その一瞬を、運良く見る事が出来たのだろう。

問題は、だとしたら大型種が近くに来ているという事。大型種の戦闘能力は極めて高い。可能な限り遠距離から撃破するのが好ましいが、しかしソナーに映らないとなると

位置の把握は困難だ。
　では大型種の接近にはギリギリまで気付けないものなのか？　その答えは否だ。
　強力過ぎる電磁フィールドは水中での移動を妨げてしまう　―　水圧と海水中の金属イオンが電磁場に干渉するためらしいが、現人類の科学力ではよく分からない　―　ため、大型種は深海まで潜れない。最大級の海生物になると、常に海面から背中丸出しで泳いでいる事もあるぐらいだ。他の海生物も似たようなものだが、大型種はこの傾向が顕著である。
　即ち、大型種らしき影が確認出来たら海面付近を『目視』で見張る。これが基本の対策だ。
「ちょっと望遠レンズで外見てる。何かあったら教えて」
「分かった」
　アオイに指示を出し、アカネはすぐに『わだつみ』の望遠レンズを覗き込んで辺りを警戒する。
　……少なくとも、見える範囲に海生物らしき姿はない。
　大型種は身体に比例して脳も大きくなり、中には高い知能を持つ種もいる。『わだつみ』含め八隻もの大艦隊を目にして、自分の不利を理解してそそくさと逃げ出すという事も十分あり得た。

姿は何処にもなく、ソナーを見ているアオイからの連絡もない。だとすると、やはり逃げたのではないか。

十分以上なんの進展もなく、アカネの集中力も切れてきた。コウ達の船も同じ対応をしている筈なので、自分が一時的に目を離しても問題はない筈。一旦気持ちを切り替えようと、アカネは双眼鏡から目を離した

「お姉ちゃん！」

丁度そんな時に、アオイが叫んだ。

油断をしていた時の大声に、身体が自然に跳ねる。望遠レンズを押し退け、アオイが居る前部座席に身を乗り出した。

「どうしたの、アオイ。なんかあった？」

「なんか、ソナーに変なのが……」

アカネが尋ねると、アオイはソナーを指差しながら困惑した様子で訴える。

見れば、確かに奇妙な白い影が映っていた。数は三。大きさはかなり小さく、速度は……時速三百キロ近い。

凄まじい速さだった。これほどの速さとなると『マグロ』か。アカネはすぐに望遠レンズを覗き込み、ソナーに反応があった周辺の海面を注視する……が、何も見えない。いくら待っても、全然。

自分が見ている場所を間違えている？　急いでアカネはソナーをもう一度見るが、しかし反応は間違いなく自分が覗いていた場所にあった。では潜っているのか、とも思ったが、映り込む白点の濃さからして海中ではない。いや、そもそもこの濃さは海中ソナーの反応ではなく、併用している対空ソナー側の反応のようだった。対空ソナーは海面よりも上に浮かぶものを捕らえるための機材。つまり相手は海面より上に居る。

あと自分達の隣を走る船と、そろそろ重なる頃じゃないか。

――――その考えと共に悪寒が背筋に走った、丁度その時だった。

ズドン！　と、身体に響くような爆発音がしたのは。

08

「……は？」

爆発音に対しアカネが最初に起こした反応は、唖然とする事。それから無意識に操舵室の窓から、海を眺める。

目を向けた場所では、濛々と黒煙が昇っていた。

黒煙の中には火花が混じっていた。つまり何かが燃えているという事である。この大海原のど真ん中で、一体何が燃えるというのか？　極めて明白な答えがあるというのに、その答えに辿り着けない。理性が、感情が、それを避けて、もっと『マシ』な可能性を探そうとしている。

しかしそんなものは存在しない。いずれ辿り着いてしまう。

自分の隣を走っていたコウの仲間の船が、突如として爆発を起こしたのだという事に。

「あ、アオイ！　救命用の浮き輪を出して！　早くっ！」

「う、うん！」

答えに至った瞬間、アカネは顔を青くしながらアオイに指示を出す。アオイがコン

ソールを叩き始めたのを見届けてから、アカネは望遠レンズを覗き込んで隣に居る船の姿を確認する。

コウの仲間の船……名前は確か『アスカロン』だったか……は囂々と炎と黒煙を吹き上げていた。その熱量と煙に耐えかねてか、次々と乗組員が海に跳び下りている。確かに燃え盛る船の上に居れば焼け死ぬしかないが、逃げた先には飢えた海生物が泳いでいるかも知れない。それに船が沈む際、周囲の海水も巻き込まれる。つまりすぐにでも救助せねば、跳び下りた乗組員の命はないという事だ。

不運な事に、アカネの見立てであるが『アスカロン』はもう長く持たないように思えた。船体の数ヶ所が、まるで捲れ上がるように吹き飛んでいるのだ。破損しているのは船体前方の側面数ヶ所。海水が流れ込む位置ではないが、吹き飛んだ部分は軽くなるため、船体のバランスが極めて悪い。いずれひっくり返ってしまうだろう。

アオイの的確かつ迅速な操作により、『わだつみ』側面から救命用の浮き輪が射出される。跳び下りた乗組員の数には到底足りないが、浮き輪と繋がっているロープにもしがみつける。海に浮かんでいる『アスカロン』の乗組員達は見える限りでは全員捕まったようで、アカネは少しだけ胸を撫で下ろした。

『アスカロン』に何が起きたのだろうか？　海生物の襲撃を受けたのか。いや、海生物は体当たりや噛み付きが主な戦闘方法。船体に付く傷はへこむような、或いは抉れるよ

うな傷が主だ。では事故で爆発を起こした？　それも違う。一般的に爆発を起こすような場所は、エンジンか砲台の根本――砲弾が多数存在する、文字通りの火薬庫だ――である。しかし『アスカロン』に開いた穴は船体前方側面。エンジンは船体後方にあり、砲台は甲板部分にあるものだ。どちらかが爆発したにしては位置がおかしい。

考えたくないが、一番可能性が高いのは艦船による砲撃か。確かにこの時世、海賊なんて稼業も珍しくない。アカネも何度かそういった海賊を六十センチ砲で船ごと跡形もなく吹っ飛ばしてきた。先の三つの反応も砲弾だとすれば、本来船影を捉えるための対空ソナーに反応したものを海生物と誤認した可能性がある。ならば今度も？

否。人類が持つステルス技術では、海生物さえ捉えるソナーから隠れる事など出来ない。海賊が攻撃してきたなら、ソナーにその存在が映る筈だ。ソナーに何も映っていない以上、これも違う。大体時速三百キロというのは、海生物としては超高速でも、砲弾としてはあまりに遅過ぎる。普通の艦砲なら時速五千キロは出て、音速超え故にソナーに映る筈もない。

一体何が起きたのか、まるで見当が付かない。自分の傍で起きた事がなんなのかが全く分からず、心が少しずつ落ち着きを失っていく。これはいけない。自分は艦長で、この船の全てを預かる身だ。自分が全てを判断しなければ、自分が――――

「お姉ちゃん！　またソナーに白点が出たよ！」

混乱から失いそうになる我を引き戻してくれたのは、アオイの呼び声。アカネは顔を横に振り、再び望遠レンズを除く。

海面に海生物の姿は見えない。それでもソナーに白点が映った以上、やはり何かがいる筈なのだ。何処かに、何かが。

この時反射的に空を見たのは、先程まで海賊の艦砲射撃という可能性が脳裏を過ぎっていたからだろう。あの考えは既に否定しており、何かが見付かるという期待はしていなかった。

しかしアカネは、見付けた。

高速で自分達の方へと飛来する……肉塊のようなものが、三つ。

砲弾ではない。少なくともアカネは、脂肪の塊のような生々しい色合いをし、表面に凹凸がある砲弾なんて見た事がない。飛来してくるその脂肪塊らしきものは『アスカロン』の傍を走っていた船『デュランダル』と接触。

刹那、『デュランダル』で爆発が起きた。

甲板の一部が吹っ飛び、砲台が根元からへし折れる。その姿は正に『アスカロン』とそっくりだった、が、『デュランダル』は運に見放されていた。連鎖的に爆発が起こり始めたのである。恐らく爆炎が船内まで到達し、火薬庫に引火したのだ。

『デュランダル』は自らが爆弾であったかのように、粉微塵に弾けた。爆炎が収まった

時には船体など跡形もない。海に浮かぶただの鉄塊だ。乗組員に避難する時間は勿論、隠れるような場所すらない。『アスカロン』と違い、『デュランダル』の乗組員は既に全滅だろう。

慟哭がアカネの胸の奥から湧き上がる。口は自然と開き、わなわなと震える。

そんな激情を堪えて、アカネは通信機に手を伸ばした。コンソールを叩き、入力するのは――――コウの船へ繋がる周波数。

「こちら『わだつみ』！　東南の方角から攻撃されてる！」

アカネはすぐさま、コウに『敵』の存在を知らせた。

【こちら『フラガラッハ』！　どんな攻撃だ!?　詳細を頼む！】

「何か、爆弾のようなものが飛んできてる！　ソナーに映ってる白点はそれよ！　海中じゃなくて空から来てるから、機銃で迎撃して！」

【空からだと……まさか海賊、いや、分かった！　すぐに他の船にも伝える！】

「頼んだわ！　以上、通信終わり！」

アカネの締めの言葉とほぼ同時に、コウとの通信が切れる。これで一応は、生き残った船にも連絡が行く筈だ。

しかし安堵は出来ない。この時代で最も警戒すべき海生物は海を泳ぎ、海生物が放つ電磁パルスの影響によって航空機は無力化されている。即ち漁船にとって脅威となる

存在は全て海面付近に居るため、対空兵装なんてものは殆ど積んでいないのだ。小型海生物向きの機銃や小口径火砲で無理矢理迎撃するしかないが、砲弾に比べ低速とはいえ時速三百キロ近い飛翔物体を専用の照準プログラムなしに落とすのは至難の業だろう。
　受けに回っては駄目だ。攻撃を仕掛けてきている輩を突き止め、こちらの砲撃で吹き飛ばす……それこそがこれ以上の被害を抑える一番の『策』。
「アオイ！　ソナーには何か映ってない!?　高速で接近してきているやつ以外で！」
「あったらとっくに言ってるよ！　さっきから波形変えたりしてるけど全然反応がない！」
「だとしたら、こっちのソナーの圏外から攻撃してるって事かしら。それはまた随分と、厄介な事ね……！」
　アオイがソナーの反応を見逃すとは思えない。ならばソナー圏外に『敵』が居ると判断し、アカネは目視での確認をすべく望遠レンズを覗き込む。
　先程飛んできた砲弾もどきの軌道から、敵の位置はある程度予想が付く。
　しかしこちらを上回る射程、そして正確に砲撃を命中させる精度から推測して、敵は確実に『わだつみ』とコウ達の船を上回る性能を持っている。それでいて何故砲弾はあんなにも　―　『わだつみ』の六十センチ砲からしたら六分の一以下である　―　低速なのか疑問だが、なんにせよ技術力で上回れるのは厄介だ。恐らくソナーの性能もあち

らが上で、仮に射撃方角から相手の場所に目星を付けて突撃しても、動き出した瞬間に察知されるだろう。敵は悠々とその場を後にし、困惑しているこちらのどてっぱらを砲撃してくる未来が容易に想像出来た。

どうにかして相手の位置を目視で特定しなければならない。この広大で、目印になるような大海原の中から。

「(何か、何かある筈よ！　排煙とか、馬鹿みたいにデカいとか、キラキラ光ってるとか！　なんの代償もなしに、こんな超技術を使える訳がない！)」

望遠レンズを凝視し、敵を探るためのヒントを求める。されど探せども探せども、なんの痕跡も見付からない。

「ソナーに反応あり！　三発来るよ！」

そしてアカネの努力を嘲笑うように、第三射がやってくる。

「ぐ……当たりそうなのは!?」

『レーヴァテイン』！」

「機銃と十センチ砲で援護！　どーせ計算結果なんて当てにならないんだから、兎に角撃ちまくって！」

アオイへの指示を出す中でも、アカネは望遠レンズを覗き続けて索敵を行う。

一瞬だけ確認した『砲弾』は先程見たのと同じ見た目をしており、飛んできた軌道を

辿れば発射地点も先程と同じ。同一の存在が放ったものなのはほぼ確実だ。
　しかしやはり遠いのか、望遠レンズで発射地点を見ても敵らしき姿は見付からない。おまけに発射地点付近には暗雲が立ち込めているらしく、どうにも視界がぼやけていた。それでも小さなヒントでも見逃すまいとアカネは必死に凝視し
「……っ!?」
　不意に、脳に一つの『可能性』が駆け巡る。
　望遠レンズの倍率を、ゆっくりと下げていく。映し出される景色が段々と縮小し、広範囲が見渡せるようになる。
　アカネは今までずっと最大倍率で海を見ていた。相手の存在を示す、微かな兆候を捉えようとしていたからだ。どんな小さなものも見逃すまいと努力していた。だが、その努力が全くの無駄……いや、真実から遠ざかる行為だったなら？　『敵』が元より居場所がバレる事など気にしていないとしたら？
　――――砲弾の発射地点に存在する、何故かそこだけに漂う暗雲が『敵』の居場所を物語っているとしたら？
「……アオイ！　『アスカロン』の乗組員を全員救助したら、南東方向にあるあの暗雲のど真ん中目指して前進！　最大船速！」
「え、あ、う、うんっ！　救助はもう終わってるよ！」

「こちら『わだつみ』！　コウ、返事は待ってないからこれだけ言うわ！　これから『わだつみ』は敵に接近戦を仕掛ける！」
「えっ!?」
　コウからの返事を待たず、アカネは通信機のスイッチを切る。まさか敵に突撃するとは考えていなかったのかアオイも驚きの声を漏らすが、しかしアカネの指示を信じている彼女は困惑しながらも船を暗雲へと向かわせた。
『わだつみ』が暗雲へと向かう最中も砲撃が続き、後方から爆発音が聞こえてくる。思わず船を停めたくなる衝動を抑え、振り切るようにアカネは前を見据えた。
　前進させていくと、暗雲の中から四度目の『砲弾』が飛んできた。望遠レンズに映る絵面からして、狙いは間違いなく『わだつみ』。
　目標をこちらに変えた――――それだけで、自分の考えが間違っていなかったとアカネは確信出来た。
「砲弾三発確認！　船を砲弾に向けて立てて！　そうすれば中央の奴以外外れる筈！」
「うんっ！」
　アオイが船の向きを修正、同時にアカネは機銃と十センチ砲を全門起動。三発の砲弾のうち、真ん中のものだけを狙う！　砲弾はその小ささから十センチ砲の雨を潜り抜け、機銃の弾丸は弾き返した……が、一発の十センチ砲弾が命中。巨大な爆発を起こし

た。他二発はアカネの予想通り船体に当たらず、海面で爆発を起こす。船は揺れたものの、転覆には至らない。

どうにか攻撃を切り抜け、アカネは安堵の息を吐きそうになる。

しかしこれは序の口だ。接近すればするほど、敵の攻撃を回避するために使える時間は減り、砲弾の拡散範囲も小さくなる。だが接近しなければ敵の位置が掴めない。敵の攻撃が当たるか、自分達の察知が先か。アカネは息を飲みながら近付いてくる砲弾を望遠レンズ越しにじっと見つめ、アオイはアカネからの指示に的確に答えながら暗雲に迫り……

賭けは、アカネ達が勝った。

「っ！　お姉ちゃん！　ソナーに反応あり！　全長……!?」

「砲弾じゃないのね!?」

アオイは何かを言い掛けていたが、問い質している暇などない。アカネは望遠レンズの方角を海面方向へと向けつつ、照準操作のためのレバーを握り締める。

やがてぼんやりと見えた『光』。

それこそが敵の居場所だと察したアカネは素早く照準を合わせ、六十センチ砲の引き金を引いた！

爆音と共に放たれた砲弾六発が、正確に照準の位置へと飛んでいく。やがて砲弾は照

準付近に到達した、瞬間、巨大な爆炎が三つほど上がった。海水に落ちたならあのような爆発は起こらない。

恐らく三発は着弾した。

「ぐうっ!?」

「きゃあっ!?」

それを確認したのも束の間、『わだつみ』も大きく揺れる。モニターに火炎を知らせる表示と、船体破損を伝えるアラームが鳴り響いた。揺れの数からして一発だけだが、敵の砲撃を喰らったらしい。

しかし『わだつみ』は戦艦級だ。多少の被弾などあってないようなもの。警報が発せられているのは主に甲板部分で、浸水や火薬庫の破損は検知されていない。主砲である六十センチ砲が一台吹き飛んだようだが、他の砲台に問題はない。まだまだ戦える。

対する相手がナニモノかは分からないが、巡洋艦級の漁船すら吹き飛ばす大火力砲の直撃を受けたのだ。無事である筈がない。

アカネはそう考え、事実、相手はそれなりにはダメージを受けたのだろう。

地獄の底から吹き鳴らされたラッパのような唸り声が、大海原に轟いたのだから――

０９

「お、お姉ちゃん、今のって……」

アオイが震えた声で呼んできたが、アカネは答えない。答えられない。そんな余裕は、今のアカネには残っていないのだから。

初めて聞いた鳴き声ではない。

まるで地獄からやってきたかのような重低音、終末を告げるラッパのような音色、鋼鉄で作られた船をも揺さぶる激しさ、心臓を握り潰そうとする圧迫感……全てが『あの時』と変わらないのに、どうして忘れる事が出来るのか。

この時を、ずっと、ずっと待っていたのだから。

「……全速前進」

「……え？」

「全速前進！　早く！　アイツが逃げる前に！」

「で、でも」

指示を出しても、アオイは中々行動に移さない。痺れを切らしたアカネは自分の手許にあるコンソールを操作し、船を動かす。アオイほど上手くはなくとも、アカネにだっ

て船は動かせるのだ。

エンジンが轟音を響かせ、『わだつみ』は真っ直ぐに突き進む。再び撃たれた砲撃を十センチ砲で貫き、ひたすら前へ前へと進んでいく。もうアカネは望遠レンズを覗き込んでいない。どうせあと少しすれば、司令室前方のガラスから目視で確認出来ると確信していた。

そしてその確信の通り、地平線の向こうに『奴』は現れた。

さながらそれは太陽のような姿。

煌々とした輝きが電磁フィールドの光であると気付くのに、アカネは少なくない時間を必要とした。数々の海生物を、特に強大な力を持った大型種の捕獲を生業としてきたが、ここまで強力な電磁フィールドは『あの時』以来だ。

見ればレーダーや計器も荒ぶっていた。放出されている電磁パルスの影響だろうが、これらの機器は並の海生物相手なら問題なく動くだけの性能を有している。だとすると、目の前の『奴』が出している電磁パルスは並の出力ではないのだろう。もしかするとこの暗雲は、放出された電磁パルスにより天候が狂わされた結果か。

何もかもが規格外だ。だが、そんなのはとうに覚悟していた事である。

自分達の両親を殺した存在が、そんじょそこらの海生物である筈もない。

アカネは確信した。『こいつ』こそが『沖』からやってきた海生物であると。

そして自分達の両親を殺した、敵であると。
最早海中に浸かる事すら出来ないほど強力な電磁フィールドを纏い、その中を浮遊する海生物こそが！
「う、浮いてるって、そんな、？……!?」
「……なんで生きてんのかしらねぇ、アイツ。魚って鰓呼吸じゃなかったのかしら？浮遊するほど強い電磁フィールドを纏いながら、どうやって海水を口に運んでんのよ。つか、なんで魚が鳴いてんの？　声帯なんかないでしょうに」
目前に居る生物の実在を信じられない様子のアオイに、アカネは同意しながらも分析を進める。自分が白昼夢を見ている訳ではない事は、傍で否定するアオイこそが証拠なのだから。
それにしても大きい。
あまりにも『未確認種』は巨大だった。ざっと見た限りだが……体長八百メートルを超えている。『わだつみ』の全長五百二十八メートルを大きく上回る海生物など、アカネは初めて目の当たりにした。
しかし巨体ではあるが、身体のパーツは貧相だ。胸ビレも尾ビレも小さく、背ビレに至っては確認すら出来ない有り様。どれも泳ぐ役に立つとは思えない。いや、電磁フィールドによって浮遊しているのだから、実際役立たなくても問題はないのだろう。

反面頭は異様に膨れ上がり、まるで全身の栄養が頭に集結しているかのようだ。鰓蓋は見付からず、身体の内側に隠れているのか、それとも見付け難いぐらい小さいのか。頭には三本の角のようなものがあり、それはぐにゃりと根元が動いて切っ先を『わだつみ』に向けて

「っ!?　不味い！　耐ショック体勢！」

その切っ先と目が合った瞬間、アカネは反射的に叫んでいた。

そこから間髪入れずに、『未確認種』の角が発光……否、火を噴く！

角から吐き出されたのは、『アスカロン』『デュランダル』『レーヴァンテイン』を破壊した、三つの肉塊。目視可能な距離まで接近していた『わだつみ』に、迫り来る砲撃を躱すほどの機動性はない。

砲弾は二つが着弾。爆発を起こし、『わだつみ』の前部甲板を吹き飛ばした！

「きゃああっ!?　ほ、砲撃!?　なんで、海生物が!?」

「たくっ、何が生態的には近海の種と大差ないよ。生体砲台なんて『現代兵器』を積んでる奴、近海の何処にもいないわよ！」

予想外の事態に怯えるアオイだったが、アカネの闘志は未だ消えていない。すぐに船の状況を確認する。

甲板の破壊に巻き込まれたのか、主砲である六十センチ砲が一つ吹き飛んだ。副砲で

ある四十センチ砲も二つ、十センチ速射砲も六つ破損している。
それでも『わだつみ』はまだ沈まない。正面を向ける四十センチ砲は十台もあり、主砲だってまだ三連装のものが一つ丸々残っている。
アカネは被弾の揺れが収まらないうちからコンソールを操作し、使える砲門全てを『未確認種』へと向けた。六十センチ砲一門、四十センチ砲二十門、十センチ速射砲二門。同型艦すら一瞬で屠る最大火力を、容赦なくお見舞いする！
放たれた無数の砲弾は一発たりとも狙いを外さず、『未確認種』が身体に纏う電磁フィールドを直撃した！　『未確認種』は苦しそうな呻きを上げ、その雄叫びは大海原の彼方にまで轟く。
――――が、それだけ。
撃ち込んだ砲弾は、全て電磁フィールドを貫く事なく、表層で受け止められていた。
「なっ……？よ、そんな!?」
アカネは驚愕で顔を歪め、悲鳴混じりの声を上げる。四十センチ砲や十センチ速射砲が通用しないのはまだ理解出来る。それを受け止められる海生物は、今まで山ほど見てきたのだから。
だが、主砲である六十センチ砲の近距離射撃すら防いだのは、この『未確認種』が初めてだ。近海の海生物相手ならばオーバースペックも良いところであるこの砲弾を、い

とも容易く防ぐなどあり得ない。

否、いとも容易く、というのは流石に過大評価だろうか。

少なくとも六十センチ砲を受けた『未確認種』は呻きを上げており、何より、『わだつみ』に怒りの形相を向けていたのだから。

『未確認種』は『わだつみ』と向き合うや、頭にある角から再び砲弾を放つ！　三度目の着弾は、三発全ての砲弾を受けてしまう。甲板は粉々になり、残り一つの主砲はへし折れ、副砲達も吹き飛んだ。最早前半分は船とは呼べない、スクラップの塊のような姿に変わり果てる。

『わだつみ』を襲う揺れの激しさも、今までで一番強かった。

「きゃあああっ!?」

「ぐっ……前部砲台が……いや、まだ、まだいける！　アオイ！　側面を向けて！　側面砲台と後部砲台で粉砕する！」

「ま、待ってお姉ちゃん!?　もう浮かんでるのも精いっぱいなんだよ!?　後ろまで破壊されたら、船が持たな」

「持つ！　絶対に！　この時のために、パパとママの仇のために今まで改造してきたのよ！　こんな簡単に、負ける訳がない！」

アオイの訴えを切り捨て、アカネは船を自分の手で動かす。重たい前部砲台が吹き飛

んだからか、『わだつみ』の旋回速度は明らかに普段よりも速い。操縦を誤れば転覆しそうなほどに。

しかし『未確認種』からすれば、愚鈍だったのだろう。

『未確認種』はゆっくりと三本の角を動かし、アカネ達の居る操舵室にその切っ先を向けた。

「――――あっ」

角の先端にある大きな空洞と自分の瞳が重なった時、アカネは自分の失態に気付く。

気付いたところで、もう遅い。

『未確認種』の角の奥で、なんらかの生体反応によるものか、紅蓮の光がほとばしり

「駄目ぇっ！」

アカネの視界を、妹の悲鳴と共に『何か』が覆った。

瞬間、爆音と共に放たれた砲撃は操舵室の真横に着弾。

順当に起きた爆発により、操舵室のガラスと壁が吹き飛び、衝撃波がアカネの身を襲った。

「ぐぶっ！　ぐ、ぅ……!?」

頭が揺さぶられる。身体がバラバラになりそうな痛みが走り、耳鳴りが酷い。思わず目も閉じていて、何も分からなくなる。

時間を数えるだけの余裕があれば、その衝撃がほんの十秒ほどですっかり収まったと知れただろう。しかし混乱していたアカネには、まるで何分も続いたような気がする。痛む頭を揺すり、荒れる息を整える。

兎に角、現状だ。現状がどうなっているか分からなくては、次の手は打てない。

未だ目も開けられない中、現状を知ろうとしてアカネは身体を動かし

ずるりと、何かが自分の身体から滑り落ちた。

その事に気付いた途端、目がパチリと開いた。何故かはアカネ自身にも分からない。分からないが、開かねばならない気がした。

だからアカネは、目の当たりにする。

自分に覆い被さるように、アオイがぐったりと横たわっている姿を。

「……アオイ?」

無意識に、妹の名前を呼ぶ。アオイは何も答えてくれない。

「アオイ、アオイ」

今度は身体を揺すった。揺するのを止めたら、アオイの身体も動くのを止めた。

そしてアオイの身体を揺すっていた自分の手を見たら、真っ赤に汚れていた。

「は、あ、あ、あぁぁ……!?」

頭から血が引いていくのが分かる。全身が震える。

そして真っ白になった意識の中で、ハッキリとした言葉が浮かび上がる。
アオイが、私を爆発から庇ってくれた。
だからアオイが――――私を襲う筈だったものを、全て受けてくれたのだ。
「アオイ！　アオイ、アオイ！　ねぇ、返事してよ!?　お願いだから！　ねぇ!?」
いくら揺さぶっても、いくら呼び掛けても、アオイはなんの反応も示してくれない。代わりに服はどんどん黒ずんでいって、べっとりとした『汚れ』がアカネの身体に付いていく。
このままだとアオイが危ない。
『このまま』という時点で既に悠長であったが、アカネは未だ現実が受け入れられなかった。急げばまだ大丈夫、今から手を打てば大丈夫……それ以外の考えを全て拒む。
今はただただ、アオイが生きてくれる事だけを願っていて
その祈りをへし折るように、地獄のラッパが鳴り響く。
「……あ、は、はは」
何故か、笑いが出てきた。
破壊され、吹きさらしとなった操舵室の外に、憤怒で燃え盛る瞳が自分を見ている。
そして全てを粉砕する角が、自分達の方を向いていた。もう何度も見ている光景の筈なのに、アカネは急にそれが怖くなる。ガタガタと身体が震え、勝手に動き出して……

横たわったままのアオイの上に、覆い被さっていた。
自分がどれだけ滑稽な事をしているのか、よく分かる。あの時笑いが出てきたのは、これからしようとしている事に心の奥底は気付いていて、それがあまりにもおかしかったからかも知れない。
「ごめんね、アオイ。こんな情けなくて、馬鹿なお姉ちゃんで」
今の自分に出来るのは、あとはもう謝る事だけで――――
『未確認種』の横顔で爆発が起きるまで、アカネは何も出来なかった。
「へ……？」
呆然とするアカネだったが、大海原に甲高い……広域放送を行う寸前に流れる音が響き
【全艦隊、撃てぇえっ！】
罵声にも似た声が、アカネの耳に突き刺さった。
「いっ!?　こ、この声は……っ!?」
広域放送の音により意識を取り戻したアカネは、慌ててアオイの耳に両手を当てる。
刹那、身体を揺さぶるほどの爆音と共に、『未確認種』の身体で二度目の爆発が起きた！
電磁フィールドに守られている『未確認種』は身体に傷一つ負っていないが、それで

も爆風は鬱陶しいのか。今までアカネ達に向けていた角を逸らし、別の方角に狙いを定める。

操舵室に居るアカネに、『未確認種』が狙っているものの姿は見えない。

だが見えなくても、想像は出来る。あの放送の声は、間違いなく『彼』なのだ。間違えたくても間違えられるものか。気障ったらしくて、甘ったるくて……誰かへの気遣いばかりのあの声を。

「コウ!?」

【はははははっ！　未来の花嫁を傷付ける事は、このボクが許さないからね！】

思わず出ていた彼の名前に、答えるかの如く、放送として流れるコウの声は高笑いをしていた。

恐らくは仲間の船も一緒に攻撃しているのだろう。『未確認種』を守る電磁フィールドの上で、次々と爆発が起きていた。並の海生物なら既に破られているか、或いは死の恐怖を感じておめおめと逃げ出しているだろう。

しかし『未確認種』は恐れるどころか、一層の怒りに震えた。電磁フィールドの輝きが更に増し、頭上の雷雲が急激に色濃さを増していく。

まさか、今までは遊びだったのか？

【『わだつみ』！　急いでそこから退避しろ！　こちらが時間を稼ぐ！】

底知れぬ『未確認種』の力に震えるアカネに、コウの言葉が突き刺さる。我に返ったアカネは急いで通信機を探し、中々見付からなくておろおろしてしまう。

【早くするんだ！　君の船には、ボクの仲間達も乗っているんだぞ！　彼等まで死なす気か！】

そんなアカネに、コウは渇を入れた。

アカネは大きく自分の目を見開いた。それからゆっくりと閉じ、深く息を吸って、吐いて――――潤んだ目を袖で擦る。

立ち上がったアカネはすぐに、何時もならアオイが座っている操舵席に座り、エンジンをフル稼働。同時に限界まで舵輪を回す！

スクラップ同然の姿と化していた『わだつみ』だが、エンジンは未だ生きていた。アカネが突撃を繰り返した結果、損傷は前部上方に集中していたのだ。浸水も軽微で、発進に支障はなく、当分は沈みそうにもない。唸りを上げた動力機関は『わだつみ』をゆっくりと、少しずつ加速させていく。

『未確認種』は逃げようとする『わだつみ』に気付いたのか、一瞬『わだつみ』の方へと振り返る――――が、コウ達の艦隊はその隙を突くように砲撃をお見舞いする。妨害された『未確認種』は咆哮を上げ、再びコウ達の方に向きを変えた。

そして三本の角から、砲撃をお見舞いする。

方向転換を終え、『未確認種』に背中を向けた『わだつみ』の視界には、助けに来てくれたコウ達の船が見えた。彼等は迫り来る砲撃を巧みに躱し、次々と艦砲を放つ。五隻もの船が絶え間なく砲撃を繰り返す姿は、正に人類の英知を感じさせた。

だが、自然は人類を嘲笑う。

『未確認種』は電磁フィールドの輝きを強めた、瞬間、猛然とコウ達の船目掛けて移動を始める。八百メートルという出鱈目な巨躯でありながら、先に走り出していた『わだつみ』を易々と追い抜く速さを出した。『わだつみ』のレーダーは破損しており正確な値は出せないが、アカネの長年の経験と勘が正しければ、百五十ノット……いや、『飛行』をしているのだから、時速二百七十キロオーバーと言うべきか。こんな速度が相手では、如何に駆逐艦級でも絶対に振り切れない。

そしてコウ達の船が加える苛烈な攻撃も、『未確認種』が纏う電磁フィールドは難なく耐え抜いていた。『わだつみ』の六十センチ砲すら易々と耐え抜いたのだ。速度四分の三未満、質量三分の一以下の四十センチ砲では何百発撃ち込もうと、『未確認種』の電磁フィールドは揺らがない。

結末は目に見えている。だけど、それでも……言わずにはいられない。

アカネは辺りを見渡し、ようやく操作盤から外れかかっている通信機を見付けた。ボロボロになっていたが、まだ使える。手を伸ばし、繋ぐはコウの船。

「次会ったら、結婚してあげるから！　だから、だから必ず生きて帰って！　死んだら……許さないから！」

最後にその言葉を告げ、アカネは通信を切る。震える手で舵輪を握り締めた。

「――――う、く、あああああっ！」

そして振り切るように、拒むように、アカネは船のエンジンを全開にする。

『未確認種』から、コウ達の船から、何もかもから。

アカネは、逃げ出したのだった。

１０

錆び付いた金属の柱と、床と、壁がずっと続いていた。

三百年前、この建物は軍事工場として使われていたらしい。とはいえ今でも動いている生産設備なんてものはなく、雨風を防げる頑丈な建物程度の価値しか残っていない。その価値も、壁に吹き掛けられていた防腐コーティングが老朽化により剥げてきた事で、急速に劣化していた。しかし今の人類には、新しい防腐コーティングを生産する余裕も技術もない。恐らくあと百年もすれば、風化によってこの建物も倒壊するだろう。

それでもそんじょそこらの、現代人が建てた鉄くずの寄せ集め染みた家よりは遥かに頑丈である。広さもあるし……何より集落から少し離れた位置にあるので『隔離』がしやすい。

だから病院として使うのに、打って付けの場所だった。

アカネはそんな病院の、とある病室の扉の傍で座り込んでいた。祈るように両手を握り締め、ずっと俯いたまま。目をぎゅっと閉じ、小さく身体を震わせる。

やがて傍の扉が開いた。

瞬間、アカネは跳ねるように立ち上がり、扉から出てきた　―　黒ずんだ染みの方が

多いぐらいの、凡そ『白』には見えない　―　白衣姿の、ガリガリに痩せ細った男性に詰め寄る。
「先生！　アオイは!?　アオイは――――」
「ひっ!?」
「あ、ご、ごめんなさい……」
先生とアカネに呼ばれた男性は怯えた表情を見せ、アカネは自分の行動について謝罪する。
彼はこの病院の院長にして、唯一の医者である。キリタ先生と呼ばれていた。幼少期のトラウマから、自分より弱っている怪我人や病人以外が怖くて堪らないという、割と社会不適合者である。それでも腕は確かで、特に手術の腕前は他のどの集落の医者でも敵わないと聞く。
彼でなければアオイは、間違いなく手の施しようもなかっただろう。
「と、とりあえず、妹さんの治療は、済みました……その、予断は許しませんが、峠は越えた感じ、です」
「は、話は出来ますか……？」
「いえ、それはまだ……意識が戻っていませんの、で、あの……すみません、力が足りず……」

もごもごと、キリタは申し訳なさそうに謝る。
力が足りない？　何を馬鹿な事を。あのままなら間違いなく死んでいたアオイを助けてくれたのに、どうして彼が謝らねばならないのか。
「いえ、先生には、感謝しても、しきれません。ありがとうございます」
「……では、私はちょっと、席を外します。何かありましたら、ベッドの横にあるボタンを押して、ください。私へのコールと、なります」
少し接続が悪いので、強く押してくださいね？　それだけ言い残して、キリタはこの場を後にした。
アカネはしばし、開かれた扉の前で立ち尽くす。ゆっくりと息を吸い、吐いて、吸って……頬を叩いてから、キリタが出てきた部屋の中へと入った。
部屋にあるのは、ベッドが一台。
掛けられた布団は古臭く、ボロボロだ。ベッドの隣にある点滴の容器も、勝手に割れたりしないかと不安になるぐらい古びている。文明の衰退ぶりがよく分かる、貧相な医療器具だ。ここまで酷くはないと思うが、手術に使われた器具も劣化が進んでいるに違いない。もしかしたら一年後には、それらの器具が全て使い物にならなくなっていた可能性もある。
そうなったらベッドに寝かされているアオイは、今頃霊安室に居たかも知れない。

「……アオイ……」

寝かされているアオイの傍に、アカネは寄り立つ。

無茶だと、アオイは最初から言っていた。

考えれば分かる事だった。六十センチ砲の直撃を『未確認種』は平然と耐え抜いていたではないか。全砲門による一斉射をしたところで、あの電磁フィールドは破れない事は明白。勝ち目など、最初からなかったのだ。

なのに怒りで我を失っていた自分は、その勝ち目のない勝負を挑んでしまった。

両親の仇を討てるという思い込みに、アオイを巻き込んでしまった。それだけでなく救助した『アスカロン』の乗組員も危険に晒した。自分はお姉ちゃんなのに、艦長なのに……挙句自分が危機に陥ったら、妹に身体を張られて守られる始末。『わだつみ』も辛うじて日本まで戻ってこられたが、側面や船底近くに大穴を開けられていたら、今頃海の藻屑となっていただろう。今の状態だって、早く修理をしなければ、嵐が来たらそれだけで沈みかねない。そして自分達を逃がすため『未確認種』に戦いを挑んだコウ達とは、連絡が付かない。

自分の激情によって、大切な家族を、両親の形見を、失うところだった。数少ない友人については、失ったと言って良い。一体自分はどれだけ度し難い愚か者なのか。

謝りたい。アオイが全部正しかったと認めたい。

だから、

「待ってるから……目を覚ましてくれるの」

例え聞こえていなくとも、この言葉だけは伝えたかった。

「待っている間、暇だという認識で良さそうだな」

故にまさか『返事』が返って来るとは思わず、アカネは反射的に振り返る。

何時の間に居たのだろうか。開きっぱなしにしていた扉の傍に、一人の女性が立っていた。

女性の年頃は、三十代ぐらいだろうか。その顔立ちは凛々しいというよりも猛々しく、片目を眼帯で覆いながらも威圧的な眼差しでアカネを見下ろしていた。背も高く、百七十センチ、いや百八十センチはあるかも知れない。金色の髪を腰まで伸ばしており、グラマラスの体型と相まって、大人の風貌を形作る。

扉の傍とはいえ、堂々と病室に入っている女性だったが……アカネは、彼女の顔に見覚えすらなかった。アオイの知り合いかも、と一瞬考えたが、人見知りなアオイが好むようなタイプには見えない。怪訝さを通り越し、嫌悪の入った眼差しでアカネは女性を見つめ返す。

尤も、見た目からしてちょっと睨んだぐらいでおめおめと逃げるような人とは思えない。立ち去る気配のない『客人』に、気乗りはしないがアカネは声を掛ける事とした。

「……誰？　用件があるなら、手短にお願いしたいんだけど」
「ふむ、自己紹介がまだだったな。我が名はマキナ。これでもこの国の『軍』を総括する立場にある。尤も、中央政府が消え去った今では、無法者を征伐する用心棒みたいなものだがね」
女性――――マキナはその堂々たる風貌とそぐわない横柄な語り口で、自らの身分を打ち明けた。
その自己紹介に、いよいよアカネは嫌悪を隠さなくなる。
国家というものが瓦解した現代において、『軍』というのは極めて身勝手な組織となっていた。統制する政府が消えた事で、幾つもの武装勢力に分裂。国や国民を守るという使命は失われ　―　そもそもどちらも消滅した訳だが　―　、各々が自分達の掲げる理念や受けられる利益によって様々な仕事を行う……マキナが言う用心棒という例えすらオブラートに包んだような、ハッキリ述べてしまえば『荒くれ者』だ。全員がろくでなしとは言わないが、あまりお近付きにならない方が良い人種ではある。
加えて軍というのは、人類全盛期には最も高度な技術を有していた組織だ。維持するための知識は失われ、後は食い潰すだけなのは他と変わらないが、それでも大量の『遺産』を持っている。つまり未だ力だけはあるのだ。これが厄介でなければなんだというのか。

海生物相手ならば、アカネ達漁師に分があるだろう。しかし『対人戦』は軍の方が圧倒的に強い。正直敵に回したくない、というより関わり合いになりたくない。

そんな軍のお偉いさんが自分達に話し掛けてきたら、嫌悪を覚えてしまうのも致し方ない事だろう。マキナも今のアカネが向けている目には慣れているのか、まるで気にしていない様子だった。

気にしていないなら、普通に用件を訊く分には、怒り狂ったりはしない筈。アカネは思いきってマキナに尋ねてみる事にした。

「……軍のお偉いさんが、私になんの用？」

「回りくどい話はなしにしよう。我が要求したい事は三つ」

アカネの問いに、マキナは指を三本立てる。

「一つ目はお前が見た『沖』の海生物の情報を提供する事。二つ目は『わだつみ』を修理する事。二つ目に関しては、必要な資材と資金は当方が手配する」

彼女は指を一本、一本、ゆっくりと折り曲げながら語る。言葉遣いこそ一方的だが、しかし淡々とした口振りは感情の起伏を感じさせず、まるで些末事を話しているかのよう。

それは最後の要求に触れる時でも一切変わらず。

「そして三つ目は、お前が『わだつみ』に乗船し『沖』の海生物攻撃作戦に参加する事、

或いは修理をした『わだつみ』をこちらに引き渡す事。以上だ」

あたかも大した話ではないかのように、なんの躊躇もなくアカネを脅迫してきた。

１１

あまりにも無遠慮で、前置きすらない要求に、アカネは一瞬何を言われたのか分からなかった。ややあってようやく飲み込めた時、頭に流れる血が一瞬で沸騰したような感覚を覚える。

殆ど無意識に、アカネはマキナのすぐ傍まで駆け寄り、怒りの形相で問い詰めていた。

「『わだつみ』を渡せ!?　いきなりやってきて、一体何を――――」

「理由はある。それをこれから説明しよう」

「っ……！」

あまりにも淡々としたマキナの態度に、アカネは自分の過熱ぶりに気付く。親の形見を渡せと言われ、ついカッとなってしまった。

ほんのついさっき自分の感情的なところを後悔したばかりだというのに、この体たらくだ。三つ子の魂百までとは言うが、あまりにも反省がない。後悔よりも羞恥が先に立ち、後退りするようにマキナから離れたアカネは、「ごめんなさい」の一言をぽつりと零した。

尤もマキナはアカネからの謝罪などどうでも良いのか、顔色一つ変えず、腕を組んだ

まま自分の話を始める。
「現在、ニホンレットウ近海に『沖』からやってきた海生物が居着いている。お前が救助した『アスカロン』の乗組員より聞き出した話から、我々は奴を『マッコウクジラ』が海生物化した種であると断定した」
「……マッコウクジラ？」
「三百年前、大海原に生息していた海生哺乳類の一種だ。魚類が海生物化していく中で個体数が激減したと古文書に記されていた事から、現代では絶滅したと思われていたが……まさか『沖』の生物になっていたとはな」
聞き慣れない種名にアカネが訊き返すと、肩を竦め、呆れたような、困り果てたような、受け取り方に困る仕草をマキナは見せる。
『マッコウクジラ』という生物が三百年前にどのような生活をしていたのか、アカネにはさっぱり分からない。しかし元を辿れば海生哺乳類であるのなら、色々な事に説明が付く。海面から浮遊してしまうほど電磁フィールドが強いのにどうやって息をしているのか、何故鳴き声を出せるのか……哺乳類なのだから当然肺呼吸で、声も出せるというだけの話だ。
そして圧倒的な力を持っているのなら、最も基本的な対策こそが有効である。
即ち、放置だ。

「……なんにせよ、放置が一番の手よね。あれだけ強力な電磁フィールドが張れるなら、エネルギー消費も多いだろうし」

強力な電磁フィールドを纏えば、その分エネルギー消費も増加する。『マッコウクジラ』がどれほどのエネルギーを日々使っているかは分からないが、あの出鱈目な戦闘力だ。相当エネルギーを使うだろう。

いずれ奴は腹を空かせて帰っていく。無理に倒す必要はない。

そう、それを自分は――――

「その通り、と言いたいところだが、実は一つ問題がある」

再び自己嫌悪に陥り俯くアカネだったが、マキナはアカネの出した答えを否定した。

まさか否定されるとは思わず、アカネは無意識にマキナと向き合う。マキナは悩ましげに、或いは腹立たしげに、顔を横に振りながら語り始めた。

「そう、その問題は奴が強過ぎるという事。戦闘力が極めて高く、狩猟能力に優れているんだ」

「……まさか、近海の生物密度でも定着可能って事？」

「いや、そうはならない。獲物となる海生物の生息数の回復が追い付かないからだ。いずれ獲物を食い尽くし、餓死するか帰るかするだろうさ」

「なんだ、なら何が問題なの？」

「言っただろう、獲物を食い尽くすんだよ」
アカネの疑問に、マキナは先に述べた言葉をもう一度語る。何かの謎掛けか？　アカネは訝しく感じながらも、その言葉の意味を考えてみる。
――――答えはすぐに分かった。謎掛けでもなんでもなかった。
だからアカネの顔から、血の気が引いていく。
「食い尽くすって……まさか、本当に食い尽くすって事!?　一匹残らず!?」
思わず叫ぶように、アカネはマキナが教えてくれた事をオウム返しするように訊き返してしまった。
「我々が頼りにしている学者は、そうだと言っている。我はアイツの言葉を信じているだけだ」
マキナはなんて事もないかのように肯定したが、アカネの顔色はどんどん悪くなる。いや、この『予測』を聞かされ、どうしてマキナは落ち着いていられるのか。
海生物は、全盛期の人類文明を崩壊させた恐ろしい魔物だ。同時に今の人類にとって、彼等は貴重な食糧でもある。カロリー計算で九割以上の依存度だ。仮に海生物が食べられなくなったら、今の人口は到底維持出来ない。地上の荒廃も回復する兆しすらない現状、大慌てで農業への移行も不可能だ。海生物の衰退はそのまま人口の衰退を意味する。最早人類は海生物なしには生きられない。

『マッコウクジラ』が食い荒らそうとしているのは、そうした貴重な『海産資源』である。

「あの『マッコウクジラ』を野放しにすれば、かつてアジアと呼ばれた一帯の海生物は激減するだろう。予測では種の絶滅を引き起こすような事はなく、奴が立ち去れば時間と共に個体数は回復するだろうが……人類はそうもいかない」

文明の維持には、ある程度の人口が必要となる。複雑な技術には様々な工程があり、その工程を担う専門家、専門家達の使う原材料を生産する人員、そしてそれらの人々に食糧を与える食糧生産労働者が必要だからだ。事実全盛期の人類衰退の要因の一つは、食糧不足による人口減少が挙げられる。

現代において人口が激減すれば、今の生活を支えている技術も一気に衰退するだろう。『マッコウクジラ』を起因とするそれが果たしてどの程度のものになるかは想像も付かないが……もしも戦闘漁船を建設する技術を失えば、人類は狩猟採集の方法すら喪失する事を意味する。

食べ物を満足に得られなくなった生物が辿る道は、進化か絶滅の二つ。

果たして人類は、海生物に支配された海で食べ物を得られるような、駆け足の進化が出来るのだろうか？　はたまた荒廃し尽くした地上で生きられる、馬鹿げた逞しさを手に入れられるのか？

少しでも現実的な考えを持ち合わせていれば、その問いに対し誰でもこう答えるだろう。どちらも全く期待出来ない、と。
『マッコウクジラ』を倒せなければ、アジア圏の人類は本当に絶滅する。これは絵空事でなければ、ジョークや可能性の話でもない。間近までやってきた、現実的な脅威だ」
漁師という仕事だからこそ、海生物と人類の関わりを強く意識しているアカネに、マキナの言葉を否定する事など出来なかった。
「な、なら、なんとかしてそいつを倒さないと……」
「そのために我等はやってきた。慈善事業ではないが、志としては人類の守護が我等の組織の柱だからな。しかし……」
「……しかし、何よ」
「実を言うと我等が持つ武装に、『マッコウクジラ』を倒せるものがない」
あっけらかんと、まるで大した問題ではないかのようにマキナは答えた。口調だけで誤魔化せるほど、小さな問題ではないというのに。
「ぶ、武装がない!?　どういう事!?」
「そのままの意味だ。確かに軍隊は旧時代の遺産を多数保有している。我が軍はジエイタイなる組織の兵器を数多く所有しているが、この軍隊は全盛期の人類において上位の戦闘能力を有していた。それは今も変わらない。が、そもそも旧時代の武装では海生物

に歯が立たなかったから、人類はここまで衰退している。我等が持っている武器は対人間や施設には絶大な効力を発揮するが、海生物相手には分が悪い」
「じゃあどうすんのよ!?　並の砲撃じゃ、あの電磁フィールドは破れないわよ!?」
「だからこそ、君達の船である『わだつみ』が必要なんだ」
マキナの、きっぱりとした言葉。
それを正面からぶつけられ、アカネは息を詰まらせた。マキナはアカネが黙ったのを確かめるように眺め、悠々と自身の『計画』を語り出す。
「電磁フィールドを破るためには、高い運動エネルギーを有した物体の衝突が最適解……というのは、漁師である君にはわざわざ説明するまでもない事だろう。『わだつみ』が搭載している主砲は、正にその方向で進化したものの極みだ。アレならば、奴の電磁フィールドに大きな打撃を与えられる」
「……無理よ。だって、アイツは至近距離の艦砲射撃を受け止めたのよ。『わだつみ』の主砲でも、アイツの電磁フィールドは破れない」
「一隻では、だろう?　電磁フィールドは攻撃を防ぐ際、出力が僅かながら低下する。一隻の漁船が持てる連射性能ではそれを意識する必要はないが、その発射間隔を補える仲間がいればどうなる?」
「……なら、やっぱりアンタ達の船だけでも」

「それが出来ない理由が二つある。単純に火力が足りない。計算上我が軍の砲撃練度と射撃間隔で達成出来る電磁フィールドの出力低下限界は、我が軍が主砲として採用している艦砲の威力を大きく上回っている。しかし『わだつみ』の主砲ならば、最大限出力が低下した状態の電磁フィールドを破れると予想している」

「じゃあ、砲だけ持っていくとか」

「二つ目の理由は、『わだつみ』の主砲を積めるような大型艦が、我が軍どころか近隣の漁船にもないという事だ。一般的な海生物漁に特化した結果、どの船も小型化・高速化・軽量化が進んでしまってな……全体で最適化を推し進めた結果、予想外の事態に対応出来る存在がいない。多様性がないんだ、今の文明には」

「……兵器の電子化を進め、大口径艦砲を衰退させた結果、海生物に負けた三百年前のご先祖様達と同じ轍を踏んでるわね」

「返す言葉もないとはこの事だな。万一に備えて武装の多角化を進めてきたつもりだがこの様とは、我ながら実に情けない」

ぽつりとマキナが漏らした言葉には、今までのような自尊心は感じられない。うっかり、本音が漏れ出たのだろう。

マキナも自分の言葉に思うところでもあるのか、こほんと咳払いを一つ。ただそれだけで気持ちの整理が付いたのか、再び自信、或いは威厳に満ちた表情を浮かべる。

「要するに、現状『わだつみ』以外に『マッコウクジラ』を打倒する事は不可能という訳だ。一応新造艦を作るという手立てもあるにはあるが、あまりに時間と人手が掛かり過ぎる。何より……」
「何より？」
「『わだつみ』のように馬鹿デカい砲をくっつけた船をいきなり組み立てるのは、現代の技術ではかなり難しいらしい。実戦を繰り返し、乗組員の体感を元にして少しずつ成長させないと、そよ風が吹くだけでひっくり返る欠陥品にしかならないそうだ。仮に出来上がっても、成長に付き合った乗組員以外まともに扱えないじゃじゃ馬だとさ」
「……悪かったわね、魔改造船で」
「弁明しておくと、技術者は褒め言葉として先の言葉を言っていたぞ」
　マキナは快活に笑い、アカネは唇を尖らせてから、ため息を吐く。
　今の話で、彼女が自分達の船を接収したい理由は分かった。同時に、その接収がマキナにとって不本意である事も、だ。『わだつみ』は長年連れ添った自分達でなければまともに動かせないと、技術者のお墨付きである。そこらの素人を乗せても、ちんたら進むのが精いっぱいか。
　無論『わだつみ』の主砲でなければ『マッコウクジラ』を倒せないのだから、要らないという答えは出てこない。拒めば無理矢理にでも持っていくだろう……しかしまと

もな運用をするには、アカネ達の協力が不可欠。マキナは不遜な態度を取っているが、内心はかなりハラハラドキドキしているのかも知れない。何時ものアカネなら、足下を思いっきり見てやるところだ。

だけど、今は――――

「……ごめんなさい。今は……答えを、出せない」

「何時なら出せる？」

「アオイが、妹が目を覚ましたら」

アカネの『頼み』に、マキナは顎を擦りながら考え込む。

やがてちらりと、未だベッドの上で寝たままでいるアオイを見た彼女は、何を思ったのだろうか。一瞬にたりと笑みを浮かべるや踵を返し、アカネに背を向けた。

『わだつみ』の修理は既に行わせている。作戦決行は『わだつみ』の修理が完了する二十六日後だ。それまでの返答を願うよ」

そしてそれだけ言い残すと、片手を軽く振りながら、部屋から出て行った。

残されたアカネはしばし、マキナが出て行った扉を見つめる。何時までも何時までも見続け、その場で静かに俯き、頭を抱えて蹲る。

「……う、うう……私、は……！」

そのまま嗚咽混じりの、苦悶に満ちた声を漏らした。

しばし、嗚咽だけが室内を満たす。涙は幾ら出ても止まらなくて、このまま身体が干からびてしまうような気がした。けれどもアカネはそれでも良いと思っていた。このまま朽ちてしまえば、きっと悲しい事も忘れてしまえるから。

だからアカネは泣いた。泣き止もうとは思わなかった。ずっと、ずっと、本当に自分が干からびるまで泣こうとして――――

「おねえちゃん、なかないで」

ベッドから聞こえてきた声で、我を取り戻した。

12

跳ねるように顔を上げ、アカネはベッドを、大切な妹の方を見る。
アオイは、まだベッドの中で横になっていた。
だけどその目はパッチリと開かれていて、アカネの方を見ていた。
アオイと目が合ったアカネは一瞬喘ぐように口をまごつかせ、目を一層潤ませ……何かを言うよりも先に、寝ているアオイに抱き着いていた。
「アオイっ！　アオイ！　アオイ、アオイぃ！」
「もう、おねえちゃんったら、急に甘えん坊さんになったみたい」
「だって、アオイ……！」
何かを言おうとしても、ちゃんとした言葉の前に愛しい妹の名前が出てきてしまう。
恥ずかしさと、嬉しさと、他にもなんだか色々ぐちゃぐちゃとした感情が込み上がり、頭の中が虹色に染まるような感覚を覚える。
あまりにも感極まり、アカネの目からポロポロと、大粒の涙が再び零れ始めた。折角見られた妹の顔が見え難くなる。無我夢中で涙を拭うが、涙腺は弛んだままで、開けっ放しの蛇口のように流れ出てくる。

気付けば両手で目許をずっと擦っていて……アオイの小さな手が頭に乗り、撫でてくるまで、アカネの涙は止まらなかった。尤も涙が止まると、今度は顔が茹だっていくのが止まらないのだが。

「よしよーし」

「……アオイ。流石にこれは、その、恥ずかしいのだけど」

「えー？　今のお姉ちゃん、小さい子みたいで、可愛いのに」

「だからそれが恥ずかしいんだってば」

文句を言ってもアオイの手は止まらず、アカネの髪をくしゃくしゃにしていく。アカネは頬を膨らませ、憤りを露わにした。自分の頭に乗せられた手を、払い除ける事はしなかったが。

時間と共に、少しずつだがアカネの激情も鎮まっていく。そうして空いた胸の隙間に湧いてくるのは、罪悪感。

「アオイ……ごめんなさい」

その言葉は自然と、無意識に口から出ていた。

アオイは言われた事がよく分かっていないかのように、小首を傾げる。目もパチパチと瞬かせ、本当に、キョトンとしている様子だ。

「……お姉ちゃん、なんで謝るの？」

「だって、私の所為でアオイは怪我をした訳で……私がアオイの言う通り、すぐにアイツから逃げていれば、アオイが怪我する事もなかったから……」
「ああ。そういえば、そうかも」
納得したように、アオイは頷く。
そして、ごちんっ！　と音が鳴るほど強く、アカネの頭をげんこつで叩いた。
割と本気っぽい一撃で、油断していた事もありアカネは「ごぶっ!?」という不様な声を上げてしまう。すると、ツボに入ったのだろうか。アオイは自分が殴ったにも拘わらず一瞬呆けたように目を点にし、それからゲラゲラと心底楽しそうに笑い出した。
「あはははは！　何変な声出してるのさー」
「うぐぐぎぎぎ……い、いきなり叩かれれば、誰だって、こうなるわよ……」
「ふふっ。あー、スッキリした……はい、じゃあこの話はこれでおしまいね」
手を叩き、終わりを強調するアオイ。無理やり話を終わらされ、アカネはムスッと唇を尖らせた。
そう、あまりにも呆気なく終わりを告げられたから、アカネも流されそうになってしまった。
自分のしてしまった事を、ただのげんこつで許そうとしている事を。
「……いや、アオイ。ちょっと待って」

「待たない。おしまいったらおしまいなの」
「そんな訳にもいかないでしょ!?　だって私、アオイの事」
「それ以上言ったら、本気で怒るよ」
　ぴしりと、鞭を振るうような鋭い牽制。
　妹からの一言に、アカネは思わず口を閉ざしてしまう。それはアオイが本当に、心から怒っている時の言い方だった。
　だから、これは本当に言ってはいけない言葉。
　ごくりと、喉元まで来ていた言葉を息と共に飲み込む。それからちょっぴり、深呼吸をして……代わりの疑問をぶつける。
「……なんで、許してくれるの」
「許してほしくないの?」
「理由もないのに、許されるよりは」
「そっか……私ね、お姉ちゃんの事、ちょっと羨ましく思ってたんだよ」
「羨ましい?」
　訊き返すと、アオイはこくりと頷いた。それから照れたようにそっぽを向き、目を閉じ、嬉しそうに笑う。
「こんな時代に産まれたから……なんてのは、言い訳かな。私って、何事もすぐに諦め

ちゃうでしょ。きっと駄目だ、もうお終いだーって。生きる気力が足りないっていうか、やる気がないというか」
「……時々は、そう思わなくもないけど」
「それに結婚だって、生きるための手段ぐらいにしか思えない。恋とか、愛とか、そんなの金持ちの道楽ぐらいだって考えてる。パパとママは、その恋とか愛で結ばれて、私達を産んでくれたのに」
「それは仕方ないじゃない。それこそ、こんな時代なんだし。アオイみたいな考えの子なんて、珍しくないわよ」
　話している間に俯いてしまったアオイに、アカネは励ますように言葉を掛ける。
　これは心にもない言葉なんかではなく、アカネの本心だ。時代錯誤な考え方なのは自分の方で、アオイの考えの方が『正しい』。むしろアオイは自分の意固地な考え方の所為で、色々苦労させている筈だ。
「だから、お姉ちゃんが羨ましいの」
　アカネのそんな気持ちを読むように、アオイは首を横に振りながら答えた。
「お姉ちゃんは何時だって、自分の信じた事をやってる。出来ないに決まってるなんて思わなくて、やってみせるって思ってる。私は、そんなお姉ちゃんが大好きなの」
「アオイ……」

「お姉ちゃん。さっきはなんで泣いてたの？　もう一度、あの海生物と戦うのが怖いから？　『わだつみ』を取られちゃうのが嫌だから？」
問われた言葉に、アカネは静かに、首を横に振る。
海生物と戦う事は怖くない。『わだつみ』を取られる事も……嫌だが、怖くはない。
怖いのは、もう一度アオイが傷付く事。
自分の浅はかな激情が、奪われた家族の仇を討つどころか、家族を失う原因になるのではないか――――
「大丈夫」
思うだけで言葉にならなかったアカネの頬を、アオイは優しく撫でてくる。
アオイの手は、ちょっと冷たい。
それが自分の火照った頬と混ざり合って、少しずつ温まっていく。自分の頬の熱さは、アオイに渡した分だけ冷めていく。
冷た過ぎるアオイ。熱過ぎた自分。
自分達は、片方だけではあまりに不安定だ。だけど二人なら、きっと丁度良い。二人でなら、一人前になれる。
二人なら、やりたい事が出来る筈。
「アオイ。私……パパとママの仇を討ちたい。『わだつみ』を誰にも渡したくない。だけ

どアイツを見たらきっと、また自分を見失うと思う。だから、私がまた自分勝手な事をしたら……頭を一発引っぱたいてくれる？」
「うん、分かった。私からも、お願いしても良い？」
「勿論」
「私が怯えてばかりで、何も出来なくなったら、ちゃんと引っ張って。一人で行こうとしないで、私も必ず連れて行って。約束だよ？」
アオイはベッドの中から、小指を立てた手を伸ばす。アカネはその小指に自分の小指を絡ませた。
「ゆーびきーりげーんまん、うーそ吐いたら針千本のーます。指切った」
それから同時に、歌い出す。息を合わせる必要なんてない。
くすくすと笑い出すところまで、二人一緒だった。
「ありがと、アオイ。マキナの奴に、ちょっと言ってくる。あ、勿論その前に先生を呼ぶから」
「うん。二十六日後だっけ？　それまでに体調治すようにするね」
「無理はしちゃ駄目だからね。じゃ、先生を……あ、そうだ」
ベッドから少しだけ離れ、ナースコールのボタンを押そうとした寸前にアカネは指を止めた。次いでくるりと振り返り、ベッドの中でキョトンとしているアオイと向き合

う。
「？　お姉ちゃん、どうしたの？」
「いや、大した疑問じゃないんだけどさ」
「うん」
「なんで『わだつみ』が取られるかも知れないって知ってるの？　あと二十六日後に出発の事もだし、マキナって誰なのか知ってる訳？」
「……あ」
　しまった、と言いたげなアオイの顔。
　双子でなかったとしても、その顔を見れば全てを悟るのは簡単だろう。お姉ちゃんであるアカネに、分からぬ訳がない。
「あーおーいー？　念のために確認するけど、何時から起きてたのよアンタ」
「……目を覚ましてって、お姉ちゃんに頼まれた辺り」
「殆ど最初からじゃん!?」
「お、起きようとしたよ!?　でもその後あのおばさんが来たから起きるタイミングなかったんだもん！」
「死にかけたんだからそんなの気にせず起きなさいよ！　こっちは一秒一秒寿命が削られる想いしてんだから！」

「気にするよ！　絶対微妙な空気になったもん！」
「屁理屈言うんじゃないわよ冷血漢！」
「もっと考えてから言ってよ猪武者！」
わーわーぎゃーぎゃー、姦しい声が病院中に響く。その口ゲンカは如何にも年頃の娘達のそれであり、身体の中にあるエネルギーを途切れる事なく吐き出していた。
つまりは大変元気な訳で。
「……これなら、退院は、すぐになりそう、ですね」
ナースコールなしでやってきたキリタが部屋の外で独りごちていた事に、アカネ達が気付く事はなかった。

１３

新品の甲板と、船体前方を覆うように貼られた真新しい装甲版。遠目に見ても、その出鱈目な大きさが分かる三連装式六十センチ砲。粉々になった筈のそれらは、新品のような輝きを放っていた。

側面や甲板部分には無傷の四十センチ砲が並べられ、間を埋めるように十センチ砲が設置されている。どの砲台も買いたてほやほやの新品だ。

側面装甲に開けられた大穴は、今や何処にも見付からない。代わりに分厚い金属板があったが、その光沢や色合いは、今まで見た事もないものだ。推察するに最盛期の人類技術によって作られた、現代では生産不可能な素材を用いたのだろう。

エンジン部は、昔よりも静かだった。しかし生み出されるエネルギーが減った訳ではない。より効率的な稼働となる事で、同じエネルギー生産量でも、音として消える分が減ったのだ。

何もかもが真新しい。まるで生まれ変わったような……否、まるでではない。事実一度は船として死んでいて、新たな『命』を持って甦ったのだ。だからこの『船』はこう呼ぶのが相応しい。

『わだつみ改・ジェネシス』と。
「ダサいから却下」
「うぶぇぇぇぇぇっ!?」
「奇声上げても駄目なものは駄目」
等と自分の考えを伝えたアカネだったが、妹であるアオイの返答は大変冷たいものであった。ぷっくりと頬を膨らませてみたが、アオイに譲歩の意思は見られない。どうやら本気で『わだつみ』の改名が嫌らしい。
アカネとしても、半分ぐらい冗談のつもりだ。両親から譲り受けた『わだつみ』の名前を勝手に変えるという事に、罪悪感がない訳ではないのだから……カッコいい名前、という部分は割と本気で信じているが。
「むぅ、カッコいいと思うけどなぁ」
「絶対良くないから止めて」
「もう、分かったから。『わだつみ』は『わだつみ』のままにするから。ね？」
「ほんともぉー。お姉ちゃん、自分のネーミングセンスが絶望的なのちゃんと自覚してよね……」
呆れたようなため息を吐くアオイだったが、その顔にはやがて笑みが戻ってくる。アカネも、自然と笑みが浮かんだ。

今にも死にそうだった『わだつみ』が、新しくなって海に浮かんでいる。
これならまた一緒に海へ行ける。これならまた一緒に漁へと出られる。
これなら一緒に……両親の仇を討てる。
「我々の修理は気に入ってもらえたようだな」
『わだつみ』を眺めていたところ、アカネ達の後ろから声を掛けてくる者が居た。
アカネとアオイは同時に振り返り、そこに立つ女性――――マキナと顔を合わせる。
マキナは腕を組み、不遜な、或いは誇らしげな笑みを浮かべていた。
病院で出会い、その日のうちに『マッコウクジラ』討伐作戦への参加を伝えたのが二十六日前の出来事……以来顔を合わせていなかったが、相変わらず堂々とした佇まいである。眼帯で隠れていない方の目だけで、凡人では到底出せない気迫を放っていた。
アカネはなんやかんやこれで三度目の対面（病室内で話を聞いた後、討伐作戦に参加する旨を伝えるために話をした）だが、アオイは今日が　―　タヌキ寝入りをしていたとはいえ目を開けて向き合ってはいないのだから　―　初対面。人見知りの激しいアオイはこそこそと、アカネの後ろに隠れてしまう。
避けられてしまったマキナだが、彼女はさしてショックを受けた様子もない。むしろ自慢げな笑みを浮かべ、腕を組んだ仁王立ちの体勢でアカネ達と向き合う。あまりにも堂々とした態度に気圧されたのか、アオイはますますアカネの影に隠れてしまった。

　些か怖がり過ぎじゃなかろうか、とは思いながら、怖がる妹に代わってアカネはマキナの問いに答える。
「ええ、もう大満足ね。正直ここまでしっかりやってくれるとは思わなかったわ」
「当然だろう？　上手くいけば我々のものになるのだ、手を抜いて変なものを作り上げる訳にはいくまい」
「あら、それは残念ね。目論見が外れて」
　満面の笑みと共に言い返すアカネに、マキナはさして気に留めた素振りもなく「全くその通りだ」と同意する。アオイは何やら後ろで震えていたが、こんなのはただの皮肉の言い合いだ。相手もよもや本気ではあるまい……と、アカネは思っている。
　軽口の叩き合いという挨拶を終えると、マキナは笑みを微動だにさせず、いよいよ本題を切り出した。
「さて、満足してもらえたのなら、一つ命令を出そう」
「……命令？」
「何、今更『わだつみ』を寄越せなんて事は言わん。ただこの後行うブリーフィングに参加してもらう。『マッコウクジラ』討伐作戦の、な」
　感情の起伏が乏しい淡々とした、或いは有無を言わさない冷酷な口調で、マキナはアカネ達にそう告げる。

自分達はこれから、『マッコウクジラ』の退治に向かう。
しかしあの強大な海生物に、たった一隻で戦いを挑むのはただの無謀だ。そこでマキナの仲間……軍人達と協力する事になるが、しかし顔も知らない相手と連携しろというのは無理な話である。そもそも『マッコウクジラ』の圧倒的な強さからして、数で挑めば勝てる相手とも思えない。
勝てる作戦があるなら是非とも教えてほしい。『命令』なんてされずとも、こっちならお願いするところだ。
「勿論、参加させてもらうわ」
「良し。時刻は一五〇〇、場所は旧入港監視センター内で行う。以上だ」
話すべき事を話し終えると、マキナはさっさと歩き出してしまう。急ぎ足ではなかったが、早歩きぐらいの速さでマキナの姿は小さくなった。
マキナがこちらの話し声も聞こえないぐらい離れると、ようやくアオイはアカネの影からひょっこり出てくる。頬をぷっくりと膨らませ、明らかに不機嫌そうだった。
「……あの人、苦手」
「確かにアオイの好きなタイプじゃないよね。私は嫌いじゃないけど」
アオイの言葉に同意せずにいると、アオイはますます膨れた。子供みたいで可愛いな、とアカネは思う……それを言うとアオイは怒るだろうが。

「そんじゃあ、ま、ブリーフィングまであと四時間はあるし、その前に新しくなった『わだつみ』の中を見ておきましょうか。自分達の船なのに、なーんにも知らないなんて言ったら笑いものにされちゃうもの」

「うん、そうだね」

アカネに促され、アオイはこくんと頷いた――――それと同時に、極々自然にアカネの手を取り、握り締める。

普段ならやってこない妹の行動に、アカネは少しだけ驚いた。だけど掴んだ手が震えている事に気付いてしまえば、その事を問い質す気になどならない。『わだつみ』は大切な家族の形見であるのと同時に、今や命を失いかけた危険地帯なのだから。

だからアカネは、その手を一層強く握り締めた。震えなんて簡単に止めてやると言わんばかりに。

アオイの手の震えは、たったそれだけで簡単に止まる。

「良しっ、それじゃあしゅっぱーつ！」

「……しゅっぱーつ」

高らかな掛け声と共に片手を高く突き上げ、アカネは歩き出す。アオイも小さく片手を突き上げ、ひっそりとした掛け声を、嬉しそうに呟く。

二人は一緒に、生まれ変わった『わだつみ』へと乗船するのだった。

……

……

…

「それでは、ブリーフィングを始める」

一五〇〇時ジャスト。マキナの勇ましい、或いは冷酷な一声により、ブリーフィングが始まった。

アカネとアオイが居るのは、旧入港監視センター……という名の廃虚である。三百年前は高性能な電子機器により、何百もの船の出入りを同時に見張っていたらしい。海生物の発する電磁パルスが海に溢れると、真っ先におしゃかとなったようだが。

それでも建物自体は高度なテクノロジーにより三百年もの間倒壊を免れ、今でも使われている。アカネ達が居る部屋は昔も大人数の会合の場として使っていたものらしく、壊れて動かなくなったモニターや、錆び付いて何時砕けてもおかしくないパイプ椅子が置かれていた。アカネの座る椅子も見た目がボロボロで、途中でぐしゃりと潰れそうな気がしてあまり落ち着かない。隣のアオイも、見ればアカネ以上にそわそわしていた。

そしてこの部屋には今、アカネとアオイ以外に五百人近い人々が集まっていた。全員が軍人 ― マキナの部下らしい ― という話だが、決まった制服がないらしく、各々好きな私服を着ているためいまいち纏まりがないように見える。

しかしながらマキナが話し始めると一斉に黙り、全員が彼女の話に耳を傾ける辺り、統率は取れているようだ。部下達の一糸乱れぬ行動にマキナは笑みを浮かべた……のは一瞬だけ。すぐにその笑みを消し、険しい顔付きになる。

「本作戦の説明は一度きりだ。分からない事があるからと一人一人訊きに来られては時間がいくらあっても足りん。疑問を覚えたらその話の直後か、質問時間内に発言しろ。それ以外の質疑応答は認めん……以上で前置きを終える。これより作戦の説明を始めよう」

何もかも一方的に告げ、マキナは本当に作戦の概要を話し始めた。軍人達は呆けた様子もない。マキナのこの強烈な話し方は、普段からそういうもののようだ。

マキナの普段を知っている軍人達に、先の前置きは必要あるまい。ならば先の言葉は、自分達に向けられたものだろう――――アカネは自ずとそれを悟り、アオイも口には出さずとも身を乗り出し、二人してマキナの話に意識を集中する。

「作戦の第一段階は『マッコウクジラ』の捜索だ。奴は極めて強力な電磁パルスを纏っているため、ソナーによる事前察知は極めて難しい。交戦時のデータによれば、確実に捉えられる距離はほんの十数キロ程度だ。しかし奴が持つ生体砲……人類の艦砲と同質の機能を持つ三本の突起物からの攻撃は、推定射程七十五キロに達する。索敵能力も射程と同程度、或いは凌駕すると考えて良いだろう。つまり我々の技術力では奴の先制攻

撃を防ぐ事は不可能という事だ」
「マム、質問があります」
「許可する」
「先制攻撃が不可能という事は、我々の誰かが犠牲になる事を前提にした作戦を展開するという事でしょうか？」
「そうだ」
質問を許可され、立ち上がった軍人の一人からの問いに、マキナは一片の迷いも誤魔化しもなく答えた。
必ず誰かが犠牲になる。
恐ろしい宣告だったが、しかし軍人達は誰一人として大きな反応を見せない。反対意見も、混乱もなく、その言葉を淡々と受け入れている様子。
作戦を聞く前から、彼等はとうに覚悟を済ませてきたようだ。
「だが奇襲を避ける手はある。『マッコウクジラ』は非常に強力な電磁パルスを発しているが、その影響で周囲の大気が電荷を帯び、雷雲が発生する。この雷雲はかなり巨大で、二百キロほど離れた位置からも視認可能な規模だ。これで奴よりも先に、我々は奴の存在を捕捉出来る。しかし先に気付くだけだ。奴の砲撃が、我々の倍以上の射程がある事は変わらない」

「了解しました。説明、感謝します」
マキナの説明に満足したのか、質問した軍人は敬礼。それから座り、再び聴衆の一人に戻る。他の軍人達の顔色も、特に変わりない。
恐らくこの場で一番心を掻き乱されたのは、アカネだろう。
ローエングリンの言う事は至極尤もだ。『マッコウクジラ』と現代技術には、絶望的なまでの差が存在する。圧倒的な強者を打倒するのに、犠牲なしで済む筈がない。
理屈はアカネにも分かる。それでも、感情的に受け付けられない。イライラとした気持ちが、アカネの胸を苛む。
「この第一段階は誰かが必ず犠牲になるやり方だ。もしもこれよりも優れた方法を思い付いたなら、是非とも聞かせて欲しい。それは、我が最も望むものだ」
この気持ちに区切りを付けられたのは、自分以上に辛い想いをしている相手がいると思い出せたからに他ならない。
「……どうやら天才軍師は此処にはいないようだな。ではこの第一段階を前提にし、第二段階について説明する」
アカネ達の沈黙を『肯定』と受け取り、マキナは話を続けた。
「『マッコウクジラ』を発見・接近を終えたら、順次攻撃を開始する。この時我々軍が『マッコウクジラ』を包囲し、全方位からの砲撃で奴の電磁フィールドを弱体化させるん

だ。そして」

言葉を区切るのと共に、マキナはアカネを指差した。

「電磁フィールドの出力が大きく低下したタイミングで、そこの姉妹が操る『わだつみ』に参戦してもらう」

加えて、アカネ達が戦いの切り札である事も明かす。

全員の視線が、一斉に自分達の方に向いたのをアカネは全身で感じ取った。人見知りしないタイプであるアカネでも、何百という目が自分を見ていると思うと流石に居心地が悪い。アカネですらそうなのだから、人見知りするアオイはもっと大変だ。アオイの顔はすっかり青くなり、アカネの手を両手で強く握り締める。割と痛いので止めてほしいが、アオイの気持ちがこれで少しは落ち着くのなら、お姉ちゃんとしてそこは我慢だとアカネは思い留まった。

「彼女達は今時珍しい、いや、少なくともニホンレットウ一帯では唯一の戦艦型漁船の持ち主だ。主砲である六十センチ砲の威力は、我々が持つ四十センチ砲の七倍以上の運動エネルギーを有する。他にも二連装式四十センチ砲が『副砲』として十六門以上、十センチ砲も山ほどある。一斉射すれば、我が軍で最も頑強な装甲巡洋艦すら一瞬で消し飛ぶだろう」

「……ゲテモノだな」

「まるで実用性が感じられん」
「浪漫はあるが、一体なんのためにそこまで武器を……」
ひそひそとした会話が耳に入り、アカネは苦笑い。まさか「『マッコウクジラ』を討つため」に何年も準備していたとは誰も思うまい。
「実用的かどうかはともあれ、コイツらの船の主砲ならば弱った電磁フィールドであれば貫ける筈だ。即ち此度の作戦を一言で纏めると、奴に肉薄して砲撃を繰り返し、弱ったところに直径六十センチのゲテモノ砲弾を脳天に喰らわせる事。以上だ。質問があれば受け付ける。反論などがあれば是非とも聞きたい」
一通り作戦の概要を説明し、マキナは軍人とアカネ達に向けて意見を求める。
しばし広がる沈黙。
軍人達はマキナの指示に従うだけなのか、特段考え込んでいる様子はない。或いは、既に色々な案を出し切った後の説明がこれなのか。いずれにせよ彼等から質問や異議は出てこないだろう。
つまり先の呼び掛けは、実質アカネ達に向けられたものだ。
アカネは少し迷いながら、挙手をする。マキナは「なんだ」と一言訊いてくるだけ。恐る恐る席から立ち上がり、アカネはマキナに尋ねた。
「二つ、確認しておきたいわ。『わだつみ』……つまり私達の船で『マッコウクジラ』の

電磁フィールドを破るとして、それをするまでの間、つまり十分電磁フィールドが弱るまでの間、私達は何をしていれば良い？」

「待機だ。『マッコウクジラ』の知能がどれほどのものかは不明だが、三百年前のクジラは動物の中でも特に賢い生き物として扱われていた。奴が一度戦った『わだつみ』の戦闘能力を把握し、記憶している可能性は高いと思われる。発見された場合、真っ先に攻撃対象となるだろう。故に安全圏で待機し、機が熟すのを待て」

マキナの答えに、アカネはさして驚かない。これについては予想していた通りだ。作戦の要である『わだつみ』を無為な危険に晒す訳にはいかないのだから。温存しておくに決まっている。

囮となる軍人達には少し申し訳なさも感じるが、彼等は覚悟を決めているのだろう。マキナからの遠回しな捨て駒発言に、誰一人として眉一つ動かさない。だとしたら自分達に出来るのは、彼等の覚悟に見合う活躍をする事だけだ。

アカネもまた覚悟を決める……しかしどれほどの覚悟を決めたところで、世界は人間の思うようには進まないものである。

自分達の覚悟が何もかも無駄になる可能性が、一つ残っていた。

「うん、それは分かったわ。じゃあ二つ目の質問。電磁フィールドが弱った『マッコウクジラ』が、そそくさと逃げないようにする手立てはないの？」

そう、『マッコウクジラ』が逃げ出す可能性である。

『マッコウクジラ』はあくまで野生動物だ。確かに奴は存在するだけでアジア圏の人類を滅亡させかねない悪魔だが、奴自体は人間を滅ぼそうなんてこれっぽっちも考えていないだろう。そして何より畜生に過ぎない奴が、意地や矜持を持ち合わせているとは到底考えられない。

故に自分の命が危うくなれば、さっさと逃げてしまう事は十分考えられる。実際海生物を漁で捕獲する時は、ちまちまと弱らせる手段は下策であり、ここぞというタイミングで強烈な主砲で止めを刺すのが王道だ。何故なら半端に痛め付けると、危機感を覚えた海生物はさっさと逃げてしまうからである。

性質の悪い事に『マッコウクジラ』の最大速度は、現代の駆逐艦級漁船を大きく上回っている。死ぬ気で頑張れば包囲を抜ける事など造作もない筈だ。そのまま『沖』まで逃げ帰ってくれるならそれでも良いのだが、うろちょろした挙句やっぱり近海に留まるという可能性も否定出来ない。

もしも逃げたにも拘わらず『マッコウクジラ』が近海に留まったなら、囮となった人々の犠牲は無駄になる。

死んだ命に報いる――――今時、珍しい考えなのは否定しない。だけどこれがアカネという人間の気持ちだ。犬死を出すなんて、アカネには許容出来ない『問題』だった。

アカネは真剣にマキナの答えを求めており、自分でも気付かないうちに目付きが鋭くなっていく。最早その目付きは、憎悪のそれと勘違いされても仕方ないほど。されどマキナは臆さず、怒らず……むしろ獰猛な笑みを浮かべた。

「無論、その点についてはこちらとしても対策は考えている」

「対策？　逃げようとする海生物を食い止める作戦なんてあるの？」

「ある。『マッコウクジラ』相手になら、な。一つは古代の技術を転用して開発した新装備で、リスクは小さいが何処まで信用出来るか分からん。もう一つは確実に通用するが、リスクが大きい。まずはリスクの小さい手段を用い、それが失敗、或いは破壊された場合プランＢとしてリスクの大きい手段を用いる」

「……具体的には？」

アカネが尋ねると、マキナは笑った。まるで子供のように、或いは悪戯小僧のように。

そして彼女は語り――――

アカネの不安はすっきりと晴れ、マキナと同じ笑みを浮かべるのだった。

14

大海原を、『わだつみ』が駆ける。

舵はとても軽く、繊細な操舵も難しくない。砲や望遠レンズの動きも滑らかで、向けたい方角にすいすいと動かせる。ソナーの画像も綺麗に映り、傷一つない窓ガラスは油断すれば存在すら忘れてしまいそうだ。

中古品が何もかも悪いとは言わないが、やはりある程度劣化すると機能面の低下は否めない。真新しくなった事で、『わだつみ』はこれまで以上の性能を発揮してくれるようになっていた。

強いて課題を挙げるとすれば、

「……エンジンが静かで、船を動かしてる気がしない。可愛げがない」

「ごめん、その気持ちはちょっと分からない」

アオイ個人が感じている、贅沢な悩みぐらいなものだろう。

生まれ変わった『わだつみ』の操作は、アカネ達の期待以上に快適だった。修理に必要な資金はマキナが全部出してくれたので、アカネ達にはどれだけのお金が掛かったかのは分からないが……ここまで上質の修理を施したのだ。かなりの、アカネ達では身売

りしたって用意出来ないような大金が動いたのは間違いない。もしかしたら本気で『わだつみ』の接収を期待していたのではないかと、ちょっと勘繰りたくなる。

幸いにして『わだつみ』はアカネ達の下に帰ってきた。これなら今まで以上の活躍をしてくれるに違いない。

そしてきっと、『マッコウクジラ』の打倒も可能な筈。

今度こそアイツを倒せる。今度こそ、あのすかした顔に金属の塊を打ち込める。今度こそ、パパとママの仇を――――

「お姉ちゃーん」

「ふぎっ!?」

等と考えていたら、不意にアオイが自分の頬を引っ張ってきたので、アカネは奇声を上げてしまう。何時の間にかアオイは舵輪から手を放し、席から立ち上がってアカネと向き合っていた。

一通り頬をぐにぐにと引っ張ったアオイは、如何にも怒ってますと言わんばかりに荒々しい鼻息を吐く。

「もう、お姉ちゃんったらまた怖い顔してたよ。どうせ『マッコウクジラ』の事考えてたんでしょ」

「うぐ……な、なんで分かったし」

「分かるよ、妹だもん……いや、今のは言い過ぎたか。妹じゃなくても分かるぐらい露骨なんだから」
「露骨なのか……」
一体自分がどんな顔をしていたのか。なんとも気持ちの悪い感覚に見舞われ、アカネは自分の頬を揉んだ。
それからくすりと、アカネは笑みが零れる。
どうやら自分はまた『熱く』なっていたらしい。だけどアオイのお陰で、良い感じに冷めた。そう。熱くなり過ぎては、最初の時の二の舞だ。強大無比な敵の前で、冷静さを失ってはならない。
もう、あんな不様な真似はしない。もう、誰かを犠牲にして自分達だけが助かる未来なんてごめんだ。
今度こそ『マツコウクジラ』を、みんなの力で倒すのだ。
「うん、ありがとアオイ。ちょっと、落ち着いた」
「どういたしまして。それにさ、こんだけ仲間が居るんだから、もしかしたら私達が出る幕なんてないかもよ?」
「うぇー、それは困るなぁ」
わざとらしく舌を出しながら、アカネは困った顔を浮かべて辺りを見渡す。

操舵室の窓からも見える、無数の艦船。

それらの船は、漁船とは明らかに見た目が違っていた。分厚い装甲が何枚も付けられ、艦砲も『被弾』を考慮したような重装甲化が施されている。

また現在多くの民間漁船が主砲として採用している四十センチ砲と同等のものを、船体上部ではなく側面に二つずつ装備していた。この配置なら船体の両側から『敵』がやってきて挟み打ちに遭ったとしても、無抵抗に一方向からやられる事はない。船体の形状からして正面を攻撃する事も可能だろうから、正面火力も落ちていない。むしろ甲板前方に設置していては向けられない、後方の敵への攻撃が可能となる。包囲網を警戒した装備。

欠点としては、側面の敵を攻撃する時は例え相手が一人でも火力の半分が使い物にならない事、だろうか。同等の大きさの漁船を大きく上回る機動力を持ち、すぐ側面へと回り込んでくる海生物相手には、あまり適した配置ではない。電磁フィールドを破るには瞬間火力が重要であり、常に火力の半分でしか挑めない状態は厳禁なのである。そもそも海生物はその身体を維持するためにたくさんの獲物を必要とする都合、群れという分け合う仕組みを好まない。『マグロ』のような一部の種を除き、挟み打ちを警戒する必要はないのだ。

つまりこれらの船は海生物以外の相手……人間の艦船、それも多対多となる艦隊戦を

想定している。

――――成程、これが『軍艦』か。

コンセプトの異なる船のデザインに、一船乗りとしてアカネは興味を抱く。何より軍艦など普段の暮らしでは滅多にお目に掛かれない船である。油断すると、ついついじっくり観察してしまう。

尤も、そんな船が八十隻も周囲に展開していると思うと、有り難みは感じられないが。

彼等はマキナが指揮する軍隊。アカネ達と共に『マッコウクジラ』撃破を目指す、気高き戦士達である。彼等は横四十隻、縦四十隻と、十字架のような隊列を組んで真っ直ぐ南へと進んでいる。『わだつみ』が位置するのは、丁度その中心だ。作戦の要である『わだつみ』を、何がなんでも守るためである。

とはいえ魔改造呼ばわりされてしまった『わだつみ』と比べ、軍艦は大きさの時点で三分の二程度しかない。砲の数に至っては三分の一以下だ。気分的には騎士に守られるお姫様というより、武装した平民に守られる騎士のようである。正直、あまり居心地は良くない。

無論彼等の戦闘力は、決して平民なんかではない。例えば今、『わだつみ』から南東方向で一匹の海生物 ― 恐らく『ブリ』だろう ― が跳ねた時には

【三番、十五度三万に目標一確認！】

【六番、砲角度良し！　装填完了！】
【六番、威嚇発射ぁっ！】
次の瞬間には『わだつみ』に目まぐるしい勢いで通信が入る。
そして気付けば何隻もの船が砲をぶっ放し、哀れな海生物を撃ち抜いた。主砲ではなく副砲であったが、命中したそれは海生物の身体を吹っ飛ばす。電磁フィールドは破られずまだ生きていたが、いきなり攻撃を受けた海生物は、わたわたと逃げていった。
……とんでもない連携力だ。漁師とは明らかに練度が違う。アオイが言うように、この連携から繰り出される一斉砲撃を浴びたなら、『マッコウクジラ』とて一溜まりもないかも知れない。親の仇を討てないのは辛いが、誰かが死ぬよりはマシである。
「……そんじゃあ、ま、出る幕がないようにするためにも、暗雲探しを頑張るとしますかね。アオイもソナーを見といて。そっちが先に反応するって事はないと思うけど」
「うんっ」
アカネの一言でアオイは席へと戻り、アカネは船の周辺を目視で見渡す。
探すは暗雲。『マッコウクジラ』の強力な電磁パルスによって生じる、歪な気象現象だ。
『わだつみ』含め八十一隻の船が此処には居る。だからアカネ達がサボっていても、他の船に乗っている誰かが周りを見てくれている……という考えを、他の船でも抱いてい

るかも知れない。先の連携を見るにその心配は必要ないだろうが、うっかり八十隻の乗組員全員が見落とす可能性もゼロではないのだ。自分がサボっても大丈夫ではなく、自分だけは真面目にやるという精神が大事なのである。

アカネは口を閉ざし、船の周りを見渡す。席に戻ったアオイも、黙ってソナーを見続けた。

しばし無言の時間が過ぎていく。

……しばし、という言葉では些か物足りないぐらいの時間が経っても、海は相変わらず静かなままだった。

海生物との遭遇は、基本的には稀なものである。確かに今や地球上の全養分が海に流れ込み、それらの養分を独占する海生物は地球の支配者として君臨しているが……海というのはそれ以上に広大である。漁師がのこのこと生息地に出向いても、空振りで終わる事も珍しくもない。

ましてや『マッコウクジラ』は『沖』に生息している種。この近海には、ふらふらとやってきたあの一匹しか棲み着いていない筈だ。何処までも続く大海原で、足跡のような痕跡が残らない海面を見ながら、ただ一匹の生き物を探すのが如何に大変かは説明するまでもないだろう。今日一日が徒労に終わるとしても、なんら不思議ではない。

なので最初は真面目にやっていた事も、時間と共に疎かになっていく。自分達しか居

ないなら兎も角、周りにたくさんの人達が居るなら尚更。
「……暇だなぁ」
「暇だねぇ……」
ぽつりとアカネは独りごち、アオイがぽつりと同意した
瞬間、まるで自分達の姿を戒めるかのように通信を知らせるコール音が鳴るものだから、アカネとアオイは同時に飛び跳ねてしまう。
誰からだ、と思いアカネは通信機に表示された名前を見る。型式番号Ｖ６６Ｃ９Ａ……マキナが船長を務める軍艦、『ワシントン』からだった。
「は、はい、こちら『わだつみ』」
【こちら一番艦『ワシントン』。コール音から三秒も経ってから取るとは遅過ぎる。弛んでないか？】
「あ、アンタ達の基準で言わないでよ。漁師は通知が来たらすぐに取るなんて訓練はしてないのよ」
本当に弛んでいたアカネは、誤魔化すように言い訳の言葉を並べる。果たしてどれだけ説得力があるかは分からないが、マキナはそれ以上追求もしてこなかった。さして興味もないのだろう。
【まぁ、良いだろう。そこは本題ではないからな】

「……本題は、『マッコウクジラ』の事？」
【そうだ。そちらで何か動きは掴めていないか】
「掴んでたらとっくに報告してるわよ」
【だろうな】
元より、期待はしていなかったのだろうか。マキナはさしてガッカリした様子もなく、淡々とアカネの答えを受け止めた。
「別に、目当ての海生物に会えないなんてよくある事よ？」
【知っている。だがそれは、半径五十キロにも満たないセンサーを用い、たった一隻で探している時の話だ。我々は八十一隻の大軍であり、二百キロ以上離れていても視認出来る目印を知っている。奴がこの海域に居るならば、もう見付けても良い頃合いだ】
「なら何処かに移動したんじゃない？」
マキナの疑問に答える形で何気なく口にした自分の言葉に、アカネはそういう可能性もあるかと今更ながら思う。『マッコウクジラ』には恐らく目的地なんてものはない。大抵の海生物には縄張りなり生息地なりがあるものの、それは獲物が安定して存在するから維持出来ているもの。餌がなくなれば、彼等は容易に生息場所を移動する。故郷や住処への哀愁という、無駄なものなんて持ち合わせていないのだから。
しかし。

【それを見越して此処に来ている。斥候部隊の調査により、奴が二日前までいた場所の海生物が壊滅的に減少したのを確認した。その後の移動パターンは推測になるが、奴は高い海水温を好んでいる事から、この辺りに来ている筈だ】

マキナがその点を見逃している訳もなかった。

マキナは『何故』を考えている。アカネにはただの偶然としか思えなかったが、されど何か理由があるなら、それは『マッコウクジラ』打倒に役立つかも知れない。今回やろうとしている飽和攻撃作戦は理論上上手くいく筈だが、未だ実績のない、ハッキリ言えば机上の空論だ。打てる手は多いに越した事はない。

どうせやる事もないのだからと、アカネは少し考えてみる。

偶然以外の理由で、『マッコウクジラ』を見落とす原因には何があるだろうか。例えば『マッコウクジラ』には電磁パルスや電磁フィールドの出力を調整出来る力があり、今は息を潜め、機を窺っているのではないか。

しかしこれはないだろう。何故なら電磁フィールドと電技パルスを発しているのは、海生物自身ではなく、彼等に感染している細菌達である。細菌達はただ自分の本能のまま活動し、何時でも全力の電磁フィールドと電技パルスを放つ。海生物自身に、電技パルス等をどうこうする『権限』はない。寝ていようが失神していようが腹ペコだろうが、電磁フィールドも電技パルスも常に全開なのだ。だからこそ寝込みを襲うという手段

も使えない訳だが。

ならば、実は既に死んでいるのではないか。餓死したかも知れないし、他の海生物に襲われ、食べられてしまったかも知れない……我ながら、これほど説得力のない推測もない、とアカネは思ったが。いくら海生物が大食らいといっても、一日二日の絶食で死ぬほどではない。二日前に近隣の海生物を喰い尽くした後なら尚更だ。そして高い捕獲能力で近海の生物全てを食い尽くすと思われた生物が、そう簡単に死ぬものか。戦闘力については、『わだつみ』だって不意打ちを食らわせても勝てそうにないというのに。

他に考えられるとすれば、哺乳類である『マッコウクジラ』は他の海生物より賢いであろう点から推測して……

「実はこっちに気付いてて、ずーっと遠くからひっそり様子を窺っている、とか？」

アカネの考えていた内容と、アオイが独りごちた言葉が、ぴたりと重なった。

一瞬、アカネは操舵室の中が凍り付いたように感じた。

やがて、くすりと、通信機のスピーカーから微かな笑い声が聞こえる。マキナのものだった。

【成程、そういう可能性もあるな。その場合、奴は二百キロを大きく超えた索敵範囲を持つ事になるが】

「……あり得ない、でしょうか」

【考え難い事ではある。が、あり得ないとは言い切れない。三百年前の人類も、よもや生物が電磁フィールドを纏うとは考えていなかった。海生物に『あり得ない』という事はないと考えるべきだな】

全面的、ではないものの、まさか肯定されるとは思わなかったのか。アオイは通信機から顔を逸らし、俯いてしまう。きっとその顔は今頃真っ赤だとアカネは悟った。

「なんにせよ、最悪は考えておいた方が良いわね」

【そうだな。知性が高いのなら、夜襲を仕掛けてくる可能性もある。今のうちにローテーションを考えておくとしよう……以上、通信を終える】

マキナの言葉を受け、アカネは通信を切る。会話を終え、アカネは息を吐いた。

自分達も夜襲について考えた方が良いかも知れない。『わだつみ』の乗組員は二人だけだ。今から準備をしておかないと……

そう考えていた最中だった。

【十五番！　二百八十六度の方角に暗雲を確認！】

全域通信　―　返信機能のない緊急用の通信帯　―　から、狼狽したような声が聞こえてきたのは――――

15

「アオイ！」
「分かってる！」
通信を聞いたアオイは、アカネの指示よりも先に舵輪を左向きに回していた。
今のは軍人の誰かが発した通信だ。
角度だけを伝えた場合、それは自分達の進行方向をゼロ度とし、時計回りの方角を示す。今回のように全員が揃って同じ方角を向いている時には、こちらの方が感覚的に分かりやすい。通信で言っていた二百八十六度とは、左方向に七十四度という事だ。
『わだつみ』だけでなく、周りの軍艦も一斉に向きを変える。砲台の安全装置が解除され、弾頭が装填される際の駆動音が至る所から鳴っていた。
そして全ての船が、地平線に見える暗雲へと砲門を向ける。
【ようやく獲物のお出ましだ！　二十二番から三十八番艦は前進しろ！　『拘束部隊』も作戦開始だ】
マキナの指示を受け、十七隻の軍艦が、アカネ達の周りから移動を始める。船名の代わりにマキナが告げた番号は、作戦前には割り振られていたもの。呼ばれた艦船はすぐ

に動き出した。
彼等は先発隊。『マッコウクジラ』の存在を確認し、注意を引くための『囮』である。最も危険な任務を命じられた彼等は、しかし臆する事もなく最大船速で暗雲目指して進んでいく。
出来る事なら、アカネは彼等の援護をしたい。『わだつみ』の装甲であれば『マッコウクジラ』の砲撃の直撃を受けても耐えられる事は、既に実証出来ている。囮の役目は、本来なら耐久力に優れる自分がすべきだろう。
しかし『わだつみ』はこの作戦の切り札だ。『わだつみ』の主砲でなければ『マッコウクジラ』の電磁フィールドは破れない。もしも『わだつみ』の主砲が全て破壊されたなら、その時点で作戦の失敗を意味する。
『わだつみ』は傷を負う訳にはいかない。
安全圏から眺めている事しか出来ないアカネは、唇を噛み締め――――アオイがそっと手を重ねてくるまで、アカネは自分が唇を噛んでいた事に気付かなかった。
「大丈夫。私達なら、きっと『マッコウクジラ』を倒せるよ」
そしてアオイの言葉で、自分が不安になっていた事を知る。
強張っていた口許が解けていくのを感じる。深呼吸をすれば、自分の中にあった熱さが吐息と共に抜けていった。

もしもアオイがいなければ、我慢出来ずに命令無視して突撃していたかも知れない。それがより最悪の結果を招くと分かった上で。

「……ありがと」

感謝を伝えたアカネは、全てを見届けるべく望遠レンズを覗き込んだ。

突撃する先発隊達は、着実に暗雲へと接近していた。暗雲もまたゆっくりとだが軍艦達の方へと動いており、自然現象らしからぬ『意思』を感じさせる。両者の距離は段々と狭まっていく。

【こちら二十五番。暗雲中心部との推定距離十五万。接近を続ける】

全域通信より聞こえる、先発隊からの報告。十五万メートル、つまり百五十キロまで軍艦達は接近したらしい。『マッコウクジラ』の砲撃の射程は推定七十五キロ。誤差を考えると、百キロを下回った辺りから本格的な警戒が必要になる。

さながらカウントダウンのように、五キロ刻みで先発隊は自分達と暗雲の距離を読み上げる。軍艦の最大速度は約七十二ノットに達するが、それでも時速百三十キロ程度。五キロ進むのに百三十秒以上も必要とする。ゆっくりとしたカウントダウンに、少しずつ、アカネは緊張を高めていく。

だが、

【推定距離十二万五千――――っ!?　ほ、砲撃確認!】

十分な心構えをする前に、事は起きた。
アカネは目を見開き、望遠レンズの向きを変える。そこには確かに、見慣れた生々しい塊……『マッコウクジラ』の砲弾が三つ、先行隊目指して飛んでいる姿があった。先の報告は間違いなく事実だ。
だが、解せない。
『マッコウクジラ』の砲撃の推定射程距離七十五キロ……あれは『わだつみ』が経験した戦闘データと、『マッコウクジラ』の容姿から割り出したものを使い、マキナ御用達の学者が導き出した値である。『わだつみ』が受けた初回砲撃の予測距離が大体その辺りで、学者達の見解とも一致した。学者の出した数字がどのような計算によるものかは分からないが、曰く形態的な限界点らしい。
故にこの値は、完璧ではないとしても、そこまで大きな違いはない筈だった。なのに結果はどうだ？　推定だが距離十二万五千メートル……つまり百二十五キロから砲撃が始まっている。一・五倍以上の開きがあるではないか。
相手は『沖』の海生物『マッコウクジラ』。人類の英知を嘲笑うのは彼等の十八番だ。しかしだとしても限度がある。何か、化かされているとしか思えない。
アカネは望遠レンズを用い、辺りを見回す。ただ拡大するだけではなく、あえて倍率を最低限にし、広範囲を見渡してみたりもした。

すると謎解きのヒントは存外簡単に見付かった。

暗雲の動きが、今になって急加速したのである。まるで先発隊に突撃するかのように。

「っ！　こちら『わだつみ』！『ワシントン』聞こえる!?」

【聞こえている。どうした『わだつみ』】

「『マッコウクジラ』の奴、猛スピードで近付いてる！　暗雲よりも速く！」

【……そういう事か、おのれ小賢しい】

通信機の向こう側にいるマキナが、忌々しげな舌打ちをしていた。

暗雲は確かに『マッコウクジラ』の位置を教えてくれる。しかしそれは間接的な証拠だ。『マッコウクジラ』の電磁パルスが大気に影響を及ぼし、その影響がある程度の値に達する事で生じる。つまり、時差がある。

『マッコウクジラ』はその時差を利用し、人間達の虚を突いたのだ。暗雲が動く前に距離を詰め、相手がまだまだ遠いと誤解しているうちに射程距離まで接近したのである。しかし言葉で言うのは簡単だが、実際にこれをやるのは難しい。適当に加速しただけでは、『マッコウクジラ』の後を追うように暗雲も急速に移動する。自分の能力が暗雲に影響を及ぼすまでの時間差を把握し、その時間内に相手を射程内に収められる距離までじっと待つ……つまり我慢を知るだけの知性が必要だ。

『マッコウクジラ』には明確な知性がある。それも驕り高ぶった人間を嘲笑うほどに優れた。全体の半分を占めているのではと思える巨頭の中には、砲弾以外のものもちゃんと詰まっているらしい。

そしてその優れた頭は、弾道計算も正確にこなしてみせた。

砲弾は正確に、一隻の軍艦目掛け飛んでいく。狙われた軍艦は即座に副砲を起動させ迎撃を試みるが、高速で飛来する小さな弾には中々当たらない。加えて軍艦達は『わだつみ』のような、馬鹿げた数の砲は積んでいなかった。砲弾はするすると、対空砲火をすり抜ける。

【二十五番、砲弾接き――――】

全域通信から聞こえた、悲鳴染みた報告。それは全てを言い切る前に途切れ、そのほんのちょっと前に『マッコウクジラ』の砲撃が先発隊として突撃していた軍艦の一つを直撃した。

噴き上がる爆炎と、軍艦の破片。軍艦達は漁船よりも幾分重装甲だからか、未だ沈没はしていない。しかし朦々と上がる黒煙、それと落ちるスピードが傷の深さを物語る。もう一発当たれば、間違いなくあの船は海の藻屑となるだろう。

【二十五番、後方に下がり修理を始めろ。二十二番は援護に回れ。二十五番が戦闘可能な水準まで回復次第、両者共に前線に復帰だ】

【二十二番、了解。援護に回ります】
【二十五番、了解……一時退却、っ！】

マキナも一時的ながら退却と援護の指示を出し、二つの船も答える……が、『マッコウクジラ』は見逃さない。
二射目の砲撃が迫る。目標は、先程直撃を受けた二十五番艦だった。
【に、二射目接近！　回避出来な】
ぷつりと、通信が途絶える。
二回目の直撃を受けた二十五番艦は、巨大な爆炎を上げ、粉微塵に吹き飛んでいた。その光景の意味を理解した頃になって、ようやく爆音がアカネ達の耳にも届く。
人間の身体というものは、金属製の装甲を跡形もなく吹き飛ばすような衝撃や、数百度の炎に包まれて、なんともないようなものではない。救助は無駄だ……理屈ではアカネにも分かる。
【二十二番。二十五番の援護は中止し、戦闘に戻れ】
それでも、通信機越しに聞こえるマキナの淡々とした指示に、激情を覚えてしまう。
「お姉ちゃん……」
「大丈夫、まだ、大丈夫……！」

歯を食い縛り、胸の中の気持ちを捻じ伏せる。マキナの判断は何も間違っていない。だからなんとか抑えられる。

マキナの合理的な指示を受け、旋回しようとしていた軍艦は再び真っ直ぐ暗雲を目指して進み出す。

『マッコウクジラ』からの砲撃はその後何度も放たれ、更に二隻が爆沈した。残る先発隊は十四隻。決して無視出来ない数の犠牲だが、残った戦力は十分に多い。

【パァギオオオオオオオオオオオオオオッ！】

しかしそれだけの戦力であっても、この空間を揺さぶる不気味な咆哮を聞くと、全く足りていないようにアカネは感じた。

【三一番、『マッコウクジラ』をソナーで確認！　距離四万八千！】

【良し、先発隊は敵を包囲しろ。奴が逃げ出そうとしたら体当たりしてでも止めるんだ。二番から四番艦、七十八番から八十番は『マッコウクジラ』の側面へと向かえ。残りの船は散開しながら奴を包囲する。先発隊以外は包囲が完成するまでは攻撃を抑え、包囲網形成を優先しろ】

マキナは矢継ぎ早に指示を出し、軍艦達は即座に動き出す。まるで彼等はマキナが直接操っているかのように、滑らかな動きで海を駆ける。圧倒的な練度を感じさせた。

【『わだつみ』も前進を始めろ。ただし包囲網より後方に位置し、距離三万以上をキープ

するんだ。奴の知能は相当に高い。『わだつみ』に気付いたら、真っ先に狙ってくる可能性がある。隠蔽と回避に専念し、攻撃は指示があるまで行うな】

そんな彼等に比べると、アカネ達の練度なんてないも同然だ。

「え、ええ。分かってるわ。アオイ、暗雲の方に向かって。言われた通り、包囲網から距離は取ってね」

「うん、分かった」

一瞬の迷いを挟みつつ、『わだつみ』も動き出す。

暗雲に近付くほど、そこで起きている光景もよりハッキリと見えてくる。先発隊は既に攻撃を始めており、艦砲から噴き出す炎と黒煙が周囲を漂っていた。あまりにも多数の船が絶え間なく砲撃をするものだから、まるで一帯が黒い霧に包まれているかのよう。船の姿が擦れて見え難いほどだ。

だが、それでも『奴』は肉眼でもハッキリと見えた。

黄金の輝きに包まれ、何十という砲弾を受けても平然としている怪物――――『マッコウクジラ』の姿は。

「っ……また会えたわね……今度こそ……！」

「……お姉ちゃん……」

唇を噛み締めるアカネを、アオイは不安そうに見つめる。

そんなアオイに、アカネは目もくれず。
「アオイ。舵は任せたわ」
ただ一言、声を震わせながらそう伝えた。
「……うんっ！」
なんだか嬉しそうなアオイの声に、アカネの口からは自然と息が漏れ出る。アカネの口許に笑みが戻った。
今はまだ静観の時。アカネ達の乗る『わだつみ』は軍艦の中に紛れるようにして進んでいく。
その間も、軍艦と『マッコウクジラ』の戦闘は続く。
先発隊の砲撃をいくら受けても、『マッコウクジラ』は怯みもしない。悠々と狙いを付け、頭部から生体砲弾を射出。距離を詰めた事で狙いはより正確になり、着弾までの時間も短くなる。薄い弾幕は呆気なく抜け、砲弾は次々と軍艦を直撃。一発だけでも航行不能の重傷を負い、二発も受ければ爆沈する。着実に、先発隊は摩耗していた。
だが、それでも彼等は怯まない。仲間が海に還ろうと、自分の身が朽ちかけても、どの船も一メートルと退かずに攻撃を続ける。その命懸けの猛攻に、如何に電磁フィールドに守られていようと不快さを覚えるのか。『マッコウクジラ』は執拗に、先発隊への反撃を繰り返す。

為す術なく沈んでいく様は、犬死にのように思える姿だ……しかし先発隊の犠牲は、無駄とはなっていない。彼等が『マッコウクジラ』の意識を惹き付ける事で、他の船は悠々と包囲網を形成出来たのだから。

そして準備を終えた軍艦六十隻以上が、一斉に砲門を『マッコウクジラ』へと向けた。

【先発隊は退却を開始。他全艦は射撃を開始しろ！　撃って撃って撃ちまくれ！】

マキナの勇ましい掛け声と共に、軍艦達の『総攻撃』が始まる。

周囲をぐるりと囲う軍艦達の砲が次々と火を噴く。総数六十隻以上の大艦隊による一斉射撃が始まった。放たれた四十センチの金属塊は正確に『マッコウクジラ』へと向かい、直撃する。

巻き上がる爆炎は、一瞬にして『マッコウクジラ』を覆い尽くす。『マッコウクジラ』も反撃を試みて　―　センサーのようなものを備えているのか、爆炎に視界を遮られているのに射撃はかなり正確だ　―　何隻か撃沈させるも、大軍の前では焼け石に水。艦砲射撃の勢いは衰えず、何時までも続く。

あまりにも爆炎塗れで、アカネには何が起きているのかさっぱり分からない。しかし作戦通りであるなら……少しずつ、『マッコウクジラ』の電磁フィールドは摩耗している筈。そして『マッコウクジラ』自身、迫り来る危機的な状況を察しているに違いない。

故に爆炎の中から、纏う光を微かに弱めた『マッコウクジラ』が飛び出すのは必然だっ

た。

「！　『マッコウクジラ』が出てきた！　これは、逃げるつもり……!?」

現れた『マッコウクジラ』の姿に、アカネは動揺を覚える。『マッコウクジラ』の速度は、アカネが見たものですら駆逐艦級を上回っていた。本気で逃げようとすれば、包囲網なんて簡単に抜けてしまう。

このままでは大勢の犠牲が無駄になる。

そんな気持ちを抱きながらも、アカネが『わだつみ』を動かさずに済んだのは、これが想定済みの事態であったから。

マキナは既に策を用意していた。故に彼女はこう叫ぶ。

【逃がすな！　八十二番から八十五番、奴を止めろ！】

海上には存在しない、四つの船の名を。

そしてそれに呼応するかのように、『マッコウクジラ』の真下から水飛沫が上がり、海面から巨大な物体が生えてくる。『マッコウクジラ』はその物体に驚いたのか身動ぎしたが、如何に駆逐艦より速くとも、僅か数メートル下から飛んでくる物体を躱す事は叶わず。

海面から生えた巨大な銛が、『マッコウクジラ』の弱った電磁フィールドを貫いた。

16

　銛が電磁フィールドに突き刺さった瞬間、『マッコウクジラ』は明らかに驚いていた。これは一体なんだ？　なんで海からこんなものが生えてくるんだ？　その顔には、人間にも分かるぐらいそんな感情がありありと出ている。
　これこそがマキナの用意した安全な拘束方法――――『潜水艦』から銛を打ち込むというものだ。
　本来海中は海生物の領分であり、潜水艦など使い物にならないとされていた。だが『マッコウクジラ』はあまりにも電磁フィールドが強力で、海中に潜る事が出来ない。故に潜水艦は真下を取る事が出来、そこから銛を打ち込めたのである。マキナが言っていた八十二番から八十五番は、潜水艦に割り振られていた番号だ。
　銛が貫けたのは電磁フィールドの表層で、『マッコウクジラ』の肉体にまでは届かない。しかし銛の先端には複雑怪奇な形状の返しがあり、電磁フィールドに食い込んだまま外れなかった。
「?、電磁フィールドに食い込んでる!?」
「なんでも銛の先端の形が、電磁フィールドが持つ反発力と、周囲に展開する力に拮抗す

るようになってるとかなんとか……人類の科学力も、まどまだ捨てたもんじゃないわね」

驚くアオイに、アカネはマキナから聞いた理論を説明する。とはいえアカネもその理論をきっちり理解している訳ではないが……

それでも確かに分かる事が一つ。

この銛により、『マッコウクジラ』はその動きを大きく妨げられるという事だ。

【パ、ギィイイイイイッ……！】

『マッコウクジラ』は唸りを上げながら逃げようとするが、銛は四隻の潜水艦と鎖によって繋がっている。如何に巨体を誇る『マッコウクジラ』でも、簡単には潜水艦四隻の重さを振り回せない。

それでも僅かに動いているあたり、パワーでは潜水艦四隻分を上回っているようだ。恐るべき馬力であるが……動きは遅い。

これなら狙いを付けるのに、なんの支障もないだろう。

【捕縛完了。動きの妨害に成功しました】

【良し、潜水艦部隊の任務は完了した。全艦、攻撃を継続せよ。ただし鎖を傷付けるような間抜けは晒すなよ】

マキナの指示により、再び攻撃が始まる。

【ギィオオオアオアアアア!?】

爆炎に包まれ、『マッコウクジラ』の悲鳴が上がった。容赦ない砲撃だが、銛は『マッコウクジラ』の真下にあるため、電磁フィールド上部に命中する砲弾で傷付く恐れは殆どない。

『マッコウクジラ』も逃げ切れないと察したのか。動くのを止め、反撃の砲撃を再開する。しかし向こうも焦りを覚えているのか、今までと比べて精度が明らかに落ちていた。電磁フィールドの展開に注力しているのか砲撃の頻度も低下気味だ。

明らかに『マッコウクジラ』は弱っている。

爆炎に包まれその姿が殆ど見えなくても、奴の力が少しずつ衰えている事は、望遠レンズを覗き込んでいるアカネの目にはハッキリと見えていた。

【潜水艦部隊が電磁フィールドの大幅な出力低下を感知した。『わだつみ』、出番だぞ】

故にマキナから飛んできた指示への覚悟は、既に決めている。

「待ちくたびれたわ。待たされた分、大暴れしてやるんだから！　アオイ！」

「うん！　全速前進で突っ込むよ！」

アカネの激情に呼応し、アオイが、そして『わだつみ』が動き出した！

大海原を切り裂き、『わだつみ』は真っ直ぐ『マッコウクジラ』目掛け突き進む。

最早『マッコウクジラ』は砲撃を止め、軍隊の苛烈な艦砲射撃に耐えるばかりとなっ

ている。しかしマキナの御用学者曰く、軍艦達の砲撃では『マッコウクジラ』の電磁フィールドは破れない。このまま攻撃を続けても、いずれ弾切れを起こし、『マッコウクジラ』の反撃が始まってしまうだろう。

ここで止めを刺さねばならない。

「アオイ！　最大火力を叩き込む！　九十度転換！」

「分かった！　Ｇに気を付けて！」

確実な攻撃を与えるべく、『マッコウクジラ』を射程圏内に捉えた『わだつみ』は急旋回。アカネ達を潰さんばかりの慣性を発生させながら、側面を『マッコウクジラ』へと向けた。

同時にアカネは望遠レンズを覗いたままコンソールを操作し、『わだつみ』の全砲門を旋回させる。目標は無論、真横で懸命に耐えている『マッコウクジラ』。

三連装六十センチ砲九門、二連装四十センチ砲十六門、十センチ砲十五門……どの軍艦よりも非効率で、どの軍艦よりも過激な数と種類の砲台が、『マッコウクジラ』を捉えた。

「『わだつみ』、攻撃を開始する！」

そしてアカネは操縦桿を通して『わだつみ』の射撃システムに指示を叩き込む。

全砲門解放、後先考えずに撃ちまくれ――――と。

その命令に応えるべく、『わだつみ』の砲門が一斉に火を噴いた！

全砲門の同時攻撃はさながら雷鳴が如く爆音を轟かせ、今も射撃を続けている軍艦達の艦砲音を掻き消す。一発当たり四トンに達する六十センチ砲弾は音速の四倍もの速さで突撃し、『マッコウクジラ』が居るであろう爆炎中央に着弾。

他の艦砲による爆風を吹き飛ばし、自らが発した爆炎だけで『マッコウクジラ』を覆い尽くす。続く四十センチ砲達も次々と命中し、爆炎をより派手なものへと彩る。

【ギイイイイオオオオオオオオッ!?】

やがて響く、苦悶に満ちた叫び。

恐らく砲弾は電磁フィールドを貫いていない。されどその衝撃波は電磁フィールドで中和しきれず、到達したと思われる。

つまり、『マッコウクジラ』に攻撃が届いたのだ。

「よしっ！　攻撃を継続！　全砲門が使える角度を維持したまま『マッコウクジラ』に接近して！」

「う、うん！　分かった！」

『わだつみ』は『マッコウクジラ』に側面を向けたまま、走り始める。緩やかな弧を描くような軌道での接近であり、一メートル距離を詰めるのに何十メートルもの前進を必要とした。それでも着実に距離は縮まり、空気抵抗を受ける距離が減る分、砲弾着弾時

の衝撃はより大きくなる。
火を噴く度、六十センチ砲が与える打撃は大きくなる。『マッコウクジラ』の悲鳴も大きくなり、もう止めてくれ、助けてくれと言っているように聞こえた。
思えば、コイツもまた野生動物でしかない。
アカネ達の両親を殺したのは、間違いなく『マッコウクジラ』であろう。しかしそれがこの個体とは限らない……いや、仮に生息数が数百頭しかいなかったとしても、確率的にコイツは無関係な個体だ。
つまりこれは八つ当たりである。コイツからしたら身に覚えない事で断罪され、殺されようとしている。
率直に言って、可哀想だ。
……人というものは生殺与奪権を握る事で、やっと他者を許せるものらしい。自分の中に浮かんできた気持ちに、自らが如何に俗物であるかを感じてアカネはため息を漏らす。
だが、これは自分の復讐であるのと同時に、人類の生存を掛けた攻防だ。許すという選択肢はない。
「『わだつみ』、射撃を一時停止……全砲門の一斉射で止めを刺す！」
断続的な攻撃では埒が明かないと、アカネは『わだつみ』の砲撃を一旦止める。

射撃を止め、一斉に充填されていく砲弾の音が操舵室にも聞こえてきた。頼もしい音に、アカネの心が静まっていく。

されど、最奥で燃える炎は消えやしない。

「全砲門、撃てぇっ！」

激しく、熱い号令を受け、『わだつみ』の砲門が火を噴いた！

――――そう、火を噴いたのだ。

その瞬間、『わだつみ』を砲撃以上の揺れが襲った。

「きゃああっ!?　えっ!?　え、えっ!?」

「お、お姉ちゃん!?　な、な、何が、起きて……!?」

突然襲われた揺れに、アカネもアオイも戸惑う。先に我を取り戻したアカネは『わだつみ』に異常がないかを確かめるべく、一旦望遠レンズから目を離し、自席のモニターに表示されている情報を見た。

アカネがその目を大きく見開くのに、さしたる時間は必要なかった。

『わだつみ』に起きた異常は極めてシンプル。主砲の一つが、跡形もなく吹っ飛んでいたのだ。先の爆発は火薬が引火し、誘爆した結果か。新調された『わだつみ』の重装甲でなければ、そのまま他の砲弾の火薬にまで火が届き、爆散していたかも知れない。

だが、何故主砲が吹き飛んでいる？

『マッコウクジラ』からの砲撃か？　否、そんなものが飛んできたならソナーで反応を捉え、アオイから報告があった筈。それに照準を付けるためアカネはずっと望遠レンズを覗き込んでいたが、『マッコウクジラ』が射撃を行った素振りはない。

だとしたら何かしらの事故？　このタイミングで？

疑念が大きくなるアカネを余所に、二度目の震動が『わだつみ』を襲う。モニターを見れば、六十センチ砲が更にもう一つ、四十センチ砲が四つ吹き飛んでいた。今は発砲すらしていない。やはり事故なんかではない！

「お、お姉ちゃん……あ、あれ……」

いよいよ訳が分からなくなった時、アオイが震えながら、操舵室の窓を指差していた……いや、窓ではない。窓の外を指差していると、アカネは気付く。

途端、ぞわぞわとした悪寒がアカネの背筋に走る。

見てはならない。見たら負ける……何故か、そんな感情が脳裏を満たす。けれども見なければ、何が起きたか分からないままだ。アカネは勇気を奮い立たせ、アオイが指し示す場所を見遣る。

そこには、巨大な光の塊があった。

否、それは『マッコウクジラ』だった。『マッコウクジラ』を包み込んでいる電磁フィールドが、大きく膨れ上がっていたのだ。初めてその姿を見た時と比べ、何倍もの大きさ

に。膨れ上がった際の勢いでか、今まで姿を覆い隠していた爆炎が吹き飛ばされており、中の『マッコウクジラ』の姿が丸見えとなる。

『マッコウクジラ』は全身の血管を浮き上がらせ、目を血走らせていた。肌がほんのりとだが赤らみ、その顔には人間でも分かるほどの苦悶の色を浮かべている。

【ギ、イイィッ！】

そして苦しみに満ちた叫びを上げた

瞬間、空を満たす暗雲から降った雷が、軍艦の一つを直撃する！

雷は軍艦の主砲に命中。粉々に打ち砕いたのみならず、砲弾の火薬にまで到達したのか。主砲周りが爆発を起こし、軍艦の船体三分の一が吹き飛んだ。

一見して、不運な『事故』である。

運悪く雷に襲われる漁船は、数年に一度程度だがアカネも耳にした事がある。とはいえ大抵は船で最も高い位置にある通信アンテナに命中するもので、被害は精々高価な通信機器がおしゃかになる程度。砲台に当たり、火薬に引火するなんて、何十年に一度あるかないかの『大事故』だろう。

そんな『大事故』が、更に二度、三度と続いたなら？

間違いない。否定出来ない。これはあの『マッコウクジラ』の真の能力。

天候操作だ。

海生物には電磁フィールドや電磁パルスの有無をどうこうする力なんてない。しかし体内に生じたものを、形を変えて使うぐらいは出来る。『マグロ』が超高速で泳げるのもその応用だ。『マッコウクジラ』の電磁パルスは何もせずとも暗雲を生じさせるほど強く、その行く先を空へと集結させて雷を誘発し、波形やらなんやら用いて誘導すれば……雷を目標に向けて落とす事も可能かも知れない。

等と理屈めいた事を考えてみたが、やはり理性は現実を直視する事を拒む。天気も操るなんてあり得ない、出来る訳がないし、出来てはいけない。

そんな事が出来るのなら、そいつはもう、神と呼ぶしかないではないか。

【さ、三番！　砲塔破損！　ゆ、誘爆す――――】

【十一番駄目だ！　雷がエンジンを直撃して動けない！　なんだって一番低い場所に当たるんだよ！】

【七十一番、主砲が全門破壊された。戦闘続行不能】

呆けるアカネの耳に、続々と軍艦達の悲痛な叫びが届く。まるで否定する人間達に現実を突き付けるかのように、次々と軍艦が破壊されていく。

『マッコウクジラ』にとってもこの攻撃は負荷が大きいのだろう。電磁フィールドの中で、奴は苦しそうに喘いでいる。少なくとも八十隻を超える大艦隊は、『マッコウクジラ』を本気にさせるほどに追い詰めた。

だが、それだけ。

降り注ぐ雷撃は止まらない。砲台を貫かれた船が爆沈する。エンジンを撃ち抜かれた船が止まり、傾いて沈む。船体のど真ん中に大穴を開けられ、へし折れる。一隻、また一隻、更に一隻……頭から放つ砲撃の比ではない連射と威力に、軍艦達が次々と沈んでいく。

【怯むな！　攻撃を続けろ！　攻撃しなければ奴の防御は、ぐあっ!?】

ついにはマキナが乗る一番艦『ワシントン』さえも雷鳴の餌食となった。一番艦の砲台が弾け、爆散する。余波を受けた司令室の壁と窓は、捲れ上がるようにして裂けていた。

そこに止めとばかりに、追撃の雷が落とされる。砲弾に火が付いたのか、一番艦の船体前方が吹き飛んだ。剥き出しの司令室に、灼熱の炎と、銃弾のように細かくて速い金属片が飛んだ事だろう。中の人間がどうなったかは、語るまでもない。

司令官を失い、いよいよ戦場の混乱は留まる事を知らなくなる。攻撃する船、逃げ出す船、右往左往する船。統率は失われ、部隊としての体を成していない。

「ま、まだ……まだ『わだつみ』は……」

それでもアカネは戦う意思を失っていなかったが、僅かに砲台を動かした瞬間、雷撃が砲台に襲い掛かる。最後の主砲が破壊され、副砲も狙い撃つように無数の雷が落ち

た。鋼鉄の砲台を貫いた雷撃は砲弾に火を放ち、無数の爆発を『わだつみ』の表側で引き起こす。特に主砲の弾薬より生じた爆発は、近くにあった『わだつみ』の操舵室を歪め、破壊するほどの威力があった。

『わだつみ』の火力喪失後は、もう『マッコウクジラ』の独壇場だった。逃げようとする船も、反撃しようとする船も、何もしていない船も……降り注ぐ天の裁きは、全てを海の藻屑に変えていく。何人たりとも見逃してはくれず、通信機から発する悲鳴と懇願も聞き入れてもらえず。

時間にして、五分も掛かっていない。

たった三百秒にも満たないうちに、『わだつみ』と八十隻の軍艦は、『マッコウクジラ』によって粗方砕かれた。

「ぐ……アオイ……生きてる……？」

「な、なんと、か……」

『わだつみ』の操舵室にて、辛うじて生き長らえたアカネは妹の無事を確かめる。姉妹仲良く爆風で吹き飛ばされ、操舵室で横になっていた。

アカネは起き上がり、室内を素早く見渡す。操舵室の窓は軒並み割れ、中の機械や壁には、爆発によって飛ばされてきたと思われる金属片が突き刺さっていた……実のところ、アカネの腕にも大きな金属片が突き刺さっている。血がだらだらと溢れ、辺りを赤

黒く染めていた。とはいえこんな程度、海で生きていれば掠り傷のようなものだ。
遅れて起き上がったアオイの姿も見たが、致命的な傷は負っていないように見える。折れた骨が肺を突き刺している、内臓が破裂しているなどの可能性は否定出来ない。しかしアオイは、少なくとも姉の目には苦痛を抑え込んでいるようには見えなかった。むしろアカネの腕の傷を見て酷く狼狽するぐらいだから、自分より酷い怪我はしていないとアカネは判断する。
酷い惨事だが、『わだつみ』の重装甲のお陰で船体そのものが吹き飛ぶ事はなかった。飛んできた破片が致命的な場所に当たらなかったのは、幸運と呼ぶしかない。
……『わだつみ』級の重装甲を積んでいる船は、他にいない。自分達ほどの幸運に恵まれる可能性なんて皆無だ。
窓を失った操舵室から、絶望の景色が一望出来た。
動かなくなった船は轟々と炎を上げており、立ち昇る黒煙が周辺を黒く埋め尽くす。されどその中であっても、『マッコウクジラ』の電磁フィールドは煌々と輝き、存在感を露わにしていた。何もかもを破壊し尽くし、あらゆるものを殺戮し、その事を誇るようにラッパのような咆哮を上げる。
その姿は、正しく神のよう。
驕れる人類に鉄槌を下すべく現れた、神にも等しき存在感。否、神そのものではない

か。天候を操り、『神鳴り』を降らしているのだ。これが神の所行でないのなら、一体なんだというのか。

そして神を縛り付ける事など、出来はしない。

【は―じゅ――ひ、引っ張――！】

壊れかけた通信機から聞こえる、断片的で、悲痛な言葉。その言葉の意味と、誰が発したかは、すぐに明らかとなる。

『マッコウクジラ』が浮上を始めたのだ。動きはゆっくりだが、着実に空へと空へと浮かんでいく。するとどうだ。海中から『マッコウクジラ』に銛を打ち込んでいる潜水艦も、引き上げられるではないか。

【だ、駄目だ！　止められない！　おい！　海上部隊何が起きている⁉　何が】

浮上し、距離が縮んだからか。潜水艦の声がハッキリと聞こえるようになり、直後、潜水艦の背中が海面に見えた。

『マッコウクジラ』は彼等に判断する時間すら与えず、神鳴りを天から斜め向きに四発落とす。強力な放電現象は潜水艦の装甲にひびを入れた。通信機から悲鳴が聞こえたのは一瞬……次に聞こえてきたのは、ざあざあと鳴る流水の音のみ。

『マッコウクジラ』はまた雷を落とし、銛と繋がる鎖を焼き切る。鎖が海面に落ちるのと共に、潜水艦達は海底へと沈んでいく。

そうすればもう、『マッコウクジラ』を邪魔するものは何もなかった。

１７

【パァアギオオオオオオオオンッ！】

自由を取り戻した神は、大海原に自分の声を響かせる。

圧倒的生命力。

桁違いの力。

高度な頭脳。

何故人間は、奴に勝てると思ってしまったのか。勝てる訳がないではないか。こんな化け物相手に勝てるなんて、考える方がおかしかった。奴は人類を衰退させた海生物をも貪り喰らう、正真正銘の神様なのに。

アカネは全てを察した。相手は神様なんだから、人間である自分達には逃げる事しか出来ない。そうだ、逃げれば良いのだ。エンジンはまだ動かせる。『わだつみ』の装甲なら、あと何発か神鳴りをもらってもエンジンまでは到達しないかも知れない。このままでは奴が周辺の海生物を食べ尽くす？　人類文明の後退？　そんな事を考える余裕なんかない。

妹を、たった一人しかいない家族を守るためには――――

「お姉ちゃん！」

ふと聞こえたアオイの言葉で、アカネは我を取り戻す。

何時の間にか、アオイが自分の手を握り締めていた。その事を理解した途端、アカネは自分の身体が震えている事に気付く。顔を触れば、ねっとりとした汗が頬を伝っていた。

「お姉ちゃん、大丈夫!? やっぱり腕の傷が痛むの!?」

「え、あ、いや、痛み事は痛むけど、そこまでじゃ……」

「本当に!? 無理してない!? も、もしかして何処か骨折して……」

あわあわおろおろ。アオイは右往左往し、目には涙も浮かべ始めた。心配してくれるのは嬉しいのだが、その姿はなんだか滑稽で、思わず頬が弛んでしまう。

――――ああ、アオイの手は冷たい。

こんなにも冷たいのに、握られていると心がポカポカしてくる。立ち上がる勇気をもらえる。『お姉ちゃん』であろうという気持ちになる。

そうだ、自分はお姉ちゃんだ。

何よりアオイに頼まれたではないか。自分の冷たい心を、温めてほしいと。逃げたがる自分の心を、引っ張り上げてほしいと。

なのに、我先に逃げ出してどうする？

「……お姉ちゃん、これから、どうしたら良いの……？」
今にも泣きそうな妹をほったらかして、何処に行こうというのか。
「……アオイ。アオイは、どうしたい？」
「……私は、逃げたい。逃げたいけど、でも……」
「アイツは倒したい？」
「……」
無言のまま、アオイはこくりと頷く。そう、と一言だけ呟いて、アカネは天を仰ぐ。天井は吹き飛び、暗雲が目の前に広がっていた。
妹はアイツを倒したいという。
だったら姉である自分が、おめおめと逃げ出す訳にはいかない。
倒れそうになる妹を支えるのが、『お姉ちゃん』の役目だ！
「アオイ、三分だけ時間をちょうだい。その間にアイツが何かしてきたら、何をしても良いから時間を稼いで！」
アオイの答えを待たず、アカネは思考に全意識を向けた。
確かに『マッコウクジラ』の力は、神にも値する出鱈目なものであろう。今の人類には、いや、全盛期の人類すらも遠く及ばない圧倒的な力の持ち主だ。二つ名を付けるなら、神様以外にあるまい。

そんな神様が、何故こんな場所まで来ている？

奴等の住処は『沖』だ。餌が豊富で、繁殖相手に恵まれて、広々としていて住み心地の良い『沖』こそが正しい住処である。なのに奴は何故だか此処……餌に乏しく、繁殖相手がいない近海なんかに来たのか。

合理的に考えれば答えは明白。奴は来たくて此処に来た訳ではない。

恐らく奴は負けたのだ。仲間か、他種かは分からないが……餌や縄張りを巡る争いで負け、心地良い住処を追われた敗北者に過ぎない。自分より弱いものを虐めて強がる、性根の腐りきった落第者だ。

つまり奴は神様どころか無敵ですらない。敗北があり得る、ごくごく普通の一生物である。だとしたら何か、奴を打ち負かすための術がある筈。

そう、例えば圧倒的打撃による粉砕。

『マッコウクジラ』の纏う電磁フィールドは出鱈目の一言に尽きるが、『わだつみ』の六十センチ砲ならば多少は揺るがす事が出来る。つまり「物理攻撃では破壊不可能」という代物ではない。防御力以上の力を与えれば砕け散る、ちょっとばかし非常識な堅さの壁でしかないのだ。そんな事は数多の海生物との戦いで知っていたのに、あまりの硬さに失念するとはなんたる醜態か。

電磁フィールドなどただの壁。砲撃は通じないが、あの手を使えば……

「……いや、駄目……逃げられる……！」

閃いた名案だったが、アカネは首を横に振る。この作戦が成功するには、『マツコウクジラ』の動きを封じる必要がある。しかし今までその役目を担っていた潜水艦達は、今し方全て沈められてしまった。

あと一手なのに。その一手があれば倒せるのに。現実逃避していた間に、その可能性が潰えてしまった。

最早ここまでなのか。

再び湧き上がる諦めの思考を抱いた――――そんな時だった。

【足止―をす―ば良い――な】

通信機からぷつぷつと、途切れ途切れの声が聞こえてきたのは。電源が入りっぱなしだったのか、破壊の衝撃で入ったのか……理由を考える必要はない。

「マキナ!?　生きてたの!?」

【勝手に、殺―ないでもら――いな。とはいえ、片腕―動かな―が】

思わず通信機に飛び付き、問い詰めるアカネに、通信機の向こうからマキナンの声は答えた。言葉遣いこそ強気だが、乱れた息遣いが聞こえ、マキナが無事とは言い難い状態であると物語る。

【私の―が奴を足止めする】

しかしどうやら、闘志は失われていないらしい。
「……頼める？」
【元より我々が足止めを担――止めはお前達に任せ――いう作戦だ。当初―らなんの変更も入っていない】
「うん、ありがとう」
【感謝の言葉は、――成功後に言うもの―】
途切れ途切れの音声の中で最後に聞こえた、ふふん、という笑い声。とても誇らしげで、楽しそうで、儚げで。
【全軍、生きている者達に命じ――！　何がな―でも、奴を拘束するぞォォォッ！】
だからこの号令が、今にも最期の断末魔のようにも聞こえたのに。
【【【了解っ！】】】
なんの躊躇もなく返された軍人達の答えに、諦めなんてものは感じられなかった。
エンジンを轟かせ、一隻、また一隻、黒煙を吹きながら軍艦達が動き出す。その歩みは決して速いものではない、否、むしろ緩慢とすら言えるぐらい遅い。先の雷撃により、どの軍艦も大きな傷を負っている。真っ直ぐ進むだけで船体はぐらぐらと揺れていて、今にも自壊しそうだ。
こんな状態で砲撃なんてしようものなら、それだけで船が吹き飛びかねない。仮に攻

撃したところで、八十隻が寄ってたかってようやく弱まるだけの電磁フィールドを破れる筈もない。

動き出したひ弱な艦隊を、『マッコウクジラ』が恐れる訳がなかった。

【パギギギィオアアアア！】

『マッコウクジラ』は雄叫びを上げ、その叫びに呼応して雷が降り注ぐ。

雷は傷だらけの軍艦達を直撃し、甲板や生き残っていた小口径の砲台を打ち砕く……が、誘爆を引き起こしたり、船体そのものが吹き飛んだりはしない。軍艦達は構わず前進し続ける。

さしてダメージが入らなかった事に『マッコウクジラ』も違和感を覚えたのか。全身を包む電磁フィールドを一層光らせ、追撃の雷鳴を轟かせる。秒速二百キロの速さで猛進する電撃は、鈍間な軍艦を正確に撃ち抜いた。

ところが軍艦達は沈まない。

『マッコウクジラ』は動じたように、身動ぎをした。今まで面白いように倒せていた相手が、よろよろしながら出てきたのに、今度は何故か全然倒せないのだ。知能が高いからこそ、混乱するのも無理ない。

対して船乗りであるアカネは、その光景の原因を瞬時に理解した。

確かに『マッコウクジラ』は雷を操るという、神の如く力を持っている。されど雷と

は電気であり、物理的な破壊力に乏しい……そう、仮に直撃を受けたところで、普通は通信機器が壊れる程度なのだ。

『マッコウクジラ』が雷攻撃により次々と軍艦を落とせたのは、彼等の砲台にある砲弾が雷撃の熱量によって引火・誘爆したのが一番の理由だ。逆に言えば、引火さえしなければ機材が少し吹き飛ぶ程度でしかない。

今この場に生き残っている船は、どれもが幸運にも誘爆を免れたか、耐え抜いた者達である。

それは、雷撃が最も通じにくい相手だった。

【ギ、ギィオオオオッ!?】

困惑するように、慌てるように、『マッコウクジラ』は何度も何度も雷を落とす。それは時折船のエンジンを撃ち抜いたり、残っていた微かな弾薬を誘爆させたりして、船を沈める事もあった。だが、これまでのような勢いはもうない。

十隻近い軍艦が、『マッコウクジラ』を取り囲む。

やがて一隻の軍艦――――マキナの操る一番艦が、ゆっくりと生き残った砲台を起動する。それはたった八センチほどしかない小口径の砲で、今まで一度も使われていないもの。『マッコウクジラ』も左程脅威を感じていないのか、或いは動揺していて気付いていないのか、砲の存在を意識していない。

否、そもそもその砲台は『マッコウクジラ』を向いていない。
砲台の先端が向いていたのは、仲間の船。
【チェインを射出する！　六番、任せたぞ！】
ローエングリンが宣言するや、砲台は火を噴く！
そして仲間の船目掛け、鎖付きの碇が射出された！
碇は仲間の船を飛び越え、船体の向こう側に着水。すると碇を放った砲台は一気に鎖を回収していき、海から上がった碇が仲間の船に引っ掛かった。
仲間の船はそのまま突撃。動かない一番艦を機転にして鎖はぐるりと周り、『マッコウクジラ』に迫る！
すると鎖は縛り付けるように、『マッコウクジラ』の電磁フィールドに纏まり付いた！
【ギ、ギギッ!?】
突然の拘束に、『マッコウクジラ』は後退しながら振り解こうとする。しかしそれを見逃すような軍人達ではない。生き残っていた小さな砲から鎖を射出し、仲間の船に引っ掛け、次々と『マッコウクジラ』の周りを回る。中には『マッコウクジラ』の頭上を通り過ぎ、上から押さえ付けるものもあった。鎖は電磁フィールドに阻まれ奥までは届かないが、船が締め付けるようにぐるぐると回るため、弾き飛ばされる事もない。
これこそマキナが言っていた、リスクはあるが確実な捕縛方法。

船から射出した鎖により、『マッコウクジラ』を簀巻きにするのだ！

【ギ、ギ、ギ、ギィ……！】

『マッコウクジラ』はようやく自分が拘束されている事実に気付いたのか。激しく身動ぎをし、鎖を振り払おうとする。それが駄目なら浮上しようとする。

しかしどれも上手くいかない。

当然だ。電磁フィールドは既に縛り上げられ、藻掻いたところで今更解けるような状態ではない。浮上するのも、三隻四隻の時ならまだしも、十隻も相手出来るほどの馬力はない。

何もかもが後手後手。判断ミスが積み重なり、自ら招いた大きなトラブルに対処出来なくなっている。

いよいよ化けの皮が剥がれてきたのだ。弱いものいじめで粋がっていた、惨めな泣き虫という正体が露呈する。

今こそ好機。

「マキナ、軍人さん……感謝するわ」

【だから礼は勝つ―で取っておく―……待て、まさかお前】

「あら、私は勝つわよ。あと死ぬ気もないから」

感謝の言葉を伝えたアカネは、通信機の電源をオフにする。それからゆっくりと、小

さな深呼吸をして身体の中の悪いもの……躊躇いや迷いの感情を吐き捨てた。
顔を上げた時、アカネにはもう、迷いなんてない。
「アオイ！　『マッコウクジラ』に向けて突撃！」
「……う、うん……お姉ちゃん、あの、念のために訊くけど……使える武装、もう残ってないよね？」
「ええ、そうみたいね」
「……どうやって、『マッコウクジラ』を倒すの？」
アオイからの疑問に、アカネは満面の笑みを返した。それは獰猛な獣のような笑みであり、同時に無邪気な子供のような笑みでもある。
そんな笑みを浮かべているアカネが、自分の考えを伝える事に躊躇する筈もなく。
「とーぜん、全速力で体当たり――――ラムアタックよ！」
臆面もなく、『作戦』をアオイに伝えた。
アオイは口をぱくぱくと、酸欠に喘ぐ海生物のように空回りさせる。次いで顔を顰め、ぶんぶんと頭を振り、大きなため息。
それからゲラゲラと、大笑いした。
「あっははははっ！　もう、何処まで文明レベル下げるつもりな訳？　ラムアタックとか、紀元前の攻撃方法じゃん」

「仕方ないでしょ。アイツの電磁フィールドを破るには、『わだつみ』の火砲以上の打撃が必要なんだから」
「そうだけどさぁ……海生物は神が文明をリセットするために遣わした、なんて世迷い言を書いた古文書があるらしいけど、案外本当かもね。強い奴ほど、対抗策が原始的になるんだから」
淡々と悪態を吐きながら、アオイを操縦席のコンピューターを弄る。行っている操作内容は、アオイの後ろに居るアカネにも見えた。
エンジンリミッターの解除である。
「こうなりゃ自棄だ！　本気で突っ込んでやる！」
口では荒々しい文句を言いながら、アオイもまた笑顔でエンジンをフル稼働させた！
限界を超えるよう指示された『わだつみ』のエンジンは、普段ならば決して立てない異音と共に膨大なエネルギーを生産。穴だらけの船体は少しずつ、着実に加速し、動き出す。
『わだつみ』の最高速度は五十ノット。だが、暴走させたエンジンは通常よりも遥かに大きなエネルギーを生み出し、船体を六十ノットにまで加速させる。即ち総重量五十万トンの塊が、秒速三十メートルもの速さで突撃しているのだ。躊躇い一つ見せず、真っ直ぐに。

正面から相対した『マッコウクジラ』が何を思ったかなんて、考えるまでもない。
【パギオオオオオオオオオオオオッ！】
一際大きな咆哮と共に、空が唸りを上げ、雷を落とす！　それも一本二本などではなく、十数本もの数が！
『わだつみ』は降り注ぐ雷の雨を受け、大きな揺れに見舞われる。甲板が破損し、至る所で起きた火災を知らせる警報が、操舵室の中を喧しく満たした。
しかし航行に支障はない。
「止まるな！　突き進めっ！」
「あったり前でしょっ！」
『わだつみ』はスピードを落とす事なく、直進を続けた！
『マッコウクジラ』は何度も何度も雷を落とすが、『わだつみ』もまた誘爆を耐えきった船だ。最早爆発するような火薬は何処にも残っておらず、雷は金属板を打ち砕くばかり。エンジンに当たれば脅威だが、そのエンジンは分厚く頑強な装甲が何重にも重ねられ、雷は届かない。
『わだつみ』は止まらない。神の鉄槌などものともせずに。
【ギ――――ギイイイッ!?】
迫り来る『わだつみ』に、『マッコウクジラ』は悲鳴染みた叫びを上げた。鎖で拘束さ

れた電磁フィールドの中を、卵の中でぐるぐる回る稚魚のようにのたうつ。そんな事をしても、『わだつみ』は止まらないというのに。

『マッコウクジラ』は明らかに恐れていた。

されど恐怖は時に成長を生む原動力となる。暴れ回っていた『マッコウクジラ』は不意にその動きを止め、ゆっくりと『わだつみ』の方を睨む。

そして頭に付いている三本の角を、『わだつみ』に向けた。

砲撃をする気なのはすぐに分かった。雷撃と違い、生体砲弾の方は爆発を起こし、船体に大きな損害をもたらす。砲台と共に多くの装甲を引っ剥がされ、丸裸となった今の『わだつみ』にとってはこちらの方が雷撃よりも遥かに危険だ。

悪寒でアカネはぶるりと身体を震わせ――――『マッコウクジラ』はその姿を見ているかのように、口角を歪めた、ように見えた。

瞬間、『マッコウクジラ』の頭が火を噴く！　電磁フィールドに巻き付く鎖の隙間を潜り抜け、生体砲弾三発の砲弾が『わだつみ』に迫った！

「――――ッ！　回避……」

「無理！」

思わず避けるよう指示しようとするアカネだが、アオイは遮るような早さで拒否する。エンジンを暴走させてまで出している今のスピードで下手に急旋回なんてしよう

ものなら、船体が横転しかねない。取れる回避運動はほんの少し向きを変えるのが精々。これでは真っ直ぐ飛んでくる砲弾は避けられない。

迫る着弾。アカネは忌々しさで顔を顰めた。

が、すぐに笑みを浮かべる。

砲弾はアオイの横転ギリギリの回避を嘲笑うように、甲板上部に三発全てが着弾。なんらかの化学反応を起こし、爆発する。人類が持つ兵器と十分に渡り合える威力に、『わだつみ』は激しく揺さぶられる。

「きゃあっ!?　お、お姉ちゃ……」

「大丈夫!」

受けてしまったダメージに悲鳴を上げるアオイだったが、今度はアカネがアオイの言葉を遮る。

それからにやりと、勝ち誇った笑みをアオイに見せ付け

「戦艦が簡単に沈むもんか!」

力強く、そう断じた。

あまりにも主観的。あまりにも願望混じり。アオイは呆けたように目を点にして、ポカンと口を開けっ放しになる。

その呆け面がアカネと同じ笑顔に変わるまで、さしたる時間は必要なかった。

「もう！　それ古典映画の台詞じゃん！　お姉ちゃんが大好きなやつ！」
「一度は言ってみたかったのよ！　もう回避なんて必要ない！　沈む前に突っ込め！」
「りょーかーい！」
　アカネの熱さに感化され、アオイは船の向きを整える。
　重量五十万トンを超える『砲弾』の照準が、固定された瞬間だ。そして砲弾の運命は二つに一つ。
　届くか、届かないか。
【ギオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！】
　『マッコウクジラ』の砲撃が、『わだつみ』を撃ち落とさんとする！
　迫り来る三つの砲弾。『わだつみ』にはもう迎撃可能な装備など残っていない。穴だらけになった船体前方甲板に全てが撃ち込まれ、爆発という使命を全うする……しかし『わだつみ』は揺らがない。そこにあった主砲は、既に大破している。金属板が空を舞っただけだ。
　続け様に放たれる三連撃は、『わだつみ』の側面を狙ったものか。回避を誘発する拡散した軌道を、しかし『わだつみ』は全て無視。たった一発だけの直撃弾は、穴だらけの区画を一層のゴミ屋敷に変えただけ。
　三度迫る砲弾は、小細工なしの直撃コース。前部甲板は跡形もなく吹き飛ばされ、剥

き出しの操舵室に居るアカネ達は物陰への退避を強いられる。それでも、『わだつみ』はスピードを落とさない。

最早『わだつみ』の前半分は炭化したかのように黒焦げで、数千メートル級の海生物に丸かじりにされたのかというような抉れ方をし、船としての体を成していない。だが、それでも『わだつみ』は沈まず、止まらない。五十万トンを超える巨体を支えるべく船底の装甲は異様なまでに分厚く、上部で起きた爆発や震動をものともせず、変わらぬ浮力を生み出し続けている。エンジン部を守る船体後方は、船体前方がひたすらに攻撃を受け止め続けたが故に大きなダメージなど負っていない。

重要な機関は未だ健在。ならばどうして沈むというのか。どうしてその速度を衰えさせるというのか。

そのような事は、あり得ないのだ！

【ギ、ギギィッ!?】

何をしても、何度やっても。一直線に向かってくる『わだつみ』が間近に迫り、『マッコウクジラ』はついにのたうち回る。『わだつみ』に背を向け、必死に逃げようとして、しかし鎖が、十隻の軍艦達がそれを阻む。

「ぶちかませえええええええっ！」

「いっけえええええええええっ！」

アカネとアオイの叫びが、祈りが、願いが、大海原へと響き渡り――――

『わだつみ』は、電磁フィールドに突っ込んだ！

六十センチ砲をも押し返す圧力が、突撃する『わだつみ』の船体を押し返す。雷撃と砲撃を潜り抜けた装甲もこの圧力によりぐしゃぐしゃに潰され、見るも無惨な鉄塊へと変貌していく。

だが、押し返す力よりも『わだつみ』の前進する力の方が遙かに大きい。

重さ四トンの砲弾を殆ど通さなかった電磁フィールドに、質量五十万トンオーバーの『わだつみ』が押し入る。巻き込まれた鎖は引き千切られ、電磁フィールドの光が陽光のような煌めきを放った。

そして秒速三十メートルという速度を殆ど保ったまま、『わだつみ』は電磁フィールドを突っ切り――――

『マッコウクジラ』の背に、鉄塊と化した船首を突き刺した。

１８

【――――ッ??!?!!】

声にならない、『マッコウクジラ』の叫びが大海原に広がっていく。

船体の震えから伝わる、柔らかなものを切り裂き、大事な硬いものを砕いた感覚。生命の主幹を壊して奪い取る、冒涜的な実感がアカネの胸を満たす。

故にアカネは確信する。

自分達は、やり遂げたのだと。

両親の仇を討ち、そして、人類存亡の危機を回避したのだと。

【……ッ！　……】

『マッコウクジラ』は一瞬身を強張らせ、『わだつみ』の方へ振り返ろうとした。目はギラギラと輝き、今し方感じた痛みと苦しみを全て怒りへと転化したかのような、おぞましい気迫を放つ。

だが、そんなのは三秒と続かない。

ギラギラとしていた瞳から輝きは急速に失われ、振り向こうとした身体も直後に脱力。未だ展開したままの電磁フィールドが、衝突により停止した『わだつみ』をゆっく

りと押し返す。されど『マッコウクジラ』はピクピクと痙攣するだけで、もう逃げようともしない。

しばらくすれば、その痙攣さえも止まってしまう。電磁フィールドも少し時間を空けて消えていく。もう、ぷかぷかと水面を浮かぶだけ。

誰の目にも明らかだった。『マッコウクジラ』が死んだ事は。

明らかではあるが、誰かが言わねばならない。無論それを断言するには適切な調査が必要であり、そのためには十分な接近が必要だ。本来ならば最後の一撃を加えた『わだつみ』がやるべきなのだが、生憎そんなハイカラな機械は最初から積んでいない。漁師は仕留めた獲物の生死を勘と経験で判断し、アカネにもそれは出来るが、これではなんの責任も負えない。

だからその役目を果たすのは、この場を取り仕切る者だった。

鎖を出していた軍艦の一隻が、ゆっくりと『マッコウクジラ』に接近する。何発も雷を撃ち込まれ、火薬の誘爆で穴だらけになった船体。もしも『マッコウクジラ』が突然暴れ出そうものなら、ボロボロの船体では体当たりどころかさざ波一つで転覆しかねない。しかし軍艦は恐れる様子もなく、ついに『マッコウクジラ』と肉薄した。

穏やかな波音だけが、しばしの間この場を満たす。アカネとアオイも思わず息を飲み、一秒が何十倍もの長さに感じられるほどの焦燥感に苛まれる。何故こんなにも長く

調べているのか、念には念を入れるにしても長過ぎないか、もしかして何か異常があるのでは、おかしな事が起きているのでは……嫌な予感が脳裏を満たして時計を見て、殆ど時間が経っていないという現実を思い知らされるばかり。

そもそもアカネ達漁師が確認する時は、目視という極めて原始的な手法である。もっとちゃんとした、科学的方法で調べたらどれだけ時間が掛かるかなんて、アカネには分からない。

実時間にして、一分。肉薄していた軍艦からぷつぷつというスピーカーの音が聞こえてきて、

【死亡確認。ミッションコンプリートだ】

広域放送で、マキナの声で結果が告げられた。

その瞬間、アカネは確かに歓声が聞こえた。

何百メートル離れていようと、分厚い金属製の壁に守られた部屋の中に居ようと、生き残った船員達の喜びの声が。否、志半ばで果てた、もう肉体から離れてしまった仲間達の声だって確かに聞こえた。

或いはもう何年も聞いていない、肉親の笑い声も……

「お姉ちゃん……私達、私達……！」

「うん、やったんだ。私達、ついにお父さんとお母さんの仇を……みんなを、守れて」

「っ！」
　アオイは突然、アカネに抱き着いてくる。妹の普段らしからぬアクティブさに目を白黒させるアカネだったが、わんわんと泣き始めたアオイを突き放すなんて出来る訳もない。
　そっと抱き締め、その涙を受け止める。
　溢れ出る感情を、アオイの中にある『熱さ』を受けて、アカネもまた目に涙を浮かべた。
　ついに五年越しの願いを叶えたアカネ。その喜びをどう表現したら良いのか、全く分からない。だけど胸の中は際限なく昂ぶっていて、だったらその昂ぶりのまま叫んでしまおうかと大きく口を開けた
　のも束の間、ベギンッ！　と何かが割れるような音が聞こえる。
　アカネが固まり、アオイも固まる。姉妹揃って硬直し、アカネはゆっくりとアオイから離れた。
　アオイはニコニコ、まだ笑みを浮かべている。アカネもニコニコ、まだ笑っていた。
「……アオイ」
「……うん。なぁに？」
「いや、さっきの音なんだけど」

「オトッテナンノコトデスカ」
「そっかー」
　アオイの口から出てきた片言返事に、アカネは雑に納得する。
　アオイの返事に疑問を挟む予知などない。自分達は今両親の仇を討ち、人類を守った喜びに浸っているところだ。そこにどうして変な音が混じるというのか。そんな空気を読まない真似を誰がする。神様だってやらないだろうし、その神様モドキは今し方体当たりでぶっ殺した訳で
　等々即座に否定的文章を脳内に走らせるアカネだったが、残念ながら『空気を読む』のは人間界のルールである。世界というのは人間の都合などお構いなしに進んでいく。
　『わだつみ』の生き残っていたセンサーが一斉に警報を喧しく鳴らし始めるのに、さして時間は掛からなかった。
「うえええええええっ!?　何!?　何が起きてるのお姉ちゃん!?」
「た、たたた多分アラートの故障よ！　あんだけガンガン砲撃喰らって穴だらけになったんだから、誤作動だってするってもんよ！　そ、それに故障の十個や二十個や三十個ぐらいあってもなんて事ないわ！　『わだつみ』は誘爆したって沈まないんだから今更どんな故障をしたところで」
「ししししし浸水警報出てるんですけどおおおおお!?」

「なんで底部装甲割れてんのおおおおおおおっ!?」

起きた警報の内容に、姉妹は揃って狼狽える。冷静に考えれば、自身を上回る体躯の相手に体当たりなんてお見舞いして無事である筈ないと分かるが……生憎、今の姉妹は勝利の余韻に酔っていた。知能指数は低下し、適切な応急措置すら執れない。

尤も、万全を期したところでどうにかなるものではなかったが。

「まままマキナっ!?　助けて!　船が沈むぅ!?」

「誰でも良いから助けてぇーっ!」

人類を危機から救った英雄は、あっさりと情けない要救助者に早変わり。

空から男と女のため息が聞こえたような気がするアカネだったが、そんな感覚はすぐに何処かへと飛んでいってしまうのだった。

１９

漁港近くの海を、一匹の海生物が跳ねていた。

『ネンブツダイ』である。三百年前の人類には、可食部の少なさと料理の手間などから食用としてあまり好まれていない魚だった彼等は、今でも立派な外道として生きていた。

海生物化によって体長は一メートル近くまで巨大化しており、一体何を食べてそこまで増えたのか、普段から数百匹ほどの群れで行動する。海生物なので一応電磁フィールドは纏っているが、ないよりマシな程度でしかない。あまりにも弱過ぎて、四十センチ砲どころか十センチ砲ですら、直撃させたら全身が吹き飛ぶほどだ。かといって普通の網なら噛み千切るぐらいには獰猛なため、網での漁獲も無理。一応機銃で眉間を撃ち抜くというのが正攻法とされているが、海生物の癖に臆病さは三百年前と大差なく、エンジン音を轟かせる漁船で接近するとそそくさと逃げてしまう。頑張って捕まえても、皮と骨ばかりで食べる場所があまりない。一応味は悪くないが、悪くないだけで特別美味くもない。何処を取っても努力に見合うものがないのだ。

結果相当な資源量がある　―　計算上は余裕で現在の全人類を持続的に養えるほど

だとか　―　にも関わらず、今でも食用として利用されていない種だ。強いて良いところを上げるとすれば、赤々とした身体が綺麗なので目の保養になるところ、ぐらいか。

「はぁ……『ネンブツダイ』は可愛いなぁ」

アカネは、そんな『ネンブツダイ』が大好きであった。

対してアカネの隣で彼女の独り言を聞いていたアオイは、跳ねる『ネンブツダイ』の姿を見て眉間に皺を寄せていた。

「……ただの外道じゃん。他の海生物からしたら餌だからやたら獰猛なのを連れてくる事があって、お陰で群れが来たらこっちが進路を譲る羽目になるし。頑張って捕まえても食べるところないし」

「可愛いは正義よ。というかあんな可愛いのを食べるなんてとんでもない。あー、可食部少なくて良かったわねぇ」

「食べられない海生物の何が良いのやら……」

手すりに寄り掛かりながら呆れるようにぼやき、アオイはじっと『ネンブツダイ』を見つめる。アカネもその隣で、『ネンブツダイ』がまた跳ねるのを待った。

二人は今、漁港に停泊する『わだつみ』の甲板の上に居る。

『マッコウクジラ』との激戦により、危うく沈没するところだった『わだつみ』は、今では再び新品のような輝きを取り戻していた。跡形もなく破壊された六十センチ砲は

キラキラと金属の輝きを放ち、四十センチ砲が船体側面にずらりと並ぶ。エンジンは新品で、アオイが不平を漏らすぐらい静かな音を奏でる。装甲も傷一つないものだ。

無論これは『わだつみ』が修理を受けた結果である。今日はその修理が終わり、ようやくアカネ達の元に『わだつみ』が戻ってきた日だ。アカネとアオイは船内を見て回り、不具合がないかを確かめている。

そして修理に必要な費用と人材を用意してくれた人物に、お礼を言おうとも考えていた。

「気に入ってもらえた、と判断しても良さそうだな」

なので今度はその人物を探そうと考えていたアカネだったが、向こうの方から来てくれたようだ。

アカネが振り向いた先には、マキナが居た。眼帯が片目を多い、右手に持った杖を突きながら歩き……左腕の入っていない袖がぷらぷらと揺れている。

彼女は『マッコウクジラ』の攻撃により、左腕を失っていた。なんでも飛んできた破片によって、付け根から切られてしまったらしい。かつての人類は優れた義手の技術を持っていたが、現代ではすっかり失われている。彼女の左腕はもう戻らない。

しかしマキナがそれを気にしているかというと、どうやらそうでもないらしい。

「……腕の傷はどう？」

「ん？　ああ、今じゃあすっかり痛みもない。むしろ軍人として一層箔が付いたな。軍の老人共を威圧するには丁度良い」
アカネが尋ねると、マキナは自身の健在ぶりをアピールするように不遜に笑う。強がりのようにも聞こえるその言葉だが、影一つない表情を見る限り、割と本気で自慢をしているらしい。
傷は男の勲章、と大昔の人間は言っていたようなので、その手の考え方をマキナも持っているのだろうとアカネは納得した……一応彼女は女性の筈だが、なんとなく納得出来た。
「無駄話をしている場合ではないな。船の方に問題なかったか？」
やがてマキナは自力で我に返り、アカネ達に尋ねてきた。アカネもその質問の答えがまだだったと、正直に感じた事を伝える。
「問題ないわ。むしろこの前より快調なぐらいね。技術者達にお礼を伝えといて」
「ふん、先日同じ修理をしたぐらいだ。そうでなくては困る。礼など不要だ」
「なんでアンタは身内にそんな厳しいのよ……」
「甘やかされた身内ほど信用ならんものはないからだ……それはそうと、もう一つ確認したい」
「？　確認？」

「万一また『マッコウクジラ』が現れても勝てそうか？」
マキナからの問いに、アカネは口を閉ざす。
『マッコウクジラ』との戦いに勝利してから、今日で二ヶ月が経っている。
当時は勝てた事、両親の仇を討てた事、人の世を守れた事……様々な喜びで頭がいっぱいだった。お世辞にも冷静だったとは言い難い。あれから時間が経った今なら、様々な事を俯瞰的に見られる。
故に、アカネはマキナの問いに即座に「Ｙｅｓ」とは答えられなかった。
「……一つ、訊きたいのだけど。あの『マッコウクジラ』について、何か分かった？」
代わりにアカネは、今度は自分の疑問をマキナにぶつける。
討伐した『マッコウクジラ』は、戦闘後マキナ達によって回収されている。調査をするとの事だった。アカネ達としても食べられるかどうかも分からない、つまり金になるかも分からないものを引き取る気にはならず、素直に任せた。
マキナ達は死骸を存分に調べ、様々な事を知っただろう。良い事も、悪い事も。
マキナの複雑な、或いは強張った表情が、アカネの予想が当たっている事を物語る。
「まず、悲しい知らせだ。我々が四百名以上の仲間と七十八隻の船を失ってようやく倒せたアイツは、生後十年に満たない子供だと判明した」
「こ……!?　う、?!?　だって……」

「残念ながら解剖によって得られた知見、そして過去のマッコウクジラの生体データから導き出したのだ。生殖器も未熟で、繁殖能力がない。成体になるには、あと十五年は掛かるそうだ」

「つまり、私達はガキンチョ相手に弄ばれていた訳ね」

動揺し、言葉を失うアオイに対し、アカネはマキナの言葉をすんなりと受け入れる。

正直なところ、予感はしていた。

アカネが考えていた通り、あの『マッコウクジラ』が『沖』での戦いに負けて追い出された存在だとしたら、最も力の強い青年～成人相当の個体だとは思えない。それらが追い出される状況なら、大人より弱い個体がたくさん近海に現れていなければおかしいのだから。

そのため考えられる『マッコウクジラ』の年齢は二通り。若い幼体か、或いは老衰した高齢個体か、である。

しかし高齢個体はあり得ないとアカネは考えていた。理由は簡単――――あの『マッコウクジラ』が、あまりにも馬鹿だったからである。奇襲してきた時は頭が回ると思ったが、逆に言えば賢く思えたのはその時だけ。攻撃をすれば簡単に釣られ、包囲網が形成されるまで気付かず、いざ危機が迫ると取り乱す。それでいて砲撃が正確なあたり頭自体はしっかり働いていると思えた。単純に思慮が浅い、経験不足のガキというのが一

番しっくりきたのである。
　これらはあくまで印象からの憶測であり、なんの証拠もなかった。それでも予め可能性を閃いておけば、心の準備というのは出来るものだ。例えそれが、どんな過酷な現実を突き付けていようとも。
「成体となった『マッコウクジラ』の体長は推定千六メートル。体重は幼体の八倍となる計算だ。電磁フィールドの出力は体内の細菌量に大きく依存している事から、成体の電磁フィールド出力は恐らく幼体の八倍近いものだろう」
「……『わだつみ』の主砲は勿論、体当たりすら効くか怪しいわね」
「強化されるのは電磁フィールドだけではない。生体砲弾も体格に合わせて巨大化するとすれば、爆発のエネルギー量も八倍近くなるだろう。射程も伸びる筈だ。そして何より問題なのは……」
「幼体より経験を積んでいる分、賢い」
　こくりと、マキナは頷く。
　懸念は他にもある。
　『沖』の海生物は『マッコウクジラ』以外にも多数存在する。それらの中には、『マッコウクジラ』すら襲って食べるような怪物がいるかも知れない。そんな怪物が近海にやってきたり、或いは怪物に追われた成体の『マッコウクジラ』が何十体と近海に流れ

込んでくる可能性もゼロではないのだ。
そんな事になれば近海の海生物は壊滅し、近海の海生物に依存している人類も滅ぶ。
人類が今も生きていられるのは、ほんの小さな奇跡や幸運が続いているお陰かも知れない。しかし奇跡と幸運は、何時の日か終わる。
人類は、何時か必ず滅びるのだ。
だが――――
「『沖』の生物が如何に強大で、恐ろしいかが分かった。勝ち目はないように思える……だが、知らなければ抗う事すら叶わない」
少なくともマキナは、それを黙って受け入れる気はなかった。
「『わだつみ』を直してくれたのは、また『マッコウクジラ』が、もしくはそれに匹敵する何かが現れた時に戦ってほしいから？」
「そうだ。再び奴等が現れた時、対抗出来るのはこの船、そしてその操縦に慣れているお前達の力が必要になる。勿論我等も準備を進めるが、時間が必要だ。だからこの船を修理した」
一切のお世辞もなく告げられた、マキナの意思。アカネはそれを受け止めると、にたりと笑みを浮かべる。
マキナはハッキリとは言っていない。しかし言外に……新たな『沖』の海生物が現れ

たら戦えと強要している。こちらの意思などお構いなしだ。或いは自分の考え方をよく分かっていると言うべきかも知れない、とアカネは考える。

受けた恩は返さねばならない。アカネは、そう考えるタイプだった。

「良いわ、やってやろうじゃない。あんなデカブツ、何度来ても返り討ちにしてやるわ」

「頼もしい言葉だ。期待しているのだから、裏切らないでくれよ……さて、我はそろそろ帰るとしよう。もしも今になって問題点に気付いたら、此処に一報入れてくれ」

マキナは懐から一枚の紙を渡し、アカネはそれを受け取る。書かれていた数字や記号の長さ・配列からして、彼女達軍の港がある座標を示す値だろう。

「分かったわ。変な欠陥があったらカチコミに行くから」

「それは怖いな。基地の防壁を強化しておくとしよう。では、長生きしてくれ」

軽口を叩き合ってから、マキナはアカネ達の前から去った。しばしアカネはその背中を目だけで追い、見えなくなったのを確かめる。

それからすぐに、アカネは自分の隣に居る妹の方へと振り向いた。先程の威勢の良さをすっかりなくして、おどおどしながら。

「え、えっと……アオイ……勝手に決めちゃったけど……」

「決めちゃったね。お姉ちゃんったら、相変わらず自分勝手なんだから」

「ご、ごめん……」

そっぽを向いて怒るアオイを見て、アカネは肩を落とす。売り言葉に買い言葉、という訳ではないが、ついヒートアップしてマキナの望むがままの事を言ってしまった。アオイの意見も訊かずに。

また暴走してしまったと反省するアカネだったが、ふとアオイはそっぽを向いていた顔をアカネの方へと戻した。顔には笑みが浮かんでいて、怒っている様子はこれっぽっちもない。

「冗談だよ。怒ってないから」

そして態度だけでなく、言葉でもそれを教えてくれた。

「ほ、ほんと？　本当に怒ってない？」

「こんな事で嘘吐いてもしょうがないでしょ。それに本当に嫌なら話の途中で割り込んでも止めるよ。お姉ちゃんを止めるのが、妹である私の役目なんだから」

アオイはそう言うと、アカネの手を強く握ってくる。

ほんのりと冷たい、妹の手。

頭の中の熱がすっと引いていくような感覚に、アカネも頬を弛ませる。向かい合ったアオイと、自然に笑顔を見せ合う。

恥ずかしいような、嬉しいような。なんとも不思議な気持ちを感じながら、アカネはもうこの冷たい手を放すまいと強く握り締めた――――

【はーっはっはっはーっ！　僕達は帰ってきたぞぉーっ！】
直後に大海原から聞こえてきた声に驚き、ぱっとアカネはアオイの手を放す。
殆ど無意識に、アカネは声がした方へと振り返る。すると港の出口の向こう側……地平線の近くに、小さな船の姿があった。人間の視力では輪郭もよく分からないほど小さなそれを見たアカネは、驚きで目を見開き、喘ぐように口をパクパクと空回りさせる。思わずアオイの方を見れば彼女も足を止め、自身を見ているアカネと目を合わせる。
忘れるものか。あんな別れを忘れる方がどうかしている。
だからこそ信じられない。あの別れから、生き残るなんて。
『彼』は『マッコウクジラ』の気を引くために、その命を賭けたのだ。あの『マッコウクジラ』から生還するなんて、あり得ない。
【漆黒船団の帰還だぁ！】
されど大海原に浮かぶ船からの通信が、全ての疑念を打ち砕く。
あの船には、コウが乗っているのだと。
「あ、アオイ！　操舵室に戻るわよ！　通信機でこっちの声を届ける！」
「う、うん！」
アカネとアオイは駆け足で船内へと戻り、操舵室でコンソールを操作する。普段通りの早さで通信機の起動を知らせるランプが点いたが、それが焦れったく思える。

「コウ！　無事だったのね!?」
　身を乗り出し、アカネは大きな声で叫んでいた。
【おお！　アカネ！　やはりその船は『わだつみ』だったんだね！】
「ええ、そうよ！　それよりもコウ！　アンタ一体どうやって『マッコウクジラ』……あの海生物から逃げ切れたの!?」
【ははっ！　なぁに、確かに強敵だったが、少々頭が弱かったようでね！　船を三隻、バラバラの方向に自動操縦で突撃させたらそっちに夢中になってね。僕達の船はその隙に可能な限り遠くまで逃げたのさ】
「は、はぁっ!?　え、そんだけ!?」
【いやー、まさか上手くいくとは思わなかったよ。本当にアイツの頭が弱くて助かった】
　驚くアカネを余所に、コウは心底安堵したようにぼやく。どうやら冗談抜きに今し方語った方法で乗り切ったらしい。
　確かに簡単に包囲を許すなどアホだとは思っていたが、まさか目の前の囮に簡単に釣られるとは……自分達の苦労が馬鹿らしく思えてきたが、前向きに考えれば幼体相手ならそうした手が通用するという確たる証拠だ。呆れるばかりでなく、しかと知見として記憶しておく。
　それに、だからこそコウは無事に戻ってこれたのだ。なら、文句を言うなどどうして

出来よう。
「……本当に、良かった」
ぽつりと零れ落ちたこの言葉が、アカネの本心だった。
自然と目が潤み、アカネは自らの目許を擦る。
【……アカネ。戻ってきた事だ、早速始めよう】
そんな仕草の最中に、コウはそう提案してきた。
涙を拭っていた事で一瞬反応が遅れたアカネは、手を下ろしてからこてんと首を傾げる。コウは何かを始めようとしているようだが、はて、特に思い当たる節もない。
「えっと、始めるって、何を？」
分からなかったのでアカネはすぐに訊き返し、
【当然僕達の結婚式だよ！】
コウは即座に答えてくれた。答えてくれたが、アカネは反対方向に首を再度傾げる。
けっこん？
ケッコン？
……結婚？
「うえええええええっ!?　な、何言ってんのよアンタ!?」
【はははははっ！　条件反射で否定しているようだけど、今回はそうはいかないよ！　何

しろ言質があるからね！】
「はぁっ!?　言質って何を」
【『次会ったら、結婚してあげるから！　だから、だから必ず生きて帰って！』】
　反射的に反論しようとするアカネだったが、コウ側の通信機から聞こえた『女』の声を聞いた途端、言葉が出なくなった。
　次いで、ギギギと音が聞こえそうなぐらいぎこちない動きで、アカネはアオイの方へと振り返る。
　アオイは心底呆れ返った苦笑いを浮かべていた。
「……何コレ。え、何時の話？」
「……えと、その……『マッコウクジラ』の攻撃を受けて、アオイが死にかけた時の話……」
「……ああ、あの時か。発破を掛ける感じに言ったの？　で、コウさんが帰ってきたと」
「いや、でもほら、あれはなんというかその場のノリというか……ね？」
「ノリでもなんでも約束は約束でしょー」
「……」
　アオイからの至極真っ当な指摘に、いよいよアカネは黙りこくる。全く以て言う通り。自分が約束した事が発端であり、コウはその約束を信じているだけ。全面的に自分

が悪い。
悪いのだが、しかし――――
乙女心というものは、複雑なのである。
「……出発」
「え？」
「出発！　全速前進で港を出て！」
「えぇー……流石にそれはどん引きなんだけど。というかもうそこまでいったら普通に恋愛だと思うし、コウさんが白馬の王子様で良いじゃん。幸せにしてくれるよ、きっと」
「良いから早く！」
渋るアオイをアカネは急かし、アオイは渋々、されど途中からにやりと笑みを浮かべながら船のエンジンを起動する。
最先端の技術が集められたエンジンが唸りを上げる。船全体が震え、パワーが満ちていく。重さ五十万トンを超える巨体が、今すぐにでも動き出せる状態となった。
「追ってくるのは駆逐艦級。試運転には丁度良いかな」
「ええい、なんとか策を考えて振り切らないと……速さでは勝ち目がないから……」
ぶつぶつと呟くアカネの顔にも、笑みが戻る。
姉妹は揃って大笑い。

「さぁ！　出発進行！　行く先は、海のどっかだぁ！」
「あいあいさーー！」
そして姉妹の掛け声に合わせて、『わだつみ』はエンジンを唸らせ動き出す。
大海原に、姉妹の楽しげな笑い声が何処までも響き渡るのだった。